

日本語用論学会

(*The Pragmatics Society of Japan*)

第1回(1998年度)大会

PROGRAM & ABSTRACTS

日時：1998年12月5日(土) 午後1時より

会場：関西外国語大学(本館)

日本語用論学会事務局：

〒573-1001

大阪府枚方市北片鉾町16-1

関西外国語大学外国語学部

澤田治美 研究室内

Tel:0720-56-1721

Fax: 0720-55-5552

日本語用論学会

(*The Pragmatics Society of Japan*)

第1回(1998年度)大会

PROGRAM & ABSTRACTS

日時：1998年12月5日(土) 午後1時より

会場：関西外国語大学(本館)

日本語用論学会事務局：

〒573-1001

大阪府枚方市北片鉾町16-1

関西外国語大学外国語学部

澤田治美 研究室内

Tel:0720-56-1721

Fax: 0720-55-5552

プログラム(目次)

受付 11:30～(本館ロビー)

総会 13:00～13:30(本館7階コンベンションホール)

司会 高司正夫(宮崎公立大学)

1. 開会の辞 高原脩(神戸市外国語大学)
2. 開催校代表挨拶 谷本貞人(関西外国語大学理事長・学長)
3. 規約の承認、会長、役員、会計監査の選出
4. 会長挨拶 小泉保(関西外国語大学教授)
5. 事務局報告、編集委員会報告
6. その他

研究発表 13:35～16:40

第1室(本館7階コンベンションホール) 司会

児玉徳美(立命館大学)

1. アフォーダンスに基づく発話解釈:
力学形容詞はなぜ行為の難度を表わすか
仲本康一郎(京都大学大学院) 2
2. 上昇調イントネーションの形式面・
意味面にみられる日英差について
(休憩)(10分) 松本恵美子(京都大学大学院) 10
- 司会 東森勲(神戸女学院大学)
3. 測量比較構文について 三原京(近畿大学) 18
4. You may want to ...
Euphemism から「文法化」へ 宮澤泰彦(福島工業高等専門学校) 24
5. A pragmatic analysis of PLEASE
and WOULD/COULD 高司正夫(宮崎公立大学) 32

第2室(本館2階多目的ホール) 司会

林礼子(甲南女子大学)

1. 英語の談話標識 you know の中心的
機能を求めて 浜口崇(元関西外国語大学大学院) 40
2. フォークサイコロジとしての語用論
(休憩)(10分) 高梨克也(京都大学大学院) 47
- 司会 西光義弘(神戸大学)
3. ローンワードの語用論的考察 松岡結(甲南女子大学研修員) 55
4. How to do things with 'relational
propositions': text organization
analysis of persuasive discourse
based on Rhetorical Structure Theory 林宅男(龍谷大学) 62
5. 命令文の語用論 阿部桂子(松山東雲短期大学) 70

第3室(本館5階56室) 司会

山梨正明(京都大学)

1. 終助詞と間投助詞のカテゴリー再編 半藤英明(静岡英和女学院短期大学) 76
2. 人称直示の語用論的対照分析
(休憩)(10分) 余維(関西外国語大学) 84
- 司会 内田聖二(奈良女子大学)
3. 私は本当に「あなた」に約束するのか?:
潜在的な人称構造に基づく「約束」行為
の認知的分析 岡本雅史(京都大学大学院) 92
4. 日本語における間接的要請文の生成と理
解に関わる語用論的方略の習得について 森貞(福井工業高等専門学校) 100
5. An analysis of dialogical connectives
in dynamic pragmatics 久保進(松山大学) 108

記念講演 16:50～17:50(本館7階コンベンションホール)

1. はじめの言葉 司会 児玉徳美(立命館大学)
 2. 記念講演 「川柳の語用論」 小泉保(関西外国語大学) 116
- 閉会の辞 高原脩(神戸市外国語大学)

懇親会 18:00～19:30(谷本国際文化センター 会費 3,000円)

アフォーダンスに基づく発話解釈
～力学形容詞はなぜ行為の難易度を表わすのか

仲本康一郎
京都大学大学院

1. はじめに ～研究目的と研究対象

本発表は、言語理解（特に、発話解釈）における推論パターンとして、アフォーダンスに基づく語用論的な解釈関数を提案することを目的としたものである。アフォーダンスという概念は Gibson (1979) の知覚理論ではじめて考案された概念であるが、本発表では、言語現象を説明する認知的枠組みとして導入する。具体的な言語現象としては、力学形容詞¹に見られる特徴的な語用論的解釈や意味拡張の方向性について考察する。

1-1 力学形容詞とは何か？ ～定義と分類

力学形容詞は、認知的／言語的に（1）のように定義され、日本語では（2）のような形容詞が含まれる。また、力学形容詞は、主語名詞（句）の“主体性”という概念にしたがって、（3）のように連続的に構成されている。

（1）力学形容詞の認知的／言語的（意味論的）定義：＝

- ① 身体的な圧力感覚を反映する形容詞
- ② 二つの項を持ち、その間にある種の力関係が成り立つ形容詞

（2）力学形容詞の例：

かたい／もろい／やわらかい、重い／軽い、きつい／ゆるい
厳しい／優しい（強い／弱い、易しい／難しい）

（3）力学形容詞の主体性： 対象形容詞 ←————→ 主体形容詞
かたい < 重い < きつい < 厳しい

1-2 具体的な言語現象 ～力学形容詞の（語用論的）用法について

「形容詞」のプロトタイプは、統語的には「一項述語」であり、意味的には「（静的）属性（static property）」を表わすと考えられる（Croft 1991:55,65）。しかし、力学形容詞のように、「二項述語」であり、二つの物体間の「力関係」のような「動的関係 dynamic relation」を表わす形容詞では、「属性」という意味規定だけでは、それらの用法、あるいは、解釈を十分に説明することはできない。

¹ 言語と認知における力学認知 Force-Dynamics（以下、FD と略する）のモデルについては、Talmy (1985) を参照。また、力学認知を反映する形容詞の意味論や FD による表示を試みたものとしては、仲本 (1998b) を参照。

例えば、力学形容詞「軽い」の意味は、形容詞のプロトタイプによると「重量が小さいこと」と規定される。²このような「属性」による意味規定は、(4)のような“科学的な”発話では全く問題がない。これに対し、(5)(6)のような用法は、このような意味規定だけでは説明できない。(5a)では、「ドアの重量」という「属性」よりも「ドアが容易に動く」という「イベント」が問題にされている。(5b)になると「ハンドルの重量」という「属性」の意味は、さらに希薄化されている (Semantic Bleaching)。また、本発表の副題でもある「行為の難易度」を表わす用法(6)では、「重量」という「属性概念」は存在しないといっている。本発表では、このような力学形容詞の振舞いに対し、アフォーダンスによる語用論的な説明を試みる。

- | | |
|-----------------|-------------|
| (4) a. ヘリウムは軽い | 参考) この荷物は軽い |
| (5) a. このドアは軽い | b. ハンドルが軽い |
| (6) a. 早起きなんて軽い | b. こんな問題、軽い |

2. 発話解釈における語用論的な解釈装置

ここでは、力学形容詞、さらには「属性」を表わす述語一般の語用論的な解釈装置としてイベントフレームとアフォーダンスを提案する。

2-1 イベントフレームの喚起

フレーム (Frame) は、Filmore (1982) によって提唱されたフレーム意味論で導入された概念であり、「いかなる概念を理解するためにもそれを包含する全体構造 (Gestalt) を理解する必要がある (ibid.:111)」というテーゼのもとに用いられている。例えば、Langacker のよく用いる例では、「斜辺 hypotenuse」という語は、「直角三角形」というフレーム (あるいは、Gestalt) のもとではじめて理解される概念である。

本稿では、形容詞とそれが修飾する名詞による“イベントフレーム event frame” (以下、イベントと略) の喚起を問題にする。形容詞/名詞がある行為や出来事と密接に結びついているとき、その形容詞/名詞はイベントを喚起する (activate) ということにする。

2-2 形容詞の解釈とイベントの喚起

形容詞の用法のほとんどは、イベントを喚起することなく理解可能である。これに対し、力学形容詞を含む、以下の二つのタイプの形容詞には、イベント喚起が重要である。この節では、特に、イベント形容詞におけるイベント喚起の問題を議論する。

² 新地 (1998) は、「重い」の意味を以下の二点から規定している。

- 1 重力による上から下への力がかかっていること
- 2 物を動かすときに動かしにくい

特に、2はアフォーダンスをそのまま表わしている。、本稿では新地とは異なり、こうした意味を語用論的な解釈ストラテジーとして提示した。

(7) イベントの喚起を必要とする形容詞

- i. イベント形容詞 — 意味論的にイベントを修飾する
例) 難易形容詞: 難しい/簡単だ 速度形容詞: 速い/遅い
- ii. 疑似イベント形容詞 — 語用論的に推論を介してイベントを修飾する
例) 力学形容詞: かたい、重い、きつい 等

言語表層上、イベント形容詞が、イベントではなくモノやヒトを修飾するときは、イベントの喚起が必要となる。以下の例文では、名詞句「論文」「洗濯機」から「読む」「洗う」などの行為が喚起されて(8b)(9b)のような解釈が成立する。ちなみに、「難易形容詞」と「速度形容詞」では、喚起されるイベントに対する主語の意味役割が異なる。例えば、上の例で(8)では、「論文」はイベント「読む」の「対象」であるのに対し、(9)では、「洗濯機」は「洗う」の「主体」である。言い換えると、難易形容詞が対象形容詞であるのに対し、速度形容詞は主体形容詞ということになる。

- (8) a. この論文は難しい b. この論文は読むのが難しい
(9) a. あの洗濯機は速い b. あの洗濯機は洗うのが速い

2-3 「意味の抽象度」とイベント喚起能力

イベント形容詞のように意味の抽象度が高い形容詞は、名詞句からイベントが喚起されないと解釈が困難になる。したがって、(10)のような発話は、解釈が困難である。

- (10) a. ?あの星は難しい b. ?この木ははやい

これに対し、意味の抽象度のより低い疑似イベント形容詞(=力学形容詞)では、形容詞からもイベントのタイプが特定化される。例えば、(11)のような力学形容詞の基本的用法では、「軽い」は、「持ち上げる」「運ぶ」などの移動タイプの行為を喚起し、「きつい」は、衣服の着脱を含めた、収容タイプの行為を喚起する。

- (11) a. この荷物は軽い b. この押入はきつい

しかし、力学形容詞でも「この論文はきつい」や「この問題は軽い」のように、「行為の難易度」を表わす用法においては、形容詞によるイベントの特定化は起こらない。

このように、「意味の抽象度」³とイベント喚起能力は反比例する。つまり、意味の抽象度が高ければ高いほど、イベントの一義的な決定は困難になる。蛇足になるが、名詞句に関しては、(8)(9)にある「論文」「洗濯機」のような「人工物名詞 Artifacts」はイベントを喚起しやすく、(10)(11)にある「星」や「木」のような「自然物名詞」は一義的なイベントの喚起は困難である。

³ ここでは、モノやヒトの属性を表わす形容詞よりイベントや命題の属性を表わす形容詞の方が「意味の抽象度」が高いと考えることにする。ちなみに、こうした修飾する名詞句の意味タイプに基づく形容詞の意味分類は、まだほとんど注目されていない。

3. 言語理解における認知処理 ～アフォーダンスと特徴づけ

筆者は現在、言語理解における認知的な推論パターンを表示・列挙することに興味を持っている。方法論として、意味タイプと推論パターンを対応させてまとめる方向をとっている。今回は、力学形容詞という意味タイプに対応する推論パターンとして、アフォーダンスと、その逆関数として「特徴づけ」という解釈について論じる。

3-1 アフォーダンス的解釈 ～属性からイベントへ

アフォーダンス (Affordance) は、afford (与える、可能にする) の意味からもわかるとおり、環境が生体に提供する情報、特に、生体による「行為の可能性」に関わる情報である。Gibson (1979:135-157) は、環境のアフォーダンスの一例として、「もしも陸地の表面が水平で、平坦で、十分な広がりを持っていて、その材質が堅いならば、その表面は支えるということのアフォードする」という例を出している。残念ながら、Gibson (1979) には明示的なアフォーダンスの定義はないので、佐伯他 (1990) の定義を以下に示す。

...、ものごとの知覚というのは、環境の中の事物の属性、すなわち、外界がその生体の活動を誘発したり方向づけたりする性質を、「直接に引き出している」ということになる。ギブソンはそのような「生体の活動を方向づける性質」を「アフォーダンス (affordance)」と名付けた。つまり、知覚とは生体はその活動の流れの中で外界からみずからのアフォーダンスを直接引き出すこと、というわけである。[佐伯他 1991:11]

ここで大切なことは、アフォーダンスは生体、われわれの用語に置き換えると「主体」と環境の関わりで存在する環境の中の事物の属性であるという点である。そこで、本稿ではアフォード (afford) という概念を以下のような関数であるとする。

(12) +/-アフォード (属性 (X), イベント (主体, X, ...))⁴

これは、「ある対象 X の属性が X と何らかの関わりのあるイベントの成立を促進あるいは阻害する」ことを表わす。本稿では、ある属性がイベントの成立を促進する場合は、その属性はイベント (の成立) をアフォードする、あるいは正のアフォーダンスを持つといい、反対に、ある属性がイベントの成立を阻害する場合は、その属性はイベント (の成立) をアフォードしない、あるいは、負のアフォーダンスを持つということにする。

3-2 特徴づけ ～イベントから属性へ

ところで、論理的に考えても、言語活動や認知活動をみても、人間はアフォーダンスとは逆に、イベントから属性を推論することもある。

⁴ 必ずしも、主体が言語上に表面化するわけではない。例えば、「この石はかたい／もろい」は、それぞれ「この石が壊れやすい／にくい」と解釈される。しかし、この場合でも風化などの自然現象を主体と見做しているといえるかもしれない。

本発表では、このような推論パターンを「特徴づけ (Characterisation)」と呼ぶことにする。「特徴づけ」はアフォード関数の逆関数として以下のように設定することができる。

(13) 特徴づけ (イベント (X,...), 属性 (X))⁵

これは、「ある対象 X と関わりのあるイベントが X の属性を特徴づける」ことを表わす。例えば、いつも快く頼みごとを引き受ける X には、「寛大だ」という属性付与がなされる。ここで注意したいのは、実際の状況でわれわれが出会っているのは、X の属性ではなく、X が快く頼みごとを引き受けるというイベント (の集合) である。このとき、X が関わっているイベントから「X は寛大だ」という「特徴づけ」がなされている。

4. 力学形容詞の身体的経験とアフォーダンス的解釈

ここでは、力学形容詞の語用論的解釈と、その語に関わる身体的経験は密接な関係を持っている。これらの概念は、“観察不可能”であり、主体の圧覚によって知覚されるため、基本的に「主体の能動的行為」とおしてしか確認できないという特徴がある。

4-1 力学形容詞の身体的経験と特徴付け

力学形容詞のなかでも、圧覚形容詞の代表と呼べる「かたい」と「重い」の語に関わる身体的経験と、そこに見られる特徴づけという認知処理について考察する。

例えば、「かたい」という語の認知の場合、われわれは、物体をたたいたり、こわそうとしたりして、その物体がへこまない、あるいは、こわれないなどの経験をする。こうした経験から、物体の属性 (= 硬度や弾力性) を判断する。ここには、イベント (= たたく、こわそうとする) から属性を判断する「特徴づけ」という認知処理が働いている。

また、「重い」という語の認知の場合、われわれは、物体を持ち上げようとするとき、持ち上げられないという経験から、その物体の属性 (= 重量) を判断する。あるいは、体の上にある物体がのしかかるという経験からも同様の処理が行われる。ここでも、イベント (= 持ち上げる、のしかかる) から属性を判断する「特徴づけ」という認知処理が行われていると言えるだろう。面白いことに、こうした力学形容詞を含む発話の解釈に対しては、これとはちょうど逆の処理、アフォーダンスに基づく解釈が行われる。

4-2 力学形容詞の二つのタイプとアフォーダンス的解釈

力学形容詞は、その二つの物体間の力関係 (攻撃力と抵抗力) を表わすという特徴的な意味によって、アフォーダンス的解釈を誘引しやすい。⁶

⁵ 社会心理学では、ここで示すような認知プロセスは帰属 (attribution) と呼ばれているが、本発表では、言語学で用いられている用語 (高見 1997:53-4) を優先した。

⁶ 「ネジがかたい」「ハンドルが重い」「フタがきつい」という表現がある (新地 1988) が、これらは対象そのものの性質を指しているというより、ここでいう主体の行為のアフォーダンスを表わしていると考えられる。

まず、抵抗力を表わす対象形容詞の代表として、「かたい／やわらかい」のアフォーダンス的解釈について考えてみよう。例えば、「この肉はかたい／やわらかい」という文の解釈を、アフォーダンスという関数で表わすと、それぞれ以下のように表示できる。

- (14) a. -アフォーダンス (かたい (肉), かみ切る (主体, 肉))
b. +アフォーダンス (やわらかい (肉), かみ切る (主体, 肉))

これらの文の解釈はそれぞれ、「この肉は (かたくて) 噛み切れない」「この肉は (やわらかくて) 噛み切れる」となり、イベントの成立の阻害や促進を表わす。

次に、攻撃力を表わす主体形容詞の代表として、典型的な力学形容詞ではないが「鋭い／鈍い」⁷のアフォーダンス的解釈について考えてみよう。例えば、「このナイフは鋭い／鈍い」という文の解釈を、アフォーダンスという関数で表わすと、それぞれ以下になる。

- (15) a. +アフォーダンス (鋭い (ナイフ), 切る (主体, ナイフ, 対象))
b. -アフォーダンス (鈍い (ナイフ), 切る (主体, ナイフ, 対象))

これらの文の解釈はそれぞれ、「このナイフは鋭くてよく切れる」「このナイフは鈍くてあまり切れない」となり、イベントの成立の阻害や促進を表わす。つまり、「鋭い／鈍い」はそれぞれ、「(主体が) このナイフで (対象を) 切る」というイベントに対し、それぞれ正の／負のアフォーダンスを持つことを表わす。

ここには、興味深い傾向がある。それは力の大きさとアフォーダンスの正／負の関係が、対象形容詞と主体形容詞では、ちょうど逆になっているということである。対象形容詞では、力の大きい (=かたい) ことはイベントの成立を阻害し、力の小さい (=やわらかい) ことはイベントの成立を促進する。これに対して、主体形容詞では、力の大きい (=鋭い) ことはイベントの成立を促進し、力の小さい (=鈍い) ことはイベントの成立を阻害する。前者を“促進概念”、後者を“阻害概念”と呼んでもいいだろう。

これは、対象形容詞がイベントに対する「抵抗力」を表わし、主体形容詞がイベントに対する「攻撃力」を表わすということから説明がつく。「抵抗力」の場合、その力が大きければ大きいほどイベントは起こりにくいであろうし、逆に、「攻撃力」の場合、その力が大きければ大きいほどイベントは起こりやすいと考えられるからである。

したがって、対象形容詞と主体形容詞のアフォーダンスは以下のように一般化できる。

- (16) a. 主体形容詞に典型的なアフォーダンス的解釈 (促進概念):
+/-アフォーダンス (+/-攻撃力 (X), イベント (主体, X))
b. 対象形容詞に典型的なアフォーダンス的解釈 (阻害概念):
+/-アフォーダンス (-/+抵抗力 (X), イベント (主体, X))

⁷「鋭い／鈍い」は、感覚としては視覚によっても規定される形状形容詞であるが、主語の意味役割として道具をとりやすいために「攻撃力」を表わしやすいため。

5. 力学形容詞と「行為の難易度」 ～意味拡張の方向性

最近の文法化 Grammaticalization や意味変化の研究では、意味拡張の方向性に対する言及がなされるようになってきた。例えば、Heine et al. (1991 : 157) は、メタファーによる意味拡張の方向性として次の基準を挙げている。

(17) PERSON > OBJECT > (PROCESS >) SPACE > TIME > QUALITY

(17) は主として、名詞の意味拡張を例にとり示された傾向である。形容詞の場合は、おそらく QUALITY の細かい分類が必要となるだろう。

ここでは、力学形容詞の意味拡張を観察することによって、形容詞の意味拡張の言語普遍的な傾向について議論したい。「属性」を表わす形容詞の意味拡張は、修飾する「名詞（句、節）の意味領域」によって規定できる。力学形容詞の意味拡張で、特に際立っているのは、モノやヒトから、コト¹の属性を表わすようになる点である。²

今回は、コトの属性のなかで、Tough 構文としてよく取り上げられる「行為の難易度」を表わす用法に注目する。日本語の力学形容詞では、次のような例が挙げられる。³

- (18) a. この課題（の解決）は きつい／厳しい （苦しい／つらい）
b. この課題（の解決）は 軽い／やさしい

力学形容詞のこうした意味拡張の方向性は、言語普遍的に観察されるのではないだろうか。例えば、英語やフランス語では、「かたい」に相当する hard / tough や dur が「困難」を表わす。また、ドイツ語では、日本語の「重い」「軽い」に相当する schwer と leicht がそれぞれ、「困難」「容易」を表わす。こうした意味拡張の傾向は、力学形容詞がもともと特定の行為に対するアフォーダンス（阻害と促進）を誘因しやすい性質を持っていることに帰せられよう。なぜなら、「行為の難易度」とは、言い換えると「行為の可能性」、つまり、行為のアフォーダンスのことだからである。

この用法は、アフォード関数で、次のように表示できる。ここで、「行為」は、それを実行する「主体」との関係から「対象」と解釈されるため、「行為の難易度」の用法は、つねに「抵抗力」のアフォーダンスを表わす。しかし、「行為の難易度」を表わす形容詞には、攻撃力を表わす「きつい」「厳しい」「やさしい」などの主体形容詞も含まれている。つまり、この用法においては、主体形容詞も対象形容詞として解釈されるのである。

(19) + / -アフォード (- / +抵抗力 (行為), 実行 (主体, 行為))

¹ コトは、大きくイベント類と命題類に分けられる（緒方 1994）。ここでは、イベント類のなかで「主体」の意志で遂行可能なイベントを「行為」と呼ぶ。

² 力学形容詞は「主体の能力」「不定命題の可能性」にも意味拡張される。前者は、「強い」「弱い」などで、後者は、「かたい」にその用法が見られる。

a. 佐藤君は 論理的な思考に 強い／弱い

b. Aチームの優勝／B氏の当選は かたい [初山 (1994 : 82)]

³ ここでは議論しないが、感情形容詞「苦しい」「つらい」は、意味論的に視点の異なるもうひとつの力学形容詞として位置づけることができる（仲本 1998b）。

ところで、「行為の難易度」という属性は、意味論的に抽象度の高い概念で、力学概念のほかに、空間概念や量概念からも意味拡張が起こる可能性があると予想される。

次の例では、空間形容詞や量の形容詞を用いて間接的に行為の難易度を表わしている。この場合、「課題が大きい/多い」ことで、語用論的に「課題を解決する」という行為に対する負のアフォーダンスを表わしている。しかし、(20b) でわかるように、空間形容詞や量の形容詞では、行為やイベントそのものを修飾することはできない。¹¹

- (20) a. 解決する課題は 大きい/多い
b. #問題の解決は 大きい/多い

参考文献

- Croft, William. 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations – The Cognitive Organization of Information*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Filmore, Charles J. 1982. "Frame Semantics." In the Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*. 111-137. Seoul: Hanshin.
- Gibson, J.J. 1979. *The Ecological Approach to Visual Perception*. Houghton Mifflin.
[古崎敬他訳 1985 『生態学的知覚論—ヒトの知覚世界を探る』 137-157]
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi, & Friederike Hunnemeyer. 1991. "From Cognition to Grammar – Evidence from African Languages." In E.C.Traugott, & B.Heine, (eds.) *Approaches to Grammaticalization. Vol.1*, 149-187. Amsterdam: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. 1995. Raising and Transparency. *Language* 71. 1-62.
- 初山洋介 1994 「形容詞『かたい』の多義構造」『名古屋大学日本語日本文化論集』第2号 名古屋：名古屋大学留学生センター
- 仲本康一郎 1998a 「力学的形容詞の認知言語学的考察 アフォーダンス的解釈をめぐって」修士論文 京都大学
- 仲本康一郎 1998b 「攻撃力と抵抗力を表わす形容詞 ～主体性という概念をめぐって」関西言語学会 第23回大会発表資料
- 緒方典裕 1994 「命題類への指示」『言語学論叢』第13号 筑波大学一般・応用言語学研究室
- Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge: The MIT Press.
- 佐伯胖、佐々木正人(編) 1990 『アクティブ・マインド—人間は動きのなかで考える』東京：東京大学出版会
- 新地綾 1998 「『重さ』の身体的経験と言語の相互関係」修士論文 京都大学
- 篠原俊吾 1993 「形容詞と前提行為—Tough 構文とその周辺—」『実践英文学 43』
- 高見健一 1997 『機能的統語論』英語学演習シリーズ4 東京：くろしお出版
- Talmy, Leonard. 1985. "Force-Dynamics in Language and Thought." *Papers from the 21st Regional Meeting of Chicago Linguistic Society (Part 2)*. Chicago: Chicago Linguistic Society, 293-337.
- 山梨正明 1995 『認知文法論』 東京：ひつじ書房

¹¹ 日本語では、距離を表わす「遠い」「近い」や経路の状態を表わす「険しい」で、以下のように、行為の難易度、あるいは、不定命題の可能性を表わすことができる。

日本の国際化(への道)は 遠い/近い/険しい

松本恵美子

(京都大学大学院)

emiko@sc4.so-net.ne.jp

1. はじめに

人間は、文字によるメッセージを流通させるチャンネル(セグメント・チャンネル)や音声によるメッセージを流通させるチャンネル(プロソディ・チャンネル)をはじめ、表情のチャンネル、しぐさのチャンネル等、さまざまなコミュニケーション・チャンネルを用いて外界とのインタラクションを図っている。筆者はこれらのコミュニケーション・チャンネルのうち、特にセグメント・チャンネルとプロソディ・チャンネルに着目し、それらのチャンネルを通じて相手に伝えられるメッセージの間の「ずれ(食い違い)」について研究をおこなってきた(注1)。これまでの研究の結果から、プロソディを「単にセグメント・チャンネルのメッセージに『あや』を添えるだけの、いわばセグメントの付属品」ととらえる見方は適切でないといえることができる。本発表もまた、セグメント・チャンネルのメッセージとプロソディ・チャンネルのメッセージの「ずれ」に関するものである。

本発表の考察対象は、現代日本語と現代英語の上昇調イントネーションである。上昇調イントネーションが常に疑問・問いかけの意味を表すわけではないことは、しばしばいわれることである。たとえばLadd(1996)は、言語や方言によっては上昇調イントネーションが疑問・問いかけの意味を表さないことを指摘している。しかし、上昇調イントネーションと疑問・問いかけの意味とのむすびつきは、傾向としては認めてもよいのかもしれない。Lakoff and Johnson(1980)は、上昇調イントネーションと疑問・問いかけの意味の間に密接な関係があるという前提にたって、そのむすびつきが認知的に自然であることを、比喩の概念を用いることによって説明している。

本発表でとりあげる現代日本語と現代英語の上昇調イントネーションは、すべて何らかの疑問・問いかけの意味で発話されるものである。ただし一口に疑問・問いかけといっても、その表す意味はさまざまであり、そもそも上昇調イントネーション自体にも言語差がある。本発表では、次の2節で形式面における上昇イントネーションの日英差を、3節で意味面における上昇調イントネーションの日英差を指摘し、4節でそれらの言語差の統一的把握を試みる。

2. 形式面における上昇調イントネーションの日英差

本節では、上昇調イントネーションの形式面にみられる言語差を3点に分けて述べる。これら3点は、本来上昇調イントネーションで発話されるべき部分を超えて、そうでない部分までが上昇調イントネーションによって発話され、その結果、聴覚印象では、文全体が上昇調イントネーションで発話されているように聞こえる現象といえる。本発表では、この現象を、先行研究の見方を参考にして上昇調イントネーションの「拡張」と仮に呼んでおく(注2)。

2. 1. 引用内容節から主節へのイントネーションの拡張

指摘される言語差の第1は、現代日本語の場合、引用内容節の上昇調イントネーションが主節にまで拡張されにくいのに対して、現代英語の場合は、主節にまで拡張されやすいというものである。たとえば(1)を参照。

(1)a. ??「行く?」と彼女はきいた。 (全体を上昇調で)

- b. "Are you going?", she asked. (全体を上昇調で) (注3)

現代日本語文(1a)は文法的にはまったく問題ないが、文全体(『行く?』から「きいた」まで)を上昇調イントネーションで発話することは、通常できない。つまり引用内容節『行く?』は上昇調イントネーションで発話されるが、その上昇調イントネーションは主節の「と彼女はきいた」の部分にまで拡張していかない。(1a)の文頭の「??」はその意味である。それに対して現代英語文(1b)の場合、本来上昇調イントネーションで発話されるべきは引用内容節内("Are you going?"の部分)だけのはずだが、実際には文全体を上昇調イントネーションで発話することができる。すなわち、引用内容節"Are you going?"の上昇調イントネーションを主節"she asked"にまで拡張することができる。

なお、先に「聴覚印象では」という表現を用いたが、実際に機械で音声を測定した場合、それぞれの単語レベルの音の高低にも影響されるので、(1b)の音声波形はきれいな右上がり曲線にはならない。しかしそうであっても、本来下降調で発話されるべき部分が上昇調で発話されていることが波形にあらわれている。

2. 2. 主節相当部分から引用内容節へのイントネーションの拡張

次に指摘する言語差は、現代日本語の場合、主節相当部分の上昇調イントネーションが引用内容節にまで拡張されにくいのに対して、現代英語の場合は、引用内容節にまで拡張されやすいというものである。下の(2)を参照。

- (2)a. ??「帰れ」? (全体を上昇調で)

- b. "Go home."? (全体を上昇調で)

(2a,b)は、共に「『帰れ』だと?」という意味を表わす文として挙げたものである。現代日本語文(2a)は文法的にはまったく問題ないが、途中でイントネーションをいったん下げずに文全体を上昇調イントネーションで発話することは通常できない。いいかえれば、文字列として表現されていないが、いわば主節に相当する相手への問いかけ部分(文字列で表現するならば、「『帰れ』だと?」の「だと?」に相当する部分)が、上昇調イントネーションで発話されるからといって、この上昇調イントネーションを「帰れ」という引用内容節にまで拡張して、(2a)全体を上昇調イントネーションで発話することはない。(2a)の文頭の「??」はその意味である。それに対して現代英語文(2b)の場合、文全体を上昇調イントネーションで発話できる。すなわち、今ここでは文字列として表現されていないが、いわば主節に相当する相手への問いかけの部分の上昇調イントネーションを、引用内容節である"Go home."にまで拡張することができる。

2. 3. 内容節から呼びかけ節へのイントネーションの拡張

最後に指摘する言語差は、現代日本語の場合、内容節の上昇調イントネーションが呼びかけ節にまで拡張されにくいのに対して、現代英語の場合は呼びかけ節にまで拡張されやすいというものである。(3)を参照。

- (3)a. ??行く、ジョニー? (全体を上昇調で)

- b. Are you going, Johnny? (全体を上昇調で)

現代日本語文(3a)は文法的にはまったく問題ないが、内容節「行く」の部分の上昇調イントネーションを、呼びかけ節「ジョニー?」の部分にまで拡張して、文全体を上昇調イントネーションで発話することは通常できない。(3a)の文頭の「??」はその意味である。それに対して現代英語文(3b)は先に示した(1b)(2b)の場合と同じく、文全体を上昇調イン

トネーションで発話することができる。

2. 4. 上昇調イントネーションの日英差（形式面）についてのまとめ

以上で見てきたように、現代日本語では、「1 発話内のある部分に対応する上昇調イントネーションが、本来の部分から拡張されて発話全体に適用される」という現象がおこりにくい。それに対して現代英語では、この現象がおこりやすい。

なお、現代英語における上昇調イントネーションの拡張現象をさらによく観察した場合、そこにはいくつかの傾向が認められる。以下、例文を用いてその傾向について簡単に述べる。まず下の(4)を参照。

- (4)a. "Are you going?", she asked. (全体を上昇調で) = (1b)
b. % She asked, "Are you going?" (全体を上昇調で)

(4b)は、(4a)の主節"she asked"が引用内容節"Are you going?"の前におかれた文である。(4a,b)とも文法的にはまったく問題ない。しかし文全体を上昇調イントネーションで発話できるかどうかについては、(4a)と(4b)で英語話者の判断が異なる。4名の英語話者に調査したところ、4名全員が(4a)の文全体を上昇調イントネーションで発話することは「まったく自然である」と回答した。それに対して(4b)の場合、話者によって判断がゆれた。3名の英語話者は、(4b)の場合も、文全体を上昇調イントネーションで発話することは「まったく自然である」と回答したが、1名の英語話者は、(4b)の文全体を上昇調イントネーションで発話することは、「可能ではあるが、(4a)のようにまったく自然であるというわけではない」と回答した。(4b)文頭の「%」はそのことを示している。このことから、上昇調イントネーションの拡張の双方向性と拡張の方向に関する傾向を指摘することができる。すなわち、上昇調イントネーションは、文の前から後ろ（順行方向）へ、また後ろから前（逆行方向）へと双方向に拡張が可能であるが、順行方向への拡張が英語話者にとって、わずかながらより自然であるといえる。

さらに1つ例を挙げておく。(5)を参照。

- (5)a. Are you going, Johnny? (全体を上昇調で) = (3b)
b. % Johnny, are you going? (全体を上昇調で)

(5b)は、(5a)の呼びかけ節"Johnny"が内容節"Are you going?"の前におかれた文である。(5a,b)も文法的にはまったく問題ないが、文全体を上昇調イントネーションで発話できるかどうかについては、(5a)と(5b)でやはり英語話者の判断が異なる。4名の英語話者全員が、(5a)全体を1つの上昇調イントネーションで発話することは「まったく自然である」と回答したが、(5b)に関しては、4名のうち1名が「可能ではあるがまったく自然というわけではない」、もう1名が「まったく不自然である」と回答した。(5b)の文頭の「%」はそのことを示している。ここでも(4)の場合と同様、上昇調イントネーションの拡張の双方向性と拡張の方向に関する傾向（すなわち順行方向への拡張が、英語話者にとってわずかながらより自然であるという傾向）を指摘することができる。

以上、(4)(5)の例を用いて現代英語の上昇調イントネーションの拡張の双方向性と、拡張の傾向（順行方向への拡張が、英語話者にとってわずかながらより自然であるという傾向）を指摘した。これらの現象を、筆者は現時点では次のようにとらえている。まず、上昇調イントネーションの拡張の双方向性についてであるが、これまでに検討した例から見て、発話全体に拡張されるイントネーションというのは通常、話し手の心内で最も強く活性化された部分のイントネーションだと考えられる。この考え方に従えば、常に上昇調イントネーションが発話全体に拡張されるとは限らないし、またイントネーションの拡張は

順行・逆行どちらの方向にもおこりうるはずである。

次に上昇調イントネーションの拡張の傾向についてであるが、実際の場合、逆行方向よりも順行方向へのイントネーションの拡張がより自然だと判断されやすい。これは話し手が、もともとローカルなイントネーションづくりというストラテジーで心内作業をおこなっていたのに、第1番目の部分のイントネーションを決定してそれを発音するうち、その部分に感情移入してしまい（第2番目以降の部分はまだ実際に発音していないので感情移入しない）、結果として、第2番目の部分以降をもあわせた文全体を、第1番目の部分のイントネーションで発話してしまうことがおこるためだと考えられる。そのため発話の前の部分のイントネーションが力を持ちやすく、拡張しやすくなる（注4）。

なお、英語話者の判断では、発話スピードとイントネーションの拡張現象の間には相関関係はない。つまり発話スピードをあげることによって（文全体を一気に早く発音することによって）、通常の発話スピードでは拡張現象が見られない文に拡張現象を生じさせることはできない。

3. 意味面における上昇調イントネーションの日英差

ある文が上昇調イントネーションで発話された場合、その文は発話された文脈によってさまざまに解釈できる。これは現代日本語、現代英語のどちらについてもいえることである。しかし解釈の多様さが生じる原因は、現代日本語と現代英語で異なっている。そしてその原因の違いは、特に一語文において顕著であるように思われる。本節では名詞一語文を取りあげ、上昇調イントネーションの意味面にみられる言語差について述べる（注5）。

上昇調イントネーションで発話される名詞一語文がさまざまな意味を表す原因は、現代日本語の場合、「主題の非明示性」にあると考えられる。これに対して現代英語の場合は、「主題の非明示性」だけでなく、「発話行為の非明示性」にもその原因があると考えられる。この「主題の非明示性」と「発話行為の非明示性」がどのようなものかについては、以下で具体的に説明する。下の(6)を参照。

- (6)a. たばこ? (全体を上昇調で)
- b. Cigarette? (全体を上昇調で)

(6a)は現代日本語の名詞一語文であり、(6b)は(6a)に対応する現代英語の名詞一語文である。(6a,b)とも、それぞれの母語話者にとってはまったく自然な文であり、文脈によってさまざまな解釈が可能である。たとえば適当な文脈が与えられた場合、(6a)に関して可能な解釈の一部を下の(7)に示す。

- (7)a. 「答えはたばこ?」
- b. 「さがしものはたばこ?」
- c. 「あの人のいらいらの原因はたばこ?」

(7a)は、話し手がクイズに答えるという文脈を与えられた場合の解釈例である。(7b)は、話し手がポケットをさぐって何かさがしている人に向かって声をかけるといった文脈を与えられた場合の解釈例である。そして(7c)は、話し手がいらいらしている人を指差して、そのいらいらの原因を友人にたずねるといった文脈を与えられた場合の解釈例である。もちろん(7)に挙げた以外にもまだ多くの解釈が(6a)に関して可能である。しかし、これらの解釈に共通して言えることは、これらがすべて、明示的に表現されていない何らかの主題について、それがたばこなのかをたずねるものだという点である。つまり(6a)は、文脈によってさまざまな意味を表すことができるにせよ、根本的には「○○はたばこですか?」と問いかける発話だといえる。そしてこの「○○は」の部分、いいかえれば主題の部分の明

示的に表現されず、文脈に応じてさまざまに解釈できることこそが、(6a)の発話の意味の多様性の大きな原因になっていると考えられる。これが先に指摘した「主題の非明示性」の意味である。したがって(6a)の場合、「主題—題述」の構造と無関係の意味（たとえば「たばこいかが？」など）を表すことはできない。

(6b)は(6a)の場合とは異なっている。(6b)の場合、適当な文脈が与えられれば、(6a)と同じ解釈が可能であるだけでなく、さらに別の解釈も可能である。適当な文脈が与えられた場合、(6b)に関して可能な解釈の一部を下の(8)に示す。

- (8)a. 「答えはたばこ？」 =(7a)
- b. 「さがしものはたばこ？」 =(7b)
- c. 「あの人のいらいらの原因はたばこ？」 =(7c)
- d. 「たばこいかが？」

(8a)-(8c)に挙げた解釈の例は、(7a)-(8c)と同じものである。そして(8d)は、話し手が人にたばこを勧めるという文脈が与えられた場合の解釈例である。(6b)の場合、(6a)と同様、「主題の非明示性」に基づく多様な解釈が可能であるのに加え、さらに(8d)のような「たばこいかが？ (Would you like a cigarette?)」という解釈も可能である。このことは、現代英語の一語文が、現代日本語の一語文とは違い、「主題—題述」の構造になっていない意味でも表現できることを表している。これが、先に指摘した「発話行為の非明示性」の意味である。

なお「主題の非明示性」と「発話行為の非明示性」の違いに基づく言語差は、いわゆる勧誘の発話についてだけでなく、許可を求める発話についても観察できる。下の(9)を参照。

- (9)a. ??コンピュータ？
- b. Computer？

(9a,b)は文法的にはまったく問題ないが、これらが「コンピュータを使ってもいい？」という、許可を求めるための発話だとした場合、(9a)は不自然である。(9a)の文頭の「??」はそのことを表す。現代日本語の場合、もし一語文でコンピュータを使ってもよいかどうか許可を求めるとするならば、「コンピュータ？」ではなく、コンピュータを指差して「あいてる？」または「いい？」などと発話しなければならない。これに対して現代英語の場合、コンピュータの使用許可を求める発話として(9b)のように発話することが可能である(注6)。

最後に上昇調イントネーションで発話される現代英語の名詞一語文のその他の例を(10)に挙げておく。ここに挙げた現代英語の一語文はいずれも、適当な文脈が与えられた場合、対応する現代日本語の名詞一語文にはない解釈のバリエーションを持つ。

- (10)a. "Message?" b. "Kettle?" c. "Doll?" d. "Doctor?"
- e. "Elevator?" f. "Cream?" g. "Key?" h. "Pen?"
- i. %"English?" j. %"Shutter?"

(10)について、それぞれが発話された場面と、その場合に表すことのできる意味を以下に簡単に示す。英語話者の判断によれば(10a)-(10h)はまったく自然であるが、(10i)(10j)については自然か不自然かで判断が分かれた。(10i)(10j)の文頭の「%」はそのことを表す。(10a)は、インタビューした相手に対して、テレビカメラに向かって何か言うように促すインタビュアーの発話として「メッセージをお願いします」などの意味を表すことができる。(10b)は、台所でやかんを探している人の、家族に向かっての発話として「やかんはどこに

ありますか？」などの意味を表すことができる。(10c)は、誕生日プレゼントを何にするか相談している時の、父に対する母の発話として「人形はどうかしら？」などの意味を表すことができる。(10d)は、医者に対する看護婦の発話として「先生、診察をどうぞ」、「先生、この状態をどう判断しますか？」などの意味を表すことができる。(10e)は、ビルの5階の事務所に行こうとしている2人の会社員の、一方のもう一方に対する発話として「エレベータで行きませんか？」などの意味を表すことができる。(10f)は、コーヒーを注文した客に対するウェイトレスの発話として「クリームを入れますか？」などの意味を表すことができる。(10g)は、2人の人物が出かける際、玄関口で1人がもう片方に対しておこなった発話として「鍵を持っていますか?」、「もう鍵をかけてくれましたか?」、「鍵をかけてくれませんか?」などの意味を表すことができる。また、2人が外出から戻ってきた時に玄関口でなされた発話として、「鍵を持っていますか?」、「鍵をあけてくれませんか?」などの意味を表すことができる。(10h)は、友人が書類を書くように言われたところに居合わせた人の発話として、「ペンを貸しましょうか?」などの意味を表すことができる。また逆に、書類を書くように言われた際、ペンを持ってなくて、友人の持っているペンを借りようと指差した人の発話として「あなたのペンを貸してもらえますか?」などの意味を表すことができる。(10i)は、日本語を話せない外国人が日本人に道をたずねるために声をかけた時の発話として、「英語がわかりますか?」などの意味を表すことができる。(10j)は、写真を撮ろうとしている観光客に話しかける人の発話として「シャッターを押してあげましょうか?」などの意味を表すことができる。なお(10i)(10j)を不自然だと回答した英語話者は、相手に対する丁寧さの欠如を理由として挙げた。その英語話者の判断では、一語発話は本来非常にくだけたものであり、場合によっては相手に子供っぽい印象を与えかねないものなので、仲間うちでのみ用いるものである。このことから、(10a)-(10h)が自然だと判断されたのは、その発話が家族や友人、同僚など、親しい間柄の相手に向かってなされたものと想定されやすいためであり、また一方、(10i)(10j)が不自然だと判断されたのは、その発話が初対面の人に向かってなされたものと想定されやすいためだと考えられる(注7)。

4. 上記の指摘の統一的把握

2節では上昇調イントネーションにみられる日英差の形式面について、そして3節では意味面についてそれぞれ述べた。本節ではそれらを踏まえ、その統一的把握を試みる。これまでに指摘した上昇調イントネーションの形式面・意味面における言語差は、以下のようにとらえれば、その両方を一括して把握・説明できると筆者は考える：現代日本語では、発話の各部ごとにイントネーションが対応し、結果的に複数個のイントネーションパターンが1発話に共存する傾向がある。これに対して現代英語では、1発話につきイントネーションパターンが1個だけという1対1の対応がしばしば好まれる。その際、発話全体を独占的に支配するイントネーションの地位をめぐる、発話各部のイントネーションどうしが一種の競合状態にあるといえる。そしてある部分のイントネーションが他の部分のイントネーションとの競合に勝って独占的地位を占めた場合、そのイントネーションが発話全体に拡張されたように見える。

この見方に基づいて、これまでに指摘した上昇調イントネーションにみられる言語差をとらえなおすと次のようになる。まず、形式面における言語差について、(1a, b)を例に用いて述べる。現代日本語文(1a)（「行く?」と彼女はきいた）の場合、『行く?』の部分には相手の意向をたずねる問いかけのイントネーション（この場合、すなわち上昇調イントネーション）が、そして「と彼女はきいた」の部分には陳述のイントネーションがそれぞれ対応し、結果として1発話内に異なる複数個のイントネーションパターンが共存している。これに対して現代英語文(1b)（"Are you going?", she asked.）の場合、"Are you going?"の部分の相手に意向をたずねる問いかけのイントネーション（この場合、すなわち

上昇調イントネーション)が、"she asked"の部分の陳述のイントネーションとの競合に勝って、発話全体に拡張され、その結果、発話全体が1つの上昇調イントネーションで発話されるととらえることができる。

次に意味面における言語差について、(6a, b)を例に用いて述べる。先に示したように、現代英語の一語文(6b) (Cigarette?)は、対応する現代日本語の一語文(6a) (たばこ?)にはない、(8d) (「たばこいかが?」)のような意味を表すことができる。それは、(6b)が意味的に(「たばこを吸いたいですか?」という)相手の意向をたずねる問いかけと、(「たばこでも吸いなよ。」という)ごく軽い命令の中間に位置していて、この場合、問いかけの意味がごく軽い命令の意味との競合に勝って発話全体を支配したからだと考えることができる。そしてそれに伴い、相手の意向をたずねる問いかけのイントネーション(この場合、すなわち上昇調イントネーション)が発話全体を支配したと見ることができ

5. おわりに

本発表では、現代日本語と現代英語を考察対象として、いわゆる上昇調イントネーションの言語差を形式と意味の両面にわたって指摘し、両者の統一的把握を試みた。

「1発話内に複数の異なるイントネーションパターンが容易に存在し得る現代日本語」と、「発話の独占的支配に向けてイントネーションどうしが競合する現代英語」という違いがなぜ生じるのか。この違いは日本語の膠着性、英語の屈折性といった言語の性質と相通じるように思われるが、詳細は今後の課題としたい。

注

- 1) 詳しくはMatsumoto(1996)、定延・松本(1997)を参照。
- 2) この現象を指摘したColeman(1914)を以下に引用する：昇調を必要とする引用がされた場合は、その昇調は、まったく不合理ながら、引用を告げる強調のない語句にまで続けられる、それが叙述文の形であっても。すなわち
"What?" I asked. (「何ですって」と私は聞いた)
"Did you ever complete it?" they inquired with one voice.
(「あなたは完了されたことがありますか」と彼等は異口同音にきいた)
において"I asked"や"they inquired with one voice"の語句は引用された疑問文の反転の尾に続くものである。 [岩崎民平(訳)1957:20] (下線は筆者による)
Coleman(1914)のこの見方を参考にして本発表ではこの現象を仮に「拡張」と呼ぶ。
- 3) この例はLadd[1980:164]の例を一部改変したものである。
- 4) ただしこれらの現象は、発話各部の内容のむすびつきが弱い場合にはおこりにくく、その場合には発話各部にそれぞれ適したイントネーションが割り当てられ、発話全体のイントネーションが作り上げられるようである。この考え方に従えば、(4b)と(5b)に対する英語話者の容認度の差を、発話各部の内容のむすびつきの強さの差としてとらえることができる。すなわち(4b)の主節と引用内容節のむすびつきの方が、(5b)のよびかけ節と内容節のむすびつきよりも強いので、(4b)の方が(5b)よりも文全体を上昇調イントネーションで発話しやすいと考えられる。
ここで同様の例をもう1つ挙げておく：
(a) "Are you going?", she asked.
(b) "Are you going?", she was scared.
(a)(b)とも文法的には問題ないが、文全体を上昇調イントネーションで発話できるかどうかについては英語話者の判断が異なる。彼らの判断によれば(a)の文全体を上昇調

イントネーションで発話することは自然だが、(b)は不自然である。(b)文頭の「??」はそのことを示す。))

- 5) できるだけ他の要因に左右されず文の対照をおこなうため、本発表で扱う名詞一語文は、「は」などのいわゆる付属語のついていない、文字どおり名詞一語だけで文として用いられるものに限定した。
- 6) このように説明すると、現代日本語には形容詞・動詞等、述部を用いて一語文をつくる傾向がむしろ強く、したがって現代日本語の名詞一語文を考察することはあまり意味がないと誤解されるかもしれない。しかしその見方は不適切である。なぜなら述部を用いた一語文を好む傾向が現代日本語とあるとしても、そのことが、対応する現代英語の名詞一語文に比べて現代日本語の名詞一語文の解釈のバリエーションが少ないことの直接の説明にはならないからだ。言語ごとに表現上の特徴があることはむしろ自然なことである。重要なことは、考察対象とする言語のいずれもが(使用頻度に差があるにせよ)共通して持っている表現方法を比較検討し、現象をできるだけ包括的に説明できるような考え方を提示することだと筆者は考える。
- 7) おそらく初対面の人に向かっての発話であるにもかかわらず、(10i)(10j)とは異なり、(10a)が自然だと判断されてしまう原因は、出演者にある種の「馴れ馴れしさ」を許してしまうテレビの特殊性にあるのではないかと筆者は考える。

参考文献

- Bolinger, Dwight. 1964 "Around the Edge of Language: Intonation." In Dwight Bolinger (ed.) Intonation. Harmondsworth: Penguin Books, pp.19-29.
- Bolinger, Dwight. 1986 Intonation and Its Parts. CA: Stanford University Press.
- Coleman, H. O. 1914 "Intonation and Emphasis." Miscellanea Phonetica 1. [岩崎民平 (1957 訳) 『英語学ライブラリー(2) 音声と強調』, 東京: 研究社, pp.1-29.]
- Cruttenden, Alan. 1986 Intonation. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ladd, D. Robert, Jr. 1980 The Structure of Intonational Meaning: Evidence from English. Bloomington: Indiana University Press.
- Ladd, D. Robert, Jr. 1996 Intonational Phonology. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson. 1980 Metaphors we live by. Chicago: University of Chicago Press.
- Matsumoto, Emiko. 1996 "A Contrastive Study of Japanese and English Ironical Expressions." Kansai Linguistic Society Vol.16, pp.100-110.
- 今井邦彦 1988 「イントネーションの表現力」, 『言語』17(3), 東京: 大修館書店, pp.44-50.
- 音声文法研究会 (編) 1997 『文法と音声』. 東京: くろしお出版.
- 定延利之・松本恵美子 1997 「アイロニーとコミュニケーション・チャンネル」, 谷泰 (編) 『コミュニケーションの自然誌』. 東京: 新曜社, pp.295-330.
- 杉藤美代子 1990 「日本語と英語のアクセントとイントネーション」, 『日本人の英語 日本語音声の研究2』. 1996 大阪: 和泉書院, pp.195-220.
- 福島重一 1976 「呼びかけ語の位置と効果一日英比較による試論と解説一」, 『大阪工業大学紀要』, 第2号, 大阪工業大学, pp.45-58.

測量比較構文について

三原 京
近畿大学

1. 序

本発表では、次のような比較構文について考えてみたい。

(1) This swimming pool is wider than it is long.

(Rusiecki 1985:106)

これは、2つの形容詞が表す特性の程度を比較したものであり、「プールは長さも長い、それよりも幅が広い」という意味になる。

2. 測量比較構文の特徴

本節では、測量比較構文の特徴を列挙していく。

① *than* は原則として節を導く。

(2)a. I am thirstier than I am hungry. (Rusiecki 1985:107)

b. I am thirstier than you are hungry.

c. I am thirstier than he is hungry.

d. ?I am thirstier than hungry. (Rusiecki 1985:107)

(3)a. Diana is prettier than she is intelligent. (Rusiecki 1985:107)

b. Diana is prettier than Mary is intelligent.

c. ?Diana is prettier than intelligent. (Rusiecki 1985:107)

(4)a. John is much taller than he is fat.

b. John is much taller than Paul is fat.

c. *John is much taller than fat.

② *than* 節は必ず肯定節である。

(5)a. *I am hungrier than I am not thirsty.

b. *I am hungrier than you are not thirsty.

- c.*I am hungrier than he is not thirsty.
- (6)a. Mary is cleverer than she is kind.
 b.*Mary is cleverer than she is not kind.
 c.*Mary is cleverer than she is unkind.
- (7)a. John is more careless than he is stupid.
 b.*John is more careful than he is not stupid.
 c.*John is more careful than he is careless.

③ 比較が行われる意味領域は同一でなければならないが、完全に同じ意味での比較には用いられない。

- (8)a. John was cleverer than he was intelligent.
 b. John was cleverer than Bill was intelligent.
 c.*John was nearer than he was late.
 d.*John was nearer than Bill was late. (Hale 1970:53)
- (9)a. This car is more expensive than it is efficient.
 b. This car is more expensive than that one is efficient.
 c.*This car is more expensive than it is near.
 d.*This car is more expensive than that one is near.
- (10)a. This coffee is more aromatic than it is tasty.
 b. This coffee is more aromatic than that one is tasty.
 c.*This coffee is more aromatic than it is popular.
 d.*This coffee is more aromatic than that one is popular.
- (11)a.*Mary is taller than Joan is tall. (Chae 1992:38)
 b.*This house is bigger than that one is big.
 c.*John is taller than Bill is five feet tall. (Hale 1970:48)

④ than 節に具体的な数値が来ることはない。

- (12)a. John is fatter than he is tall.
 b.*John is fatter than he is five feet tall.
 c.*John is fatter than Paul is five feet tall.

(13)a. This swimming pool is ten yards longer than it is wide.

(Rusiecki 1985:106)

b.*This swimming pool is wider than it is ten yards long.

c.*This swimming pool is wider than that one is ten yards long.

⑤ than 節には無標 (unmarked) の形容詞が来る。

(14)a. This swimming pool is wider than it is long.

(Rusiecki 1985:107)

b.*This swimming pool is wider than it is short.

(Rusiecki 1985:107)

c.*This swimming pool is wider than that one is short.

d. This swimming pool is narrower than it is long.

e.*This swimming pool is narrower than it is short.

f.*This swimming pool is narrower than that one is short.

(15)a. The table is longer than it is wide.

b.*The table is longer than it is short.

c.*The table is shorter than it is narrow.

(Hale 1970:39)

3. 分析

本節では、以上のような特徴を関連性理論の立場から分析していく。

① than 節の命題 P が肯定命題として断定されている。

(16) John is cleverer than he is diligent.

(17) John is cleverer than P.

P = John is diligent

話し手は命題 P を頭の中で描き、これを真であると信じている。

(18)?John is cleverer than diligent.

(19)*John is cleverer than he is not diligent.

(20)*John is cleverer than he is near.

(21)*John is fatter than he is six feet tall.

② 発話文の処理労力ができるだけ小さい表現が選ばれる。

(22) John is taller than Paul (is).

(23)*John is taller than Paul is tall.

(24)*John is taller than he is famous.

③ 発話の主要な概念的情報は主節の側にある。

(25) This road is wider than it is long.

(26) This road is narrower than it is long.

(27) This table is two feet longer than it is wide.

話し手が伝達したいのは、than 節の概念的情報よりも主節の概念的情報である。

(28)*This road is wider than it is short.

(29)*This road is longer than it is narrow.

(30)*This table is wider than it is two feet long.

4. まとめ

主要参考文献

- Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*. Blackwell.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Blackwell.
- Blass, R. 1990. *Relevance Relations in Discourse: A Study with Special Reference to Sissala*. Cambridge University Press.
- Bolinger, D. 1967. "Adjective Comparison: A Semantic Scale." *Journal of Linguistics* 3, 2-10.
- Cantrall, W. R. 1977. "Comparison, and Beyond." *CLS* 13, 69-81.
- Carden, G. 1977. "Comparatives and Factives." *Linguistic Inquiry* 8, 586-590.
- Chae, H. 1992. "English Comparatives and an Indexed Phrase Structure Grammar." *BLS* 18, 37-48.
- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.
- Gnutzmann, C., R. Ilson, and J. Webster. 1973. "Comparative Constructions in Contemporary English." *English Studies* 54, 417-438.
- Green, G. 1970. "More X than not X." *Linguistic Inquiry* 1-1, 126-127.
- Hale, A. 1970. "Conditions on English Comparative Clause Pairings." In R. A. Jacobs and P. Rosenbaum eds., *Readings in Transformational Grammar*, 30-55. Ginn & Company.
- Herbert, P. 1965. "Comparative Conditions in English." *Language* 41, 37-58.
- Huddleston, R. 1967. "More on the English Comparatives." *Journal of Linguistics* 3, 91-102.
- Jespersen, O. 1954. *A Modern English Grammar on Historical Principles* VII. George Allen and Unwin.
- Kempson, R. M. 1988. *Mental Representations: The Interface*

- between Language and Reality*. Cambridge University Press.
- Manaster-Ramer, A. 1978. "Comparatives and Factives." *Linguistic Inquiry* 9, 308-310.
- McCawley, J. D. 1973. *Meaning and Grammar*. Taishukan.
- Mittwoch, A. 1974. "Is there an Underlying Negative Element in Comparative Clauses?" *Linguistics* 122, 39-45.
- Napoli, D. J. 1983. "Comparative Ellipsis: A Phrase Structure Analysis." *Linguistic Inquiry* 14-4, 675-694.
- Pilch, H. 1965. "Comparative Constructions in English." *Language* 41, 37-58.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *The Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- Rusiecki, J. 1985. *Adjectives and Comparison in English: A Semantic Study*. Longman.
- Seuren, P. 1984. "The Comparative Revised." *Journal of Semantics* 3, 109-141.
- Smith, C. S. 1961. "A Class of Complex Modifiers in English." *Language* 37, 342-365.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
- Wilson, D. and D. Sperber. 1993. "Linguistic Form and Relevance." *Lingua* 90, 1-25.

You may want to ... :
Euphemism から「文法化」へ

宮澤泰彦
福島工業高等専門学校

0、はじめに

入学案内/ホームページ等(下線部は筆者による)

- (1) If you have commenced your university studies, you may want to know more about Deakin's International Exchange Program. If you want information about how to apply for Deakin University, Deakin International can help.
(homepage: Deakin University, Australia)
- (2) If you have an academic query about the course itself, or if your question is specific to the geographical area in which you live, you might want to write directly to the Course Tutor with whom you would probably be working:.....
(prospectus: Aston University, UK)
- (3) You may wish to send your order by regular mail. Print the completed order form for your location and send it to:.. (homepage: University of British Columbia, Canada)
- (4) You may also like to check our website, at <<http://www.soton.ac.uk/.....>>
(prospectus: University of Southampton, UK)

その他

- (5) When you go surfing, you may want to hang ten or catch a tube. If you have a long board, you might want to hang ten. When you hang ten.....
(textbook: Mini-world Video, US)
- (6) As a token of our appreciation, please find enclosed US\$1, which you may wish to donate to charity or give to a child.
(questionnaire: Asia Market Intelligence, US company)
- (7) Hypertext Webster Gateway Error No definition found for "iuuooii"
You may wish to try an alternative spelling (change what you had in the box below), or use an approximate match (click on the "Approx" button) instead
(Webster online dictionary, US)

このように動詞 want および wish, like は、しばしば助動詞 may, might を伴って聞き手や読み手に助言や提案、指示を与える文脈で用いられるが、一般の文法書には詳しい解説は無い。このうち want に関しては助動詞に類似した用法が知られているが、辞書においてはごく簡単に口語の特殊用法として触れられているにすぎない。以下が現時点での定見かと思われる。(ただし英米語法差には見解の相違あり。) これらを踏まえてコーパスを利用して得られたデータをもとに検討を加えたい。

小西(1980)より

おもに英口語で ought to, had better の意を表すことがある。{NWD} 通例2人称主語で用いられ、時には警告、非難を含意する {Wood & Hill} : You don't want to overdo it.- COD やりすぎないようにすべきだ/You want to see your solicitors about the problem.- OALD その問題について弁護士と相談すべきだ。

ought to の意では want to be done の型や there 構文も可能 {Pullum Postal (1979)} The bonnet and bumpers want to be made of alminum. ボンネットやバンパーはアルミで作るべきだ {米国では The hood and fenders ought to be made of alminum.} /There want to be a few changes made round here. この辺ですこし変化が必要だ。 {米国では There ought to be a few changes made around here.}

この意で短縮形 wanna を用いることも可能。

Quirk et. al (1985)より

Another example of a verb which is syntactically a main verb, although it behaves

rather like a pragmatic particle, is the verb *want* when followed by *to* + infinitive in utterances such as:

- (1) You want to be careful with that saw.
 (2) I want to tell you how much we enjoyed last night.

In (1), *You want to* expresses a warning or a piece of advice; in (2) *I want to* introduces an expression of wish, which, in effect, tones down a performative verb. This pragmatic device is particularly conventionalized in informal usage, where it is pronounced /wona/. (Especially in AmE, a nonstandard spelling *wanna* is also current.)

What makes *want to* in (1) particularly similar to a pragmatic particle is the impossibility of obtaining an equivalent meaning when the sentence is changed into the past tense or into the progressive aspect:

- (3) ?You are wanting to be careful with that saw.
 (4) You wanted to be careful with that saw.

Sentences (3) and (4) no longer have a particular advice-giving function, and have to be interpreted simply as statements about the wishes of the hearer.

< Note >

On the other hand, the negative of *want to* can (in informal use) have a specialized advice-giving function even when combined with the progressive of the following verb:

- Come on: you don't want to keep them all waiting.
 You don't want to be sitting around doing nothing.

1、COBUILD *direct* のデータより

1.1. 出現頻度 (典型的な形のみを示す)

表現 / 頻度	総数	助言用法	願望用法
you may want to	104	40	64
you may wish to	85	34	51
you might like to	68	41	27
you'd better	33	33	
it would be better	123	123	

1.2. 文例の検討

<主な観点項目>

- レジスター (ジャンル) ごとの出現頻度
- 発話のコンテキスト (話者聴者の力関係等)
- 意味的、文体的、および対人関係的機能における差異
- 従属節、関係詞節での使用

<コーパス調査 (詳細省略) >

第1段階 (予備調査) : 主語の人称、典型性 (may/might)

may want to, may wish to, might like to がそれぞれ典型的な形である。
 頻度を重視すれば had better よりも 'd better のほうが典型的と言えそう。
 had better 類以外は2人称主語での使用が中心。

第2段階 (コーポラ別調査) : レジスターによる差異

you may want to, you may wish to 米用法が主流で英が従。

you might like to.....主に英用法。

上記は英米ともに ephemera (パンフレット類) での使用例が際だっている。

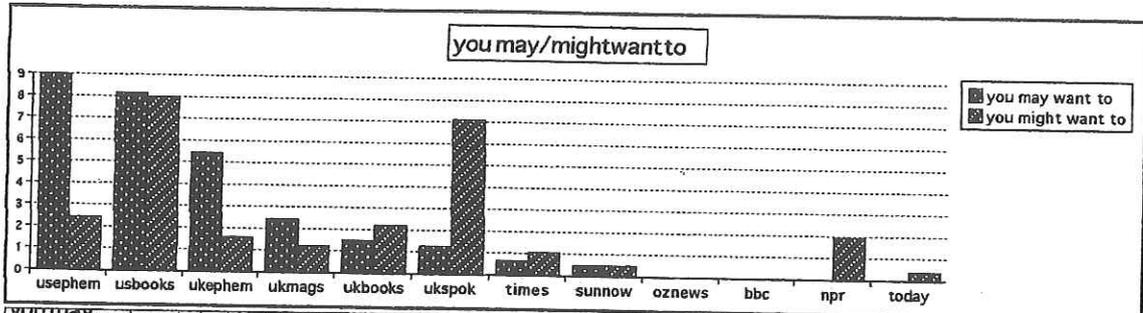
意外なことに had better 類は ephemera には登場しない。

第3段階 (文脈調査) : 従来の定説の検証

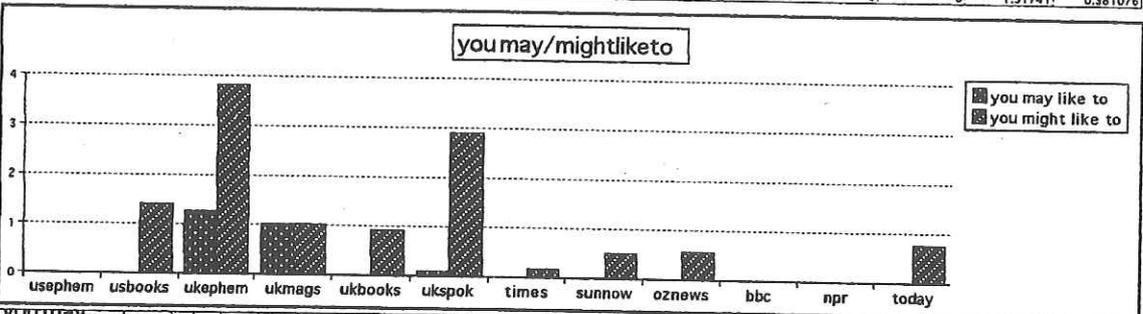
had better は脅迫調となりがちなので2人称主語での使用は控えた方がよい。(Quirk et.al等)
助言には代わりに it would be better を用いるとよい。

You might like to は目上の人に対する型。(松本&松本1989)

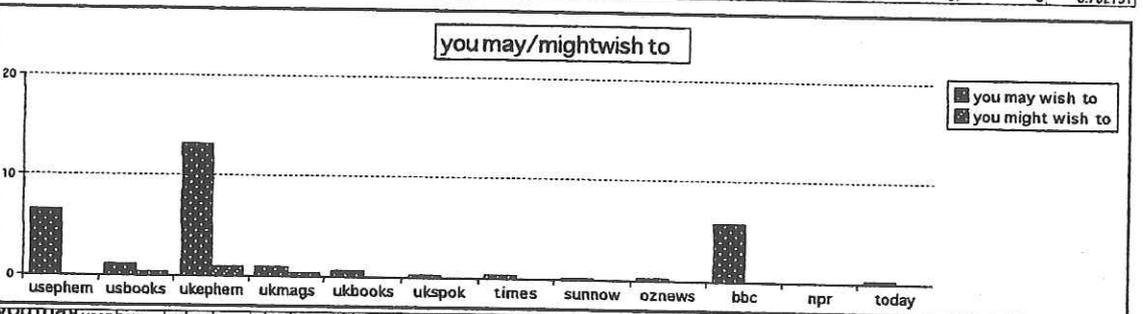
Tables of distribution



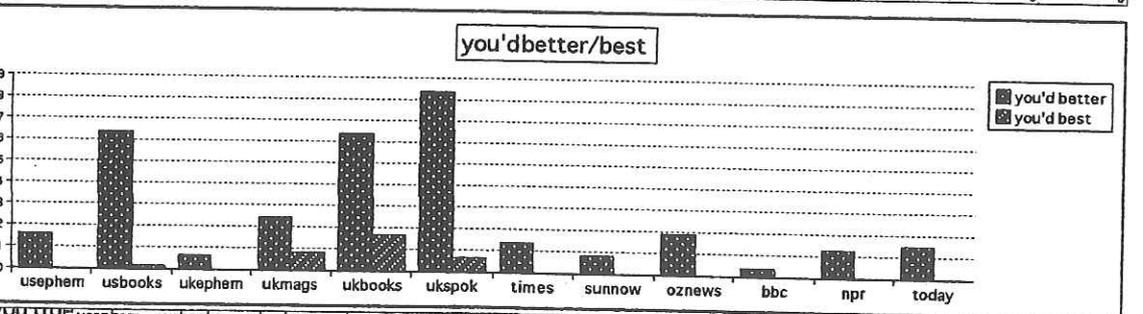
	usephem	usbooks	ukephem	ukmags	ukbooks	ukspok	times	sunnow	oznews	bbc	npr	today
you may want to	8.98172	8.17569	5.44112	2.44799	1.49414	1.29414	0.693991	0.519068	0	0	0	0
you might want to	2.44956	7.99796	1.80039	1.22399	2.24121	7.11776	1.04099	0.515068	0	0	1.91741	0.981076



	usephem	usbooks	ukephem	ukmags	ukbooks	ukspok	times	sunnow	oznews	bbc	npr	today
you may like to	0	0	1.28026	1.01999	0	0	0.107845	0	0	0	0	0
you might like to	0	1.42186	3.84079	1.01999	0.933836	2.91191	0.173498	0.515068	0.562058	0	0	0.762151



	usephem	usbooks	ukephem	ukmags	ukbooks	ukspok	times	sunnow	oznews	bbc	npr	today
you may wish to	6.53216	1.06639	13.1227	1.01999	0.560301	0.21569	0.346996	0.171689	0.187353	5.74741	0	0.190538
you might wish to	0	0.355465	0.960198	0.407898	0	0	0	0	0	0	0	0



	usephem	usbooks	ukephem	ukmags	ukbooks	ukspok	times	sunnow	oznews	bbc	npr	today
you'd better	1.63304	6.39837	0.640132	2.44799	6.39837	8.4119	1.38788	0.658446	1.87353	0.383161	1.27827	1.5243
you'd best	0	0.17732	0	0.815995	1.6809	0.647069	0	0	0	0	0	0

1.3. may want to 類の位置づけ

You may want to

関係詞節や接触節内での用例が多い。

- (8) Normally, women with dry skin have little need for a toning lotion. But there are times when even a woman with dry skin may want to use a toning lotion, in her T-zone <f> only.

(B9000000434 Take Care of Your Skin Brumberg, Elaine HarperPerennial USA F book)
but に導かれて前件を否定して別の意見を提示する用例もある。指示的命令的な文脈での使用も可能。

- (9) It's very hard for you, because in your case these urges take the form of voices. But you may want to consider the possibility that your fatigue and your fears are natural emotions." (B9000001357 Short-Term Parent-Infant Psychotherapy Trad, Paul V. BasicBooks (HarperCollins) M 1993 USA)

You may wish to

関係詞節内及び接触節内での用例は多い。

- (10) We believe by adopting this approach we can provide a service exactly matched to your needs. <p> Here are some of the topics which you may wish to consider in your professional development planning -- <p> Flexible and Open Learning <p> A Level Teaching and Learning Styles

(E0000001099 TVEI Newsletter Cambridgeshire County Council Education Service UK 1992)
orやalternativelyに続けてoptionの一つを示したり、まず理由を言っておいてからsoやthenに続けて用いられる例も多い。

- (11) There are suggestion forms and envelopes behind Reception. Or you may wish to contact one of the community representatives on the Facilities Users Committee. Or simply drop in on your way through the Centre and deliver your suggestion personally. (E0000001185 Zena Wooldridge - Principal Recreation Manager Munrow Sports Centre, The University of Birmingham UK 1992)

You might like to

面前の相手に対し直接法で助言を与える文脈での使用は多くない。

I think をつけたり、関係詞節内でかなり控えめな提案の形で使用される例が多い。

- (12) Monica and John were here for Easter and we enjoyed special meals and card playing etc. <p> I thought you might like to have my recipe for cold curried chicken that Isobel has mentioned so I'll type that for you, or write it maybe.

(E0000002126 Grace UK 1993)

相当に丁寧な言い方であると考えられる。

主としてイギリス英語で助言の定型表現として最も特化している。

You'd better

(全190例中2人称主語が33例で、大半は3人称主語。1人称も少なくない。)

明らかに脅迫調、高圧的命令調と解釈できるものが多い。

- (13) Frau¨lein Wendel has confirmed that she saw you in Schloss # Langenbach a week ago. You have been hiding there, Marvell. You 'd better tell us all about it. Then we can discuss other # things.

(B0000000072 In Love and War Townsend, Eileen HarperCollins 1989 UK F narr)
表現をやわらげる必要からI think や perhaps をつけたり、関係代名詞節内で使用される例が多い。

- (14) So perhaps you'd better start # worrying about something more likely such as being struck by lightning. (N2000951104 Sat 4 Nov 1995)

it would be better

123例中、if 節、whether 節中での間接疑問の用法が極めて多い。

- (15) Anyone seeking radical change in Saudi Arabia and the Gulf has only to # look at the dire nature of neighbouring alternatives to wonder whether it # would not be better to leave well alone or at most to seek gradual rather than # violent change.

仮定法の if による条件節、ないしは不定詞句を伴う例が非常に多い。

(16) In Archer's case, most of the money was given to Ely Cathedral and The Cambridge Hospice, but perhaps it would be better if at least a portion of the money were automatically donated to charity. (N0000000048 Tatler Publishing Company Ltd.(part of Conde Nast) UK August 1992)

I think, I feel 等の従属節内での使用例も多い。

(17) I could've joined Wolves 18 months ago from Leicester City. But at the time there wasn't much money about and I felt that it would be better for me to link up with Newcastle. (N0000000698 90 Minutes IPC Magazines Ltd. UK 3rd July 1993)

<まとめ>

軽い提案や助言、穏やかな指示の場面では may want to に類する表現が用いられるが、had better や it would be better 程には出現頻度は高くない。それでも現代英語におけるていねいな「助言」の表現として一定の地位を占めていると言える。

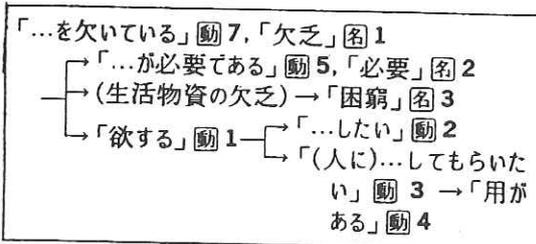
2、「願望」表現が「助言」として機能するプロセス：婉曲表現起源仮説

2.1. want の語義の派生過程について

カレッジライトハウス英和辞典(研究社1995)

「基本英単語の意味」(村田1985)

(歴史的派生順序によらず共時的観点で最も多用される意味を中核に据えて多義を展開させている。)



5 (略式, 主に英) <...>が必要である, <...>が要る (need): Children want plenty of sleep. 子供というものは十分な睡眠が必要である / His hair wants cutting. 彼は髪を刈る必要がある。 [語法] 目的語が動名詞のときには受身の意味になる。

6 [to 不定詞を伴って] (略式) ...しなければならぬ (ought), ...したほうがよい: You want to go to a doctor. 医者に行ったほうがよい。

7 (格式) <...>を欠いている, <...>が欠けている, 足りない (lack); <...>に満たない: This pamphlet wants several pages at the end. このパンフレットは終わりのほうが数ページ欠けている。

want [want] vt.

【基本的意味】(欠けているもの)を望む, 必要とする。

- ① ...がほしい [主語が人] Do you want cream for your coffee? コーヒーにクリームを入れましょうか。
- ② (人)に用がある [ある用事のために人を欲する] You are wanted on the phone. あなたにお電話ですよ。
- ③ (want to do) ...したいと思う I want to visit London. 私はロンドンを訪れたい。
- ④ (want ~ to do) ~が...することを望む I want you to go at once. 君にすぐに行ってもらいたい。
- ⑤ (want ~ done) ~が...されるのを望む I want these shoes repaired. 靴を修理してもらいたい。
- ⑥ (英) ...を必要とする [主語が物・人] Your coat wants mending. あなたのコートは修繕を要する。
- ⑦ ...を欠いている【必要とするものを欠いている】 He wants the power to carry out his ideas. 彼は自分の考えを実行する力を欠いている
- ⑧ [口語] (want to do) ...すべきである You want to eat before you go. 出かける前に食べるべきだ。

2.2. 2つの可能性

A 「欠如」起源説

一つには、want 本来の「欠如・不足」の意味からの用法の発展が想定される。

「(あなたには) ~することが不足している」という明示の意味から、その不足を補うべく「~したほうがよい」という推意が得られ、結果的に助言として機能すると考える。

上の派生経路図はいずれもこの観点に立っている。

wantに関する限りは論理的に自然な説明となりうるのだが、相手の置かれた状況を高みから俯瞰して「~が不足している」と告げるのはいかにも無礼な物言いではある。そこで緩和表現として may, might が伴われることが多いと説明は付く。

しかし、同じく助言用法を有する like, wish の統一的な説明が難しい。これらに「欠如」の意味は求められないので、いったん want の助言用法が十分確立した後に、その本義において類義語である wish, like へと類推により助言用法が拡張されていったと見なければならぬことになると思われる。

B 「願望」起源説

一方、現代英語の may want to, may wish to, might like to をほぼ同義と見て、これらが同時発生的に助言用法を獲得してきたと考える方向もあり得る。これらに共通する「願望」の意味を基点に置いて、その延長上に「助言」用法が成立しているとするのである。これらを一種の婉曲表現と見る考え方である。「(あなたは)～したい、～したくなる」という明示的意味の前提として当然「利益になるから」という意味が暗示される。提案する行為の有益性を暗示することで結果的に聞き手の行動を促す助言として機能すると考えるのである。この際に聞き手の心内状況を話し手が断定的に叙述するのはぶしつけであるので、多くの場合 may(might) が陳述を緩和する hedge 表現として随伴されると考えることができる。

ポライトネス理論では、「肯定的顔」として自分の望みが相手にとっても望ましいものだと思われたいという欲求が前提とされている。これらの表現を「願望」起源ととらえれば、話者が聞き手の立場に視点を投影して、共感的に有益性判断を共有していると考えられる。「聞き手がしたいようにする自由」を大前提として認めた上で発話しているといっても良い。

さらに、A のように直接認知される「欠如」をストレートに述べるよりも、B のように相手の心理を読む表現の方が「予想化」「思念化」を経てより現実からの距離がある。これだけでいい度が増す。

以上の理由から、B の立場に立つ方が、これらがいずれも通常かなりいい度い言い回しとして理解されることにより自然な根拠づけを与えられるのではないか。

- (18) The hefty 30s singles interlock eliminates the `see-through" effect you might find in some knit trousers. There's yet another benefit to this fabric you might want to consider -- it's very, very wrinkle-resistant.
(E0000001992 Land's End Direct Merchants October1994 Lands End Direct Merchants UK.1994)
- (19) Keep this booklet because it contains a lot of information that you might want to remind yourself of in the future. Finally, I would like to wish you, once again, good luck in your future career with us.
(E0000001282 Introduction to Birmingham City Council Birmingham City Council UK.)

現代英語においてこの表現を用いる話者が意識的に上のような複雑な計算をした上で発話しているとは考えにくい。(ていねいな)助言の表現として瞬時に選択されるとみなして間違いなからう。従って派生のプロセスとして上記いずれの立場をとるにせよ、特定文脈での繰り返し使用によってこの表現形式がスキーマ化され、元来は明示されていなかった「助言」の意味が、結果的に表現形式と直接再結合したものと考えられる。婉曲用法の定着が意味の拡張を招いたと考える訳である。

従って否定形は時に「警告」的な機能を果たすことになる。

- (20) Anything missing?" Lydia asked. <p> Not that I know of," he said quietly. `But I'll check after the cops leave. They must be finishing in your room. You may not want to go in there." <p> Why?" she asked fearfully. <p> One glance into Lydia's room gave her the answer. Her desk has been overturned, its contents spilled.
(B9000001399 HarperCollins (Harper paperbacks) 1994 USA book)

3. 助言の want : 助動詞としての「文法化」の途上に位置づける可能性

3.1. 「意味変化の一方向性仮説」との整合性

「意味変化の一方向性仮説」:

語の意味変化は、命題の叙述、命題態度の表明、発話の意図表出の順を追う。

現代英語の法助動詞一般が辿ってきた歴史的経過もこの「一方向性仮説」に沿う。

助動詞においては本動詞用法から root 用法を経て、epistemic 用法へと至る順序。

Traugott(1989)による意味変化における3つの一般的傾向。

Tendency I: Meanings based in the external described situation > meanings based in the internal (evaluative/perceptual/cognitive)described situation.

Tendency II: Meanings based in the external or internal described situation . meanings based in the textual and metalinguistic situation.

Tendency III: Meanings tend to become increasingly based in the speaker's subjective belief state/attitude toward the proposition.

3.2. 考察

want に関しては、既に十分「助言」としてのスキーマ化が定着して may 抜きでも助言場面で用いられるので、少なくとも need ないしは ought に近い疑似助動詞的地位を獲得するに至っていると見て良いと思われる。「意味変化の一方向性仮説」の観点から見ると、派生の第2段階、すなわち root 用法を確立しつつある段階ということになるのかも知れない。

- (21) ASK YOUR EYECARE PROFESSIONAL. </h> <p> When it comes to your vision -- and your looks -- you want to make the best possible choice of lens to meet your changing needs. Your eyecare professional trusts the KODAK Progressive Lens. And you can, too. (UKephemera)
- (22) There was all sorts of wonderful machinery <ZF1> you <ZFO> you want to go up some time I mean have a look walk round if you like. (UKmagazines)
- (23) They were whole when <M01> Right <F02> you boiled them <M01> Okay <F02> You then chop them in half. I mean you can cut them in half if you like and boil them. It makes no difference. You want to collect all the pith and the pips up in a sieve <tc text=pause> press all the juice. (UKspoken)

may wish to, might like to も願望を表す本動詞としての用法から踏み出して、セットフレイズとして助動詞的なモダリティー機能を果たしていると見るべき。ただし wish, like 単独での助言用法は今のところ存在しないので、これらについて助動詞に向けての「文法化」を論ずるのは早計。

これらの用法拡大の過程は、婉曲語法に基づく語用論的推論を経ての暗示的意味と形式との再結合によるものである可能性が高い。また聞き手の内面心理を推察するという点で本質的に epistemic 的でもある。want, like, wish について「願望」の意味の他に「有益性」の意味を取り込む主観化の過程を経たとは言えるが、種々の法助動詞がかつて辿ったと想定される「文法化」(認識の「主観化」)の過程をそのまま踏襲していると見ることはできるかどうかについてはさらに慎重な検討が必要であるように思われる。

The process of change involved in the development of epistemics is hypothesized to be strengthening of pragmatic inferences to relevance, not, as has sometimes been suggested, generalization, bleaching, or metaphor. (Traugott, 1989)

参考文献

- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire and Dangerous Things*. Chicago: The University of Chicago Press.
- _____ and Mark Johnson. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Leech, Geoffrey. 1971. *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- Palmer, F.R. 1979. *Modality and the English Modals*. London: Longman.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive English Grammar*. London: Longman.
- Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, E.C. 1989. *On the Rise of Epistemic Meanings in English*. *Language* 65.
- 生田少子. 1997. 「ポライトネスの理論」. 「月刊言語」第26巻6号.
- 井出祥子. 1992. 「日本人のウチ・ソト認知とわかまへの言語使用」. 「月刊言語」第21巻12号.
- 今井邦彦. 1995. 「英語の使い方」. 東京: 大修館書店.
- _____ 1998. 「英文法を見直す視点: コミュニケーション重視の立場から」. 「英語教育」第46巻13号.
- 赤野一郎. 1997. 「コーパスによる語法研究のこれから」. *Conference Handbook, Fifteenth National Conference of The English Society of Japan*. 日本英語学会
- 尾上圭介、坪井栄治郎. 1997. 「国語学と認知言語学の対話II - モダリティをめぐる」. 「月刊言語」第26巻13号.
- 河上誓作. 1996. 「認知言語学の基礎」. 東京: 研究社出版
- 木塚晴夫. 1997. 「米語正誤チェック辞典」. 東京: マクミラン・ランゲージハウス.
- 小西友七. 1976. 「英語シノニムの語法」. 東京: 研究社出版.
- 斉藤俊雄、中村純作、赤野一郎. 1998. 「英語コーパス言語学」. 東京: 研究社出版
- 澤田治美. 1993. 「視点と主観性」. 東京: ひつじ書房
- _____ 1995. 「法助動詞CAN (=「可能性」) の意味論: 「主観性・客観性」の視点から」. *Conference Handbook, Thirteenth National Conference of The English Society of Japan*. 日本英語学会.
- 清水 博. 1996. 「生命知としての場の論理」. 東京: 中央公論社.
- ジェニファー・コーツ. (澤田治美訳) 1992. 「英語法助動詞の意味論」. 東京: 研究社出版.
- 田村幸誠. 1997. 「主体化から見た法助動詞の段階的意味拡張について: Can, May, Must を中心に」. *Conference Handbook, Fifteenth National Conference of The English Society of Japan*. 日本英語学会
- 中右 実. 1994. 「認知意味論の原理」. 東京: 大修館書店.
- 中尾佳行. 1995. 「Chaucerにおける moot/moste の意味論--文法化と主観化の一事例研究」. *Conference Handbook, Thirteenth National Conference of The English Society of Japan*. 日本英語学会
- 中野弘三. 1995. 「英語法助動詞の意味変化のメカニズム」. *Conference Handbook, Thirteenth National Conference of The English Society of Japan*. 日本英語学会
- _____ 1997. 「意味変化の一方方向性仮説についての考察」. *Conference Handbook, Fifteenth National Conference of The English Society of Japan*. 日本英語学会
- 西村義樹. 1997. 「認知言語学の潮流」. 「英語青年」第142巻 第12号.
- 本多 啓. 1997. 「世界の知覚と自己知覚」. 「英語青年」第142巻 第12号.
- マイケル・マッカーシー. (安藤貞雄、加藤克美訳). 「語学教師のための談話分析」. 東京: 大修館書店
- 松本安弘、松本アイリン. 1987. 「英語の敬語表現ハンドブック」. 東京: 北星堂書店.

A Pragmatic Analysis of PLEASE and WOULD/COULD

Masao Takaji

(Miyazaki Municipal University)

In normal conversation, people generally behave as if their expectations concerning their face wants will be respected, and accordingly participants will attempt to respect the face wants of other people. One of the strategies to lessen the possible impoliteness is the Tact Maxim 'Minimize cost to others' (Leech 1983:132), but regarding the speech act of request, the fact is that it is inevitably involved with imposition. The question, then, arises how we can lessen the degree of imposition via speech acts. Utterances (1) and (2) present awareness of the hearer's face wants by using negative politeness forms.

- (1) Please open the door for me.
- (2) Would/Could you open the door for me?

On the surface, (1) and (2) are similar in their asking the hearer to open the door for the speaker. However, there will be different kinds of politeness associated and marked linguistically with the assumption of social distance and closeness. Hence, despite their similarity on the surface, (1) and (2) are assumed to be different from each other in terms of the degree of politeness. We will now call the request form in (1) the 'Please' type and the equivalent one in (2) the 'Would/Could?' type. This paper is concerned with an analysis of the 'Please' type and 'Would/Could?' type, emphasizing (a) some behaviors of those types and (b) distinctions between them, when used to perform the speech act of request.

According to Leech (1983:97), the request produced by the 'Can you?' type is performed via the suggestion strategy.

- (2) A: Can you answer the phone?
B: Yes.
A: In that case, please answer it.
B: O.K.

- (3) A: Can you answer the phone?
B: O.K.

(3) is an abbreviated dialogue derived from (2), which proves that 'Can you answer the phone?' in (3) performs the illocutionary act of request. By the same token, the 'Do you mind?' type in (5) presents a request via the suggestion strategy as well, as shown in (4).

- (4) A: Do you mind if I open the window?
B: No, not at all.
A: In that case, let me open the door.
B: Yeah, sure.
- (5) A: Do you mind if I open the window?
B: Yeah, sure.

In terms of saving the face wants of the hearer a pre-request is assumed to provide an opportunity for the speaker to halt the potentially risky act. One of the examples Yule (1996:67) notes as a pre-request element is 'Are you busy?' uttered prior to actually making a request. Here we will assume the 'Would/Could you?' type as a pre-request making a request, as shown in (7).

- (6) A: Can/*Could you answer the phone? (=pre-request)
B: Yes. (=go ahead)
A: In that case, please answer it. (=request)
B: O.K. (=accept)
- (7) A: Can/*Could you answer the phone? (=pre-request)
B: O.K. (=accept)

In spite of their similarity in function, in (6), Could cannot replace Can in the 'pre-request' interpretation, because the pre-request is concerned with the present moment. It follows then that in (7) could, unlike can, does not operate to make the utterance perform a pre-request; it is simply the past tense form of can, indicating the past time (which excludes the present moment). Given this analysis, we can assume could in (7) as dealing with the possible world which represents psychological distance and thereby mitigating the amount of imposition

to add to the respect of the hearer's face wants. Yule (1996:133) defines a pre-request as 'an utterance before a request to check if a request can be made.

Our further observation of a pre-request reveals that it can be described as a preparatory condition. This leads us to note that the pre-request in (7) is confirming whether the preparatory condition will be satisfied or not. A preparatory condition for a request stipulates that the content of an utterance is to be about a present or future event, but not a past event or an event which will happen in itself. In (7), can is concerned with a present or future event, but the case is not true of could. The discussion here leads to the assumption that can is involved with a preparatory condition for request, but it is not the case with could. Consequently, a preparatory condition has to be asked straightforwardly. There is another point to make in relation to the meanings of can. One of the meanings supplied by can is defined as 'the capacity or power to do something physical or mental' (Declerck 1991:389). Depending on the definition, 'Can you answer the phone?' is ambiguous; in the 'physical ability' interpretation of can, it means, 'Is it in your power to answer the phone?', and in the 'mental ability' interpretation, it means, 'Are you willing to answer the phone?'.

Utterances (1) and (2) are similar in that they both are used to avoid a face threatening act, and to clarify the obliqueness in these utterances, let us map out the difference of the utterances in terms of speech acts.

First, utterance (1) is structurally an indirect speech act, while utterance (2) is structurally a direct speech act. The 'Could you?' type in (1) is not directly associated with a request, but as discussed above, it is structurally asking a question about the 'physical ability' or 'mental ability' of the hearer to open the door. (Notice that 'Are you able to open the door for me?' does not, with or without please, make a request despite its sharing the same meaning with 'Can you open the door for me?'). The 'Would you?' type in (1) is not directly associated with request either, but it is structurally confirming if the hearer has the intention to open the door.

Second, utterance (2) above, in nature, belongs to Directives, and only if it co-occurs with please can it be a naked request, which otherwise will present a naked command. Utterance (1) is a request with or without please, while utterance (2) will be no more a request if please is left out, thus a command taking the place of the request. Consequently, the please in (1) is assumed to act as an intensifier of force of request (which is the cause of its 'free' appearance), while the please in (2) is assumed to be a necessary element of the structure for performing a request.

Third, by way of making sense of (1) and (2) we are required to examine the social relationship between speaker and hearer in terms of politeness. Let us examine the examples in (8) when asked of a total stranger at the bus stop.

- (8) a. (Excuse me.) Please tell me the time.
b. (Excuse me.) Would/Could you tell me the time?

In the bus stop context, (8a) is interpreted as an impolite utterance, and (8b) as a polite utterance. In a situation where the hearer is socially distant, respectful or deferent expressions are preferred because such an utterance as (8b) is structurally a question which affords the hearer optionality (he or she can reject the request). On the other hand, such a sentence as (8a), structurally, does not give the hearer an opportunity to think otherwise, ignoring optionality, and thereby gets the pragmatics wrong in the context described above.

Indirect speech acts are generally assumed to be associated with greater politeness than direct speech acts. However, if asking the time occurs between a married couple, pragmatically, such an expression as 'Hey, what's the time?' usually becomes a more appropriate expression than expression (8b) or even expression (8a), because the former presents a psychologically proximal state of mind and the latter a psychologically distal state of mind.

From the perspectives discussed above, we arrive at the outcome that if (1) and (2) are to be used as a request to

someone with higher social status, the former is understood as preferred to the latter, as shown in (9a) and (9b).

- (9) a. Professor Burke, could you open the door for me?
My hands are full.
b. Professor Burke, please open the door for me. My hands are full.

Psychological processes can be at work when proximal and distal expressions are used, as described above. Let us examine the examples in (10) and (11).

- (10) (Mother to daughter)
a. Please give me a ride to the airport.
b. Would you give me a ride to the airport?
(11) (Mother to daughter with whom she is in bad terms)
a. Would you give me a ride to the airport?
b. Please give me a ride to the airport.

Normally, when a mother makes a request to her daughter, she uses such a type of request as (10a), but not the type in (10b), because she recognizes herself as having a higher status. However, when the mother-daughter relationship is bad, she is likely to use (11a), not (11b). In this case, she wants to keep aloof from her daughter using a distal expression.

Fourth, making a request by using (1) is described as negative politeness and making a request by using (2) is described as positive politeness. Sentence (1) is oriented to the hearer's negative face, emphasizing the speaker's awareness of the imposition. Sentence (2) appeals to more friendship and solidarity. Yule (1996:64) presents such examples of negative politeness as (12a) and (12b), which make a sharp contrast with (12c) showing positive politeness. The type of request presented in (12c) appeals to a common goal, and even friendship.

- (12) a. Could you lend me a pen?
b. I'm sorry to bother you, but can I ask you for a pen or something?
c. Hey, buddy, lend me a pen, please.

Yule argues that negative politeness is typically expressed via questions, even questions that seem to ask for permission to ask a question (for instance, 'Can I ask a question?'). His argument here is related to optionality described above.

Next, we will discuss another sentence type that performs the 'could' type of request. To follow Leech's (1983:1369) perspectives, pragmatically (13a) can be interpreted as a request with emphasis on warning or threat. What is communicated in (13a), without being said, is that the speaker is not interested in, or dubious about the hearer's becoming more thoughtful. It seems, then, that the speech act produced via utterance (13a) is not so much a request as irony. We acquire this interpretation due to the assumption that (13a) presupposes 'You were not thoughtful', which expresses the opposite state of affairs from what the speaker has expected.

- (13) a. You could be more thoughtful.
- b. Could you be more thoughtful?

Despite the fact that utterances (13a) and (13b) with different syntactic forms perform the same type of speech act (request), they are distinct in that the request performed by sentence (13b) is a rather straightforward matter and (13a) presents, as described above, a more intricate strategy to communicate much more than is said (in this case, irony and order). However, it remains a request at any rate, passing the 'please' insertion test ('You could be more careful, please').

In the classroom situation, the teacher may use (14a), (14b), or (14c) to get a student who is dozing off out of the room.

- (14) a. Would you like to go out of the room?
- b. Could you go out of the room?
- c. Please go out of the room.

The choice of such a type of expression as (14a) in the particular context means that the speaker is using a more polite form of request than is needed. In other words, on

the face of it, it does not fit in with the context at all and thereby is assumed to be inadequate to be employed for a request in this situation. However, in terms of distance, we can assume that the politeness expressed in (14a) presents diametrically the opposite state of the student, which produces irony. There is assumed to be an aim in using this kind of irony in the particular context: strong order. The irony is pragmatically highly specialized towards performing the speech act of order. Similarly, (14b) presents a request, which does not have as strong a force as (14a) because of the nature of the construction. The difference between the two utterances is focused on the presence (or absence) of 'like to' which adds to the amount of optionality. On the surface, (14c) is the most ordinary expression of the three to be used in this context. However, note that ironically, but factually, 'Go out of the room.' (without please) may be understood as a weaker expression in the particular context. The argument here leads us to assume that the degree of the speaker's anger in this context is in proportion to the amount of politeness.

In a restaurant context, some possible expressions for an order of coffee may be:

- (15) a. Coffee please.
- b. I'd like a coffee, please.
- c. I'll have a coffee, please.
- d. Can/Could I have a coffee, please?
- e. Give me a coffee, please.
- f. Would/Could you give me a coffee?

Following Leech's (1983:132) Generosity Maxim 'Minimize benefit to self' and 'Maximize cost to self', in (15a)-(15d) the cost is to self, not other and in (15e) and (15f), the cost is to other, not self. This consideration produces the outcome that (15a)-(15d) are assumed to be appropriate as an order of coffee in the particular context, while (15e) and (15f) are not. Then we can assume that 'Coffee please' is not derived from 'Give me a coffee, please', which does not present a proper way of ordering a coffee in a restaurant; instead, it is an

abbreviation of 'I'd like a coffee, please.'

In this paper, we have investigated the 'Please' type and 'Would/Could you?' type of request. Lakoff (1990:34) argues that indirectness can function as a form of politeness. In this perspective we have attempted to capture some pragmatic functions of these two types and have arrived at the outcome that the request using the please form presents rather 'straightforward' imposition and the request using the 'Would/Could you?' type is concerned with a wide range of psychological states of mind.

Bibliography

- Austin, John L. 1962: How to Do Things with Words. Oxford: Oxford University Press.
- Blakemore, Diana 1990: Understanding Utterances: The Pragmatics of Natural Language. Oxford: Blackwell.
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen 1987: Politeness. Cambridge: Cambridge University Press.
- Grice, H. Paul 1975: Logic and Conversation. In Peter Cole and Jerry Morgan (eds), Syntax and Semantics, vol.3: Speech Acts. New York: Academic Press.
- Kasper, Gabriele 1994: Politeness in R.E. Asher (ed.): The Encyclopedia of Language and Linguistics. Volume 6. London: Pergamon.
- Lakoff, Robin 1990: Talking Power: The Politics of Language. New York: Basic Books.
- Leech, Geoffrey N. 1983: Principles of Pragmatics. New York: Longman.
- Levinson, Stephen C. 1983: Pragmatics: Cambridge: Cambridge University Press.
- Mey, Jacob L. 1993: Pragmatics: An Introduction. Oxford: Blackwell.
- Searle, J. 1969: Speech Acts. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sperber, Dan and Deirdre Wilson 1986: Relevance: Communication and Cognition. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Yule, George 1996: Pragmatics. Oxford: Oxford University Press.
- Verschueren, Jef 1979: What People Say They Do with Words. Berkeley: University of California.

英語の談話標識 *you know* の中心的機能を求めて

浜口 崇 (htakashi@mse.biglobe.ne.jp)

元関西外国語大学大学院

本研究では英語の談話標識 *you know* の中心となる機能について考察する。*you know* の様々な語用論機能が先行研究 (Schourup 1985, Holmes 1986, Schiffrin 1987, 神尾 1990, メイナード 1993 等) によって指摘されているが、これらの機能の元になる根源的機能についての文という単位を越えた場合の記述に不十分な点があるように思われるので、これらの記述の弱点を補うことを目標とする。

you know の先行研究のひとつの流れは話し手と聞き手の間の知識の状態によって説明を試みるものである。ただ、この考え方をとる限りは *you know* が文中の比較的任意の場所に挿入して使えるだけでなく、前後の発話との関係でも使えるという事実を充分説明することはできない。

- (1) [you know] indicates that the speaker expects that there is no communicatively significant discrepancy between what is now in the private world and what is now in the other world, with respect to what is now in the shared world.

Schourup (1985) p. 102

- (2) *Y'know* is used to reach situation (a) in the meta-knowledge matrix, in other words, to create a situation which the speaker knows about

knowledge which is shared with the hearer.

Shiffrin (1987) p. 269

- (3) 1. "Y' know X?" はXについて尋ねているわけでXは新情報。話し手は聞き手がXを知らないと想定して尋ねる。
2. "X, y' know?" 又は "X, y' know" はXが最初に出ているので旧情報と考えられ、話し手は聞き手がXを知っていると想定して尋ねたり確かめたりする。

メイナード (1993) p. 114

まず、情報を与える側と受けとろうとする側とで *you know* の使用頻度や使い方にごのような違いがあるのかについてインタビューのデータを元にして出現位置ごとに観察を行う。データはNHK教育テレビで放送されていたものから168本をテキスト化したものをおもに使用する。

情報を引き出そうとする側と与えようとする側とで違いがあるとすればなぜそのような違いが出てくるのか、違いが無いとすればなぜ違いが出てこないのかについて議論する。

	形式	回数	%
発話冒頭	You know,	235	24.1%
	You know?	2	0.2%
	(other)	24	2.4%
発話中		593	61.0%
発話末尾	you know.	96	9.8%
	you know?	22	2.3%
合計		972	100.0%

表.1 回答者側

	形式	回数	%
utterance-initial	You know,	22	25.6%
	You know?	0	0.0%
	(other)	2	2.3%
utterance-medial		57	67.1%
utterance-final	you know.	2	2.3%
	you know?	2	2.3%
Total		85	100.0%

表.2 質問者側

以下のような実際の用例を見てみると、その位置やイントネーションにかかわらずその前後に一定の法則性がみられるように思われる。

- (4) Joseph: What does this tell us about our culture? It seems like some people almost worship, *you know*, these figures.

1996/07/31

- (5) HILLARY RODHAM CLINTON: I was- I was surprised. Because it's a sort of a different kind of a book, *you know?* It's not a memoir, and it's not a strictly policy work book, but it does talk about my 25 years of work on behalf of children and my experience as a daughter and a wife and a mother. ...

Larry King Live, CNN 1996/05/20

- (6) King: Yeah. He knows about the show, *you know*. In fact, a rumor...Gary Shandling said he called in once and he called himself "Johnny from Rome."

1996/06/05

- (7) Joseph: Now, here in the U.S., young boys want to grow up to be baseball players or firemen. What did you want to grow up to be when you were a young boy?

Pallack: You know, I wasn't sure. I always wanted to be an entrepreneur and a businessman and to be successful, and I really didn't know what my path in life was, and this just kind of developed and then exploded, and I never really thought in my twenties that this was it for me. But it just developed, and then I enjoyed it more and more, and this is where I am.

1995/04/26

(8) Wright: It's super. It's super. It's just like, *you know*, I can go watch my son play. And OK, Tony's my son. That's not the big deal. The big deal is I'm the one that helped to put him there. I can go see a guy that Houston drafted, Eric Ireland, you'll meet him in a few minutes. I helped him. He got signed by Houston. Between my son and Ireland, they got about \$2 million. So that's not too bad, you know, for two kids that are just right out of high school, you know. I'm going over, well, today's Friday. I'm going over tonight, and watch one of my students pitch at Cal State Fullerton. Kirk Irvine. You know, Cal State Fullerton played

98/08/07

(9) Joseph: Do you ever walk down the street, and see people with, *you know*, funny hairstyles and just say, "Aah!" You can't believe they're doing this. Or do you analyze, or take your work out with you?
Savone: No, you know why? Because maybe that's what they wanted. *You know*, I don't do that at all. I used to, *you know*, when I was younger because I knew I think I could do better. Then I realized maybe that's what she wanted, and that's what makes her happy. So I don't do that, no. I think it's fun. I never put any other work down. I never put any other look down. But I look and see how I can make it work for me and my clients.

96/06/19

このように(4)から(9)に示した例文すべてにおいて、*you know*の前の情報を

*you know*の後ろで補足している。これらのことより*you know*の文という枠を越えた中心的機能を提案する。この機能とは*you know*の前後の情報の性質そのものの規定を行うというものである。具体的には次のような機能を想定することにより、様々な語用論的機能が派生可能であることを示す。

(10) X *you know* X'

X は聞き手が知っていることを強く期待される情報である。

X'は聞き手がXほどは知っていることを期待されない情報であるか、Xを与えられたときに聞き手が推論などにより導出可能な情報である。

*you know*の機能を1つにまとめる事により、異なる話者の発話にまたがった解釈が容認できる事にもなり、文脈を従来以上に考慮した機能の分析が期待できるようになると考える。

参考文献

- 浜口 崇 (1998) 「英語の談話標識 *you know* をめぐって」 『高原脩教授還暦記念論文集』 高原脩教授還暦記念論文集刊行会.
- Hamaguchi, Takashi (1998) "The core function of *you know*: Where is the origin of the pragmatic functions?", 第6回国際語用論会議発表.
- Holmes, Janet (1986) "Functions of *you know* in women's and men's speech," *Language in Society* 15 pp.1-21
- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわばり理論』 東京: 大修館書店.
- メイナード・K・泉子 (1993) 『会話分析』 東京: くろしお出版.
- Östman, Jan-Ola (1981) *You know: A discourse functional approach*, Amsterdam: John Benjamins.
- Schiffrin, Deborah (1987) *Discourse markers*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Schourup, Lawrence C. (1985) *Common discourse particles in English conversation*, New York: Garland.

フォークサイコロジーとしての語用論

—発話についての常識的説明の構造・機能・地位—

高梨克也

京都大学人間・環境学研究所

0. はじめに：語用論の二つの地位

多くの語用論理論は、通常、発話の文脈における意味の理論的解明(科学的語用論)を目指すものであると考えられてきた。しかし研究者によるこうした専門的分析以外にも、会話参加者は日常会話内において必要に応じて自分達の発話についての「説明」を行うことがある。本発表では、こうしたいわば「日常的語用論」が社会的相互作用の中で果たしている機能を分析することを通じて、従来の語用論の地位を再検討することを目指す。

I 理論的背景

1. 認知科学におけるフォークサイコロジーの地位

日常的語用論の科学的語用論との関係を考えるためには、認知科学におけるフォークサイコロジー (folk psychology) (以下FP) の位置づけをめぐる議論が参考になる。従って、本発表は発話行為論に象徴される語用論理論を行為論一般の枠内で再検討することから出発する。なお、FPとは、人々が日常的に行う、行為についての心理状態による説明のことである。

*FPをめぐる対立する三つの見解 (*1)

FPの位置づけを巡る従来の論争の中心は、意図や欲求、信念などの心的状態(mental states)についての実在主義(realism)と消去主義(eliminativism)の対立にあった。

a) 表象主義・計算主義的機能主義 (Fodor, Pylyshyn ら)

FPにおいて言明される志向状態が何らかの意味で実在すると仮定する立場。意図・信念・欲求などの志向概念には命題態度の記号計算の際の独自の機能があり、こうした意味論的レベルでの機能は神経科学の対象である機構的レベルには還元できないとする。

b) 心についての消去的唯物論 (P&P Churchland)

これらの志向状態には神経レベルでの実体がなく、こうした志向状態の実在を仮定するFPは神経科学に還元されなければならないという立場。

しかし、本発表の目的は、日常的語用論における言明の科学的営為としての妥当性を論じるのではなく、これが現に日常生活において用いられているということの意義を解明することにあるため、こうした論争に立ち入る必要は必ずしもない(*2)。言い換えれば、a)やb)の立場はFPの記述的側面を論じているのに対して、本発表の立場は、日常的相互行為においてFPのもつ規範的側面を重視するものである。こうした観点からの主張には以下のようなものがある。

c) 規範主義—FPと科学の共約不可能性 (Davidson, Dennett ら)

FPの役割は人間を合理化し理解することにあるのであり、その言明についてはそもそも真偽を問題にすることはできないとする立場。

その主張によれば、行為についての「説明」には他の因果関係から区別されるところの次のような特徴がある。

* 行為についての「説明」の特徴

1. 目的論的解釈 (von Wright,1971):

フォン・ウリクトは「説明」を「理解」と関連づけて考察している。彼によれば、「理解」は因果論的なものと目的論的なものに区分される。当然、行為の「理解」に必要なのは後者の目的論的理解である。また、行為が「何であるか」を理解することと、その行為が「なぜ行われたか」を説明することは相互依存的な過程であり、両者を分離して考えることはできない。その理由は次の点ある。

2. 記述負荷性 (Anscombe,1957):

ある行為が「何であるか」という記述とその行為が「なぜ行われたか」についての説明とは論理的に独立でない。つまり、ある行為の意図の有無はその行為がどのように記述されるかという点に依存しており、逆に、その意図は当該の行為に言及することなしには論じられない。従って、行為についての「説明」の妥当性を論ずる際には、次の性質に留意しなければならない。

3. 事後性 (von Wright,1971):

行為についての「説明」は次のような構造を持つが、これは他の因果論的説明とは異なり、「行為の事後から(ex post act)」のみ必然である。

[表1] 行為の目的論的理解の構造

前提1: 行為者Sはある種の事態pを意図する

前提2: Sはpの実現のためには、行動aを取ることが必要だと信じる

結論: ゆえに、Sはaに着手する。

逆に、ある行為について心的状態による「説明」が必要となるのは、この行為が何らかの意味で「問題のある」行為である場合のみである。すなわち、こうした推論はアブダクション、特に仮説の発見としての地位を持つ(*3)。

4. 文脈感応性:

従って、「説明」において述べられるべき内容は、聞き手の抱く「疑問」に対して相対的にしか決定できない(*4)。言い換えれば、行為についての「説明」には記述負荷性に加えて、文脈感応性という特徴があることになる。そして、「説明」が聞き手の抱く「疑問」に対して相対的であるということは、次の特徴の現れである。

5. 合理性 (Davidson,1980):

ある心的状態を他者に帰属する場合、その相手は合理的であると想定していなければならない。逆に言えば、ある人物の行為が一見合理的でないとと思われるときに、この疑問を解決し、この行為者を合理性の枠内に回収する試みとして用いられるのが心的状態による「説明」であるということである。従って、この帰属は聞き手の「疑問」という規範的規準に照らして、当該の行為を正当化できるものでなければならない。

さらに、デイヴィッドソンはこうした心的状態の帰属に関して、もう一つ重要な制約をあげている。

6. 全体論 (Davidson,1980):

ある心的状態の帰属は他の心的状態と整合的に、つまり全体論的に、行われなければならない。この特徴により、ある行為についての心的状態による「説明」の妥当性は、当該の命題の現実との「対応」、すなわち言及された心的状態の存在の有無よりも、むしろこの人物の行為や心的状態についての他の言明との「整合」性によって判断されることになる。

7. 志向姿勢 (Dennett,1987):

他者の行為の「理解」と「説明」に際して現れる、以上のような特徴をまとめて、デネットは他者に対して「志向姿勢を取ると表現している。「志向姿勢」をとることは、他者の行為を理解あるいは予測するための「道具的」な戦略である。

2. エスノメソドロジーとの類似性: ガーフィンケル

1. 説明可能性(accountability):

ガーフィンケルは、人々は日常の相互行為のなかで、互いの「日常活動をありふれた日常活動として、あらゆる実際の目的にとって合理的に見え、また、報告できるものにしていく、つまり、『説明可能なものにする(accountable)』」(Garfinkel,1967: vii)様々な方法を不断に実践している、と考えている。

2. ドキュメンタリー的解釈法(documentary method of interpretation):

「ドキュメンタリー的解釈法」とは、実際に見えている出来事や行為を「説明可能な」ものにするために、これを背後の基本パターンの「証拠(document)」として解釈するという、実践的推論(practical reasoning)の方法である。ここで言う「実践的推論」とは、まさに上述の目的論的理解のアブダクション的性格と同一のものである。つまり、行為とこれに関係する心的状態の間にある関係は、因果関係ではなく、むしろここで言うところの「外見」と「基本パターン」の間の関係である。そして、こうした「外見」と「基本パターン」とは互いに「相互参照的」である。

3. 相互参照性(reflexivity):

「相互参照性」とは、ある活動とそれを取り巻く状況とが相互の構成的な要素となっているということである。この観点をこれまで論じてきた行為の理解という問題に当てはめるならば、ある行為の理解とその行為に関わっているとされる心的状態の間にも、ここで言うところの「相互参照的」な依存関係があるといえる。従って、ある行為を行為者の心的状態に言及することによって「説明」するということは、ある行為に対してその目的論的理解のために必要なミニマル・コンテクストを付与することによって、この行為を「説明可能な」ものにするという実践的営為であるといえる。

3. 行為論としての発話行為論

* 行為理解と発話理解

ある状況において発話を理解するということは、発話者の意図や聞き手のとつての関連性、発話状況などを理解すること、つまり発話を行為として理解することを不可欠に含むものである。さらに、他の行為一般についてと同様、これらの文脈情報は当該の発話と「相互参照的」に理解されるものであり、両者を相互に独立で継時的な二つの過程と見なすことはできない。従って、ある発話の状況における理解とは、発話と文脈の間の整合性を見出すことであり、この両者は発話理解のための不可欠で相互依存的な構成要素である(*5)。逆に、当該の状況における発話(被説明項)の理解について何らかの問題が生じた場合には、通常は明示されないこれらの文脈情報が、この発話についての「説明」として顕在的に述べられることになる。なお、ここでは、被説明項発話の発語内行為としての次元についての疑問とこれに対する「説明」に議論を限定する(*6)。

* サールの発語内行為類型

発話行為についての従来の語用論的研究の多くはサールによる分析を利用してきた(Leech,1983など)。しかし、意図や欲求、信念などの心理状態に対するサールの立場は上述のa)の实在論に近いものである。このことは、彼の発語内行為類型の分類基準から明らかである。Searle(1979)は、1.発言の目標(Illocutionary Point)、2.適合の方向(Direction of Fit)、3.誠実性条件(Sincerity Condition)、4.命題内容(Propositional Content)などを規準として、次のような発語内行為類型を提示した。

[表2] サールの発語内行為の5類型 ([]内は誠実性条件)

1. 信念表明型 (Assertives)	[Belief (that P)]
2. 行為指令型 (Directives)	[Want (or Wish or Desire)]
3. 行為拘束型 (Commissives)	[Intention]
4. 心情表明型 (Expressives)	[Expressed]
5. 宣言型 (declarations)	[No]

II 事例研究

4. 説明的発話連鎖の分類

ここでは、会話において何らかの疑問を引き起こす(可能性のある)発話(被説明項P)とこの疑問を解決するための発話(説明Q)からなる連鎖を一つの単位として「説明的発話連鎖」と呼ぶ。前述のように、発話と文脈情報は発話の状況における理解の不可分の構成要素であるため、説明的発話連鎖は発話者の合理性を保証するような内的整合性を持たなければならない。

*「のだ」文の分類

まず、発話についての「説明」が被説明項となる発話のどの層に向けられているかという点を区別するために、日本語の文末表現「のだ」の分類を利用する。「P、Qのだ。」の連鎖において、発話Qが先行発話Pを何らかの意味で「説明」している場合、Qは聞き手がPに対して抱く(であろう)疑問に対する応答になっている。従って、PとQの関係はこうした疑問の種類によって分類できる。

[表3] 「P、Qのだ。」におけるPQ間の関係の種類 (*7)

関係1: 原因や理由の説明—QがPで表現された出来事の原因や理由である場合

関係2: 判断の根拠—Qがある判断Pの根拠となっている場合

関係3: 発話行為の正当化—Qがある発話内行為Pを行うことの原因となっている場合

関係4: 関連性の明示—QがPを言い換えたり、別の角度から述べたり、要約したりしている場合

例文:

- (1) 風邪をひいた。雨に濡れたのだ。
- (2) 風邪をひいた。熱があるのだ。
- (3) 急いでくれ。時間がないんだ。
- (4) 太郎と次郎が来た。これで全員集まったのだ。

「Qのだ」が被説明項Pのうちのどのようなレベルに向けられた「疑問」に対する応答であるかは、各文を次のようにパラフレーズすることによって明らかになる。

- (1') 風邪をひいたのは雨に濡れたからだ。
- (2') 「風邪をひいた」と話し手が判断したのは熱があるからだ。
- (3') 「急いでくれ」と話し手が命令したのは時間がないからだ。
- (4') 「太郎と次郎が来た」と話し手が私に言ったのは全員集まったことを知らせるためだ。

このパラフレーズから、関係1のみが言及された事実のレベル(記述世界)での関係を述べているのに対して、他のものはPの発話行為のレベル(会話世界)での適切性を「説明」するものであるということが明らかになる。

さらに、当然であるが、発話についての「説明」に用いられる言語形態は「のだ」だけに限られるわけではない。たとえば、メイナード(1993)によれば、接続表現「だって」には、「話者が、相手が「反対」又は「挑戦した」、又は、する可能性がある」と認められるコンテキストで、自分の立場を正当化する意図を前もって知らせる役目がある(p.187) (*8)。

- (5) 1A: 少し休暇をとろうと思っているの。
2: だって働き過ぎるのは良くないって皆が言うのよ。 (p.185)

Antaki&Leudar(1990)はこうした発話についての「説明」を「Claim-Backing」と呼び、次のように定義している。

Definition of Claim-Backing:

To present evidence that what you have said, or the way in which you have said it, is allowable, sensible or otherwise socially admissible under local conventions. (p.285)

(*9)

5. 発話内行為類型との対応とその帰結

説明的発話連鎖の分類と前記の発話内行為類型の間には次のように対応関係がある。

〔表4〕「説明」の種類と適切性条件

「説明」の種類	Pの発語内行為類型	主に関係する適切性
*関係1(原因や理由の説明)	信念表明型	—
関係2(判断の根拠)	信念表明型	真偽
関係3(発話行為の正当化)	行為指令/拘束型など	誠実性条件
関係4(関連性の明示)	おそらく全ての類型	関連性の原理

なお、ここでは、発話行為についての「説明」ではない関係1と、発話一般に関わるより基礎的なレベルでの関係であるため、発語内行為の類型とは対応しない関係4については考察せず、焦点を関係2と3に絞って議論する(*10)。

次の各例文の「Qのだ」における「説明」は、先行発語内行為「信念表明型」(陳述)と「行為指令型」(命令)に対して、それぞれの誠実性条件に関わる事実を言明している。

- (2) 風邪をひいた。熱があるのだ。
 (3) 急いでくれ。時間がないんだ。

まず、ここでの「風邪をひいた」は信念表明型の発語内行為であるため、その誠実性条件は「信念」であり、「熱があるのだ」は先行発話において述べられたこの信念を裏付けるためのものである。また、「急いでくれ」は行為指令型の発語内行為であり、行為指令型の誠実性条件は「欲求」であるため、「時間がないんだ」はこの「欲求」を持っていることの証拠として述べられているのである。

次の例における'cos'以下の部分も、直前の「依頼」に関して、その誠実性条件である「欲求」を明示している(*11)。

(6) 依頼(質問)の誠実性条件を述べる「説明」

A: m Thank you very much indeed-do you know anywhere which does... sort of...service flats for people 'cos I've got,I...think I shall probably have to come up to town.. and stay for a few weeks in October (Antaki&Leudar,1992: p.191)

以上の分析から、発語内行為類型という従来の語用論理論における知見には日常的語用論としてのある種の有効性があることが明らかになる。しかし、ここで、これらの「説明」において言及される誠実性条件としての「欲求」や「信念」は必ずしも単独で真であることが保証されているとは限らないという点には注意が必要である。すでに論じたように、日常的語用論による「説明」は発話者の合理性を巡って規範的に要請されるものであり、その妥当性はその現実との対応の有無によって判断されるべきものではなく、これが対象としている発語内行為との整合性において判断されなければならないからである。このことは、「依頼」内容の負担の大きさに応じて、「説明」の必要性が増大するという、Blum-Kulka et al.(1989)による通文化的実験結果からも明らかである。従って、「依頼」という行為指令型の発語内行為に対して、その「説明」において誠実性条件として言及される発話者の「欲求」は、この「依頼」に先立って「実在していた」ものを単に表明したものであるというよりも、むしろ「依頼」を行うために発話者が「存在することを請け合わせるを得ない」ものなのである。つまり、これらの「説明」は、被説明項Pが遂行する発語内行為の類型に応じて述べられるべき内容が規範的に決定されるものなのであり、あらかじめ実在していた心的状態を単に報告するものではない。

Thomas(1995)は、話し手自身による発話行為についての明示的な注釈が研究者による語用論的分析の論拠となるというが(邦訳:p.221)、これまで論じてきた日常的語用論の規範的性格を考えるならば、こうした話し手による注釈が発話行為の産出メカニズムの認知科学的記述として妥当するということは全く保証されていないことは明らかである。

(7) TPR:発語内の力を明示する例

- 1 Dan: ...See Al tends, it seems, to pull in one or two individuals onhis side (there). This is part of his power drive, see. He's gotta pull in, he can't quite do it on his own. Yet.
 2 Al: [Wl-
 3 Roger: [Well so do I.
 4 Dan: Year. [I'm not criticizing, I mean we'll just uh=
 5 Roger: [Oh you wanna talk about him.
 6 Dan: = look, let's just talk.
 7 Roger: Alright. (Schegloff,1992: p.1307)

これは、Third Position Repair (Schegloff, 1992) の例である (*12)。ここで Roger は1において Dan が AI を非難していると「誤解」し、3で AI に対する連帯を示すことによって Dan の AI に対するこうした姿勢を非難している。これに対して、Dan は4において自らの先行ターン1の意図は「非難」ではなかったという弁解を示している。しかし、この言明に先行ターン1の産出の際に Dan に「非難する」という「意図」がなかったことを客観的に証明する力があるとは思われない。むしろ、これは Roger が Dan に向けた「非難」に対する「非難」(3)を受けて、これを弁解するために規範的に要請されたものであるというべきである。

従って、日常的語用論の存在意義は、発話の理解を促進し、発話者の行為者としての説明可能性を保証するために利用される実践的方略としての機能にあるのであり、その妥当性の基準は、これが当該の状況における発話と発話者の合理性についての理解に寄与するものであるかという点にあるのであって、「説明」において言及された心的状態などの物理的実在性とは無関係なのである (*13)。

III 帰結と展望

* 要点:

- ・発話内行為についての日常的説明は、進行中の会話において、発話者の発話行為とその正当性を理解するために「規範的に」要請されるミニマル・コンテキストである。
- ・この「説明」の正当性(あるいは真偽)は「対応」する心的状態の有無によってではなく、当該の発話行為やその発話者についての他の想定と「整合的に」(つまり「全体論的に」)判断されなければならない。
- ・サールによる発話内行為類型はこうした日常的語用論と類似していることによって、むしろその認知科学的妥当性についての疑いを生じさせる。
- ・サールが発話内行為の規則と考えた誠実性条件などは発話内行為の必要十分条件ではない。これに対して、オースティンは、発話内行為の適切性について論ずる際に、問題発生状況において事後性に顕在化する、いわば「不適切性条件」を考察している(土屋, 1983b)。

* 二つの方向:

1. 社会学としての語用論: 記述的語用論の必要性 - 日常的語用論の社会的・規範的役割の解明

一部の文化人類学者は、対象文化における発話行為をより広範な社会的文脈や文化的価値観と関連づけて分析することによって、サールの発話行為論に代表される語用論理論の持つ「自民族中心主義」を批判している (Rosaldo, 1982, Duranti, 1993 など)。こうした従来の語用論理論の問題点は、日常的語用論によって規範的に仮定される心的状態や推論プロセスを認知科学的・神経科学的に実在視し、これを発話の産出・理解の際の対称的な認知過程として想定してきたことにある。逆に、日常的語用論に現れた心的状態への言及などはわれわれの文化的価値観の反映であると考えられる。従って、日常的語用論は単に誤りとして捨て去られるべきものではない。むしろ今後の課題は、日常的語用論の実際の構造を具体的事例に基づいて記述することによって、その規範的側面が果たす社会的機能とそこに現れた文化的価値観を解明することにある。

2. 認知科学における語用論: 説明的語用論の課題

他方、認知科学としての語用論は、従来の語用論理論に見られるこうした実在主義や心理主義を修正し、より認知科学的に妥当なモデルを構築することを目指さなければならない。そのための一つの方向として、発話の関連性についてのトラブルが非論証的推論 (Non-Demonstrative Inference) としてのアブダクションによっていかに解決されるのかという点の解明が考えられる (McRoy & Hirst, 1995)。これは今後の課題としたい。

[註]

- *1 この分類は大沢(1990)に依っている。
- *2 Haselager(1997)はフォーダーとチャーチランドの主張をきわめて詳細に論じている。
- *3 Haselager(1997)は第4章で認知科学における非論証的推論の重要性を詳しく論じている。
- *4 この点に関して、著者は高梨(1997a)で、日常会話における「説明」の発生を聞き手の抱く(であろう)「疑問」と関連づけ、この「疑問」の発生を人々が潜在的に抱いている「期待」をもとに予測することを試みている。
- *5 岡本(1998)は発話理解を「発話理解スキーマ」のスロットに挿入される値の間に整合性を見出すことだと考えている。
- *6 発話理解が他の行為一般の理解と異なる点は、発話理解には「情報意図」以外に「伝達意図」の理解が必要だと考えられている点にある。発話の意味を発話者の「意図」の構造から解明しようという方向性は、Grice(1957)に始まり、Searle(1969)による発話内行為の規則の分析において批判的に継承され、さらに Sperber&Wilson(1986)において洗練されてきた。しかし、発話理解に際してこれらの複数の意図の理解が不可欠であるとは必ずしも考えられない。詳細は土屋(1983a)、橋元(1990)参照。
- *7 この分類についての詳細は高梨(1997b)参照。また、この分類は Schiffrin(1987)や田野村(1990)の分析を利用したもののだが、前者は「のだ」文の分析ではなく、後者においては被説明項発話のどのレベルに障害があるかという観点では明確ではない。
- *8 なお、本発表の焦点は発話についての「説明」という「現象」にあるのであって、そのために用いられる特定の「言語形態」を網羅的に分析することではない。
- *9 本発表では詳細に論じることはできないが、発話についての「説明」が生じやすい状況とその連鎖構造は、次のような会話分析の知見に基づいてある程度定式化可能であると思われる。
1. **Third Position Repair(Schegloff,1992):** Third Position Repair は会話における「誤解」を修復するためのメカニズムである。本発表で考察の対象とした発話についての「説明」は、このうちの Problematic Sequential Implicativeness に関係する。特に、Misunderstanding と同様の状況で生じる Non-Understanding(Hirst et al.,1994)の場合には上述のような「説明的発話連鎖」が用いられると考えられる。
 2. **Adjacency PairとPreference Structure:** 隣接ペアの第二部分には選好される(preferred)応答と選好されない(dispreferred)応答の区別が存在し、選好されない応答には「説明」が付与されることが多い(Levinson,1983)。Antaki(1994)はこうした状況で生ずる「説明」を「Explanation Slot」と名づけ、分析している。
 3. **Pre-Sequence (Levinson,1983):** ある発話内行為についての「説明」において述べられる内容は誠実性条件だけではない。Pre-Sequence は、「依頼」や「勧誘」などの発話内行為に先立ってその事前条件を尋ねる形式をとることが多い。
- *10 関係4の「関連性の明示」については、Sperber&Wilson(1986)に基づき今後詳細に分析したい。
- *11 「質問」は聞き手の対して情報を要求するものであるため、ここでは「依頼」に含めて考える。
- *12 *9 参照。
- *13 ここでは論じなかったが、「謝罪」などの心情表明型の発話内行為についても同様の指摘をすることができる。例えば、「謝罪」の場合、命題内容として謝罪の対象となる事態が述べられ、これに対する「謝罪」の心的状態が命題態度として表明されるのが一般的であるが、こうした「謝罪」の妥当性はその対象となる事態(についての把握の仕方)との整合性によって判断されるものであり、こうした事態との関連づけが不明確なまま、単独で「謝罪」の妥当性が論じられることはない。また、サール自身も、心情表明型の発話内行為においては、表明される心的状態の存在は「前提にされている」と見なしている。同様に、他の発話内行為類型においても、その誠実性条件となる心的状態の存在は、實在論的に論じられるべきものであるという以前に、規範的に「前提にされる」ものであると考えなければならぬ。

[参考文献]

- Anscombe,G.E.M.1957. *Intention*. Basil Blackwell. (菅豊彦訳『インテンションー実践知の考察』産業図書、1984)
- Antaki,C.1994 *Explaining and Arguing: The Social Organization of Accounts*. Sage Publications
- Antaki,C.&Leudar,I.1992 Explaining in conversation: Towards an argumentation model. *European Journal of Social Psychology*, 22: 181-194.
- Antaki,C.&Leudar,I.1990 Claim-backing and other explanatory genres in talk. *Journal of Language and Social Psychology*,9-4: 279-292.
- Austin,J.L.1962. *How to Do Things with Words*. Oxford U.P. (坂本百大訳『言語と行為』大修館書店、1978)

- Blum-Kulka, S., House, J. & Kasper, G. (eds.) 1989. *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies*. Advances in Discourse Processes, XXXI. Ablex Publishing Corporation.
- Davidson, D. 1980 *Essays on Actions and Events*. Oxford U.P.
(服部裕幸・柴田正良訳『行為と出来事』劉草書房、1990)
- Dennett, D.C. 1987. *The Intentional Stance*. The MIT Press.
(若島正・河田学訳『「志向姿勢」の哲学—人は人の行動を読めるのか?』白揚社、1996)
- Duranti, A. 1993. Intentions, self, and responsibility: An essay in Samoan ethnopragmatics. in Hill, J.H. & Irvine, J.T. (eds.) *Responsibility and Evidence in Oral Discourse*. Cambridge U.P.
- Garfinkel, H. 1967. *Studies in Ethnomethodology*. Polity Press.
- Giddens, A. 1976. *New Rules of Sociological Method*. Century Hutchinson Ltd.
(松尾精文・藤井達也・小幡正敏訳『社会学の新しい方法規準—理解社会学の共感的批判』而立書房、1987)
- Grice, H.P. 1957. Meaning. *Philosophical Review*, LXVI: pp.377-388.
(清塚邦彦訳『論理と会話』第8章「意味」劉草書房、1998)
- Haselager, W.F.G. 1997. *Cognitive Science and Folk Psychology: The Right Frame of Mind*. Sage Publications
橋元良明 1990 「対話のパラドックス」(『現代哲学の冒険10交換と所有』岩波書店)
- Hirst, G., McRoy, S., Heeman, P., Edmonds, P. & Horton, D. 1994 Repairing conversational mis-understandings and non-understandings. *Speech Communication*, 15: 213-229.
- Leech, G.N. 1983. *Principles of Pragmatics*. Longman. (池上嘉彦・河上誓作訳『語用論』紀伊国屋書店、1987)
- Levinson, S.C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge U.P. (安井稔・奥田夏子訳『英語語用論』研究社出版、1990)
- メイナード, S.K. 1993 『会話分析』くろしお出版
- McRoy, S.W. & Hirst, G. 1995 The repair of speech act misunderstandings by abductive inference. *Computational Linguistics*, 21-4: 435-478.
- 美濃正 1997. 「行為と因果性」(藤本隆志・伊藤邦武編『分析哲学の現在』Ⅲ-1、世界思想社)
- 大沢秀介 1990. 「素朴心理学は還元されるか」『現代思想』18-7、青土社
- 岡本雅史 1998 「コンテキスト変換としての発話理解」(第2回社会言語科学会研究大会予稿集)
- Rosaldo, M.Z. 1982. The things we do with word: Ilongot speech acts and speech act theory in philosophy. *Language in Society*, 11-2: pp.203-237.
- Schegloff, E.A. 1992. Repair after next turn: The last structurally provided defense of intersubjectivity in conversation. *American Journal of Sociology*, 97-5: 1295-1345.
- Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*. Cambridge U.P.
- Searle, J.R. 1979. A taxonomy of illocutionary acts. in *Expression and Meaning: Studies in the Theory of Speech Acts*. Cambridge U.P.
- Searle, J.R. 1969. *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge U.P.
(坂本百大・土屋俊訳『言語行為—言語哲学への試論』劉草書房、1986)
- Sperber, D. & Wilson, D. 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
(内田聖二他訳『関連性理論—伝達と認知』研究社出版、1993)
- 高梨克也 1997a 「日常生活場面における「説明」の発生状況と影響の分析」(修士論文)
- 高梨克也 1997b 「「のだ」の表す命題間の関係と課題設定」『デュナミス—ことばと文化』1 (京都大学人間・環境学
研究科文化環境言語基礎論講座)
- 田野村忠温 1990 『現代日本語の文法 I—「のだ」の意味と用法—』和泉書院
- Thomas, J. 1995. *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*. Longman Group Limited.
(浅羽亮一監修『語用論入門—話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』研究社出版、1998)
- 富田恭彦 1996. 「言語行為と志向性—サールの言語哲学と、心の哲学によるその基礎づけ」
(『アメリカ言語哲学の視点』第 I 部第二章、世界思想社)
- 土屋俊 1983a. 「言語行為における「意図」の問題」『理想』No. 596
- 土屋俊 1983b. 「何種類の発話行為があるか—言語ゲームとしての言語行為」
(『講座思考の関数1 ゲームの臨界—アゴーンとシステム』、朝日出版社)
- von Wright, G.H. 1971. *Explanation and Understanding*. Cornell U.P.
(丸山高司・木岡伸夫訳『説明と理解』産業図書、1984)
- 山田友幸 1985 「志向性と生活形式」『哲学雑誌』第 100 巻、第 772 号

ローンワードの語用論的考察

松岡 結

甲南女子大学大学院研修員

1 はじめに

雑誌やテレビなどのメディアにおける英語の使用については、さまざまなアプローチで研究が進められている。本発表では、ラジオにおける英語の使用に注目し、Floor Management の観点から、それは 'intimacy の構築' という目的を達成するために用いられる、ということを主張するため、ラジオ英語の機能と社会的意味を考察する。

〈キーワード〉

loanword (LW)

floor

code-switching / code-mixing

speaker (S) / audience (A)

2 LW先行研究とラジオにおけるLWの使用

2.1 Language and Power/Culture

歴史的・社会的にみて英語はそれ自体で power を持っている。(Kachru 1986)
日本語の中で英語の LW を使用することによって、英語の持つ modernity、sophistication (Stanlaw 1987)、fashionable (Haarmann 1989) といったイメージを与える。

2.2 LWの特徴

2.2.1 Types of elements

(Kachru (1978, 1983) cited in Morrow (1987))

- ① NP insertion > ② VP insertion > ③ unit hybridization >
- ④ sentence insertion > ⑤ idiom and collocation insertions >
- ⑥ inflection attachment and reduplication

LWの先行研究、特にラジオ以外のメディアにおけるLW使用の研究では、その使用の殆どが NP insertion であり、sentence insertion の形で用いられることは殆どない(Morrow 1987)とされてきた。しかし、ラジオで使用されるLWは必ずしもこの規則にあてはまらない。

- (1) 秋空眺めながら オーパスタ前もいい感じですね。 *Up next the Cardigans and opening up 2 o'clock hour.* かなりいけてる *new single* です。 *My Favorite Game.* お届けしましょう。 *New album, Grand Tourism* の方は明日水曜日 *Music Library* で特集。
下線部分…Sentence insertionが見られる。ラジオでは同様の例が顕著である。

2.2.2 Code-switching と code-mixing

	shift in the speech situation	intra-sentential use	bilingual competence
code-mixing	-	○	○
code-switching	○	-	-

(cf. Morrow 1987)

◇これまでの研究では、日本語の中の英語LWは殆ど code-mixing の形で使用される、と述べられてきた。

◇また、そのようにして用いられたLWはカタカナ英語となり日常言語や書き言葉として、音声面も含めて日本語に吸収されるものが多いという点が指摘された。

(1') new, single, album = ニュー、シングル、アルバム

▽

しかし、ラジオでは、これらのLWでも英語本来の発音が保たれる傾向にある。そして、NP insertion を中心とした code-mixing での使用だけではなく、Sentence insertion での使用、ラジオ特有の code-switching が起こる。

→他のコンテキストでは見られないラジオ独特の現象。

(1'') Up next the Cardigans and opening up 2 o'clock hour.

Aの理解度 (1') … 高

(1'') … ?

◎ なぜAの理解を必ずしも得られないような形でLWを使用するのか？

【参考】 code-switching の理由と目的 [二言語話者の場合]

メンバーシップを確立するために使われる。(東 1997, Nishimura 1995)

☆ bilingual strategy (芳賀 1979)

異なる言語を混ぜ合わせた特殊な表現ができる者同士である、という相手との連帯感を高めるための社会的技術の一種。

☆ dual identity (東 1997)

母国語の中に、英語を交えることによって、英語で代表される知的な世界にも属しているのだという、dual identity の表明。

仮定： ラジオ番組の目的 → より多くの番組聴取者 (=A) を獲得すること。

メディアの中でも特にラジオについては、SとAの関係を築くための

個人間のきずなを目立たせるような言語現象が多く見られる (Bell 1991)、という点が指摘されている。このことから、日本のラジオにおけるLWもその言語現象の一つとして、SがAとのきずなを固めるために用いる、すなわち 'intimacy' を構築しようとして使用しているのではないか。

3 Floor Management

3.1 Floor

Floor とは、会話参加者によって共有された社会的・対人的空間である。Floor を共有するということは、共通の知識を持つということであり、floor を共有することによって会話参加者は結束を強め、相互に 'intimacy' を構築する。(cf. Edelsky 1981, Hayashi 1997)

◎ラジオと floor

それぞれの番組は floor を持ち、S は A と 'intimacy' を構築するために floor を用いる。

① S は floor holder としての役割をもつ。

↓

② floor holder として達成しなければならない目標

= a. floor の構築・維持

= b. より多くの A の獲得

↓

③ floor の共有

a、b の目標を達成するためには A を floor へ導き入れ、A に co-floor holder (Hayashi 1997) としての役割を持たせ、floor を共有することが必要となる。

floor を共有することによって floor holder は A とメンバーシップを確立し、'intimacy' を構築することができる。

A と floor を共有し、'intimacy' を構築する手段として LW を使用する。

▽

どのような floor strategy が用いられるのか？

3.2 Floor 構築の手段

3.2.1

(2)

/CM/

Hello and good evening everybody. My name is Ozone Makoto and thanks for tuning again. You are listening to Kiss FM. That's right, you are listening to 89.9 Kiss FM Kobe. I'm here every Sunday night at 9 o'clock for 2 hours and bring you wonderful Jazz tune selections. みなさんこんばんは小曾根真です。今日はもうなんと10月の25日ということになってしまいましたね。

(3)

/CM/

Yes, I want to back to the program again. Kiss afternoon break Tuesday addition. I'm Tom G. What's up, hello Kobe (). 1 p. m. my turn, やってきました Tom G です。
やあ、それにしてもきれいでしたね昨日 満月。 昨晚の仲秋の名月。

皆さんご覧になりましたか。僕は南京街のごまだんごを頂いて もうご満悦の *last night* でした。そんな
まんまるな夜が明けて 今日 10月6日 火曜日です。1時まわっています。今日も *feel good* しま
しょうね...

(4)

/CM/

Welcome back to Hiro T's Osakan Hot one hundred. We're going up to number 7.
Air play order かせいで *one up*. Aerosmith です。

3. 2. 2

(5)

a. あと何日もすれば もう10月ですねー

b. そうですねー

a. そう考えると1年って早いよね

b. 早いよね

a. *We're gonna change Kobe's night.*

Midnight Kiss. /曲/

(6)

2曲続けて *right here on Kiss FM.*

でも打ち破れなかったのがこの曲 *number one again Barenaked Ladies, 'One Week.'*

Here's George Michael with Outside.

(Let's) check it out.

Here we go.

Everybody, keep on moving.

This week's number []

Here it is, right here on Kiss FM.

You are listening to []

Stick around, I'm not going yet.

I'll be right back, so don't you go away.

(7)

最近 ずいぶん Eメールの量が増えてきたんですけどね。また 皆様からのファックスお待ちしております。

*OK, everybody, I'm gonna have to wrap up and say good night () which is very
sad but I'll be back next Sunday night to bring you the wonderful Jazz selection. And
the next week. Take it easy. Good night.*

(8)

ということで、時間が来てしまいました。お別れの曲は、ブルワス。カッコいい映画ですけどその中から
Get Superstar です。 *Have a nice weekend. See you next week. Bye.*

3.3 Floor の維持

3.3.1

(9)

このアルバムはなんと *two million* 200万枚突破ということで これはもう、まだ、という人は *Get it right now* ですね。

(10)

a. 知ってる？私の802のロッカーに貼ってあるこの
good looking guy は my man, my man!

b. シャーちゃん

a. my man!

やっぱり...

b. your man!

(11)

- ・ *That's entertaining movie.* なんかいいですね。
- ・ どういうわけか、わたしが5人目の新しいスパイス・ガールズのメンバーになってしまった。
Oh, my God. どうするの。
- ・ わたしが選んだ *love song only* がいっぱい詰まったアルバムです。
- ・ やあ、ご機嫌な天気ですねえ *in the city of Kobe.* *Good music* もお届けしています。
- ・ *Asahi Radio Journal* も *line up for you.*
- ・ 輸入版は *now on sale.*

3.3.2

(12)

Ladies and Gentlemen! 日本リリースする George Michael. *This week number 40 on the Osakan Hot 100.*

(13)

That's right. You wanna hear all kinds of song at Osaka Dome.

いやー ほんとに楽しみになってきましたけどね。

(14)

Happy Birthday.

Thank you very much.

Congratulations.

3.3.3

(15)

ということで そして ジュリアン・レノンのフォトスタンド 5人の *Kissner* は しそう郡の *Kiss-name* ちるるさん 垂水区の *Kiss-name* ゆっかさん...そして高槻市の *Kiss-name* あきこさん おめでとう *Congratulations!* 以上 5人の *Kissner*, 合計8名の *Kissner, present for you* ということでみなさん 是非是非つかっちゃってくださいね。

(16)

このあと 11時からはネクスト・ステージです。今週の *research engine* には CHARA さんも

参加しますよ。 *research engine* なんじやってさっき言ってましたけど、みなさん楽しみにしておいてください。

(17)

Air play order かせいで *one up* した Puffy. 現在オフ だそうで *This week's number 5*.
dealer's point, order point
heavy rotation, Osakan
Sound Crew

4. ま と め

Floor Strategy

Floor 構築の手段 — Introductory Use
— Topic Shift

Floor 維持の手段 — a.
— b.
— A-S Special Code

これらの Floor Strategy を用い、ラジオでは floor holder として存在する S が、ディスコース内で巧みに英語 LW を使用することによって A と floor を共有 (floor sharing) し、相互の 'intimacy' を深めているのである。

参考文献

- 東 照二. (1997) 『社会言語学入門』 研究社.
- Bell, Allan. (1991) *The Language of News Media*. Oxford, UK: Blackwell.
- Downes, W. (1998 2nd edn.) *Language and Society*. UK: Cambridge.
- Edelsky, C. (1981) "Who's got the floor?" *Language in Society* 10: 383-421.
- Haarmann, H. (1985) 『言語生態学』 大修館.
- Haarmann, H. (1989) *Symbolic Values of Foreign Language Use*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- 芳賀 純. (1979) 『二言語併用の心理 -言語心理学的研究-』 朝倉書店.
- Hayashi, R. (1991) "Floor structure of English and Japanese Conversation." *Journal of Pragmatics* 16: 1-30.
- Hayashi, R. (1996) *Cognition, Empathy and Interaction: A Floor Management of English and Japanese Conversation*. Norwood, NJ: Ablex.
- Hayashi, R. (1997) "Hierarchical interdependence expressed through conversational styles in Japanese women's magazines." *Discourse & Society* 8(3): 359-389.

- Hayashi, R. and Hayashi, T. (1995) "Power of English Loanwords in Japanese Discourse." in Tickoo L. Makhan (ed.) *Language and Culture in Multilingual Societies: View Points and Visions*, pp. 194-208.
Singapore: Regional Language Center, Southeast Asian Ministers of Education Organization.
- Hayashi, T. and Hayashi, R. (1995a.) "A cognitive study of English loanwords in Japanese discourse." *World Englishes* 14: 55-66
- Kachru, B. (1986) "The Power and Politics of English."
World Englishes 5: 121-140.
- Morrow, P. (1987) "The Users and Uses of English in Japan."
World Englishes 6(1): 49-62.
- Nishimura, M. (1995) "A functional analysis of Japanese/English code-switching."
Journal of Pragmatics 23: 157-181.
- Stanlaw, J. (1987) "Japanese and English: Borrowing and Contact."
World Englishes 6(2): 93-109.

"How to do things with 'relational propositions':text organization analysis of persuasive discourse based on Rhetorical Structure Theory"

林宅男

龍谷大学

(takuo@neko.warp.or.jp)

1. 序

談話の構造に関しては、会話におけるターン構造、テキストの意味構造、物語の構成の他に、テキストのレトリック構造を挙げることが出来る。レトリック構造の研究は、「テキスト語用論」(Textual Pragmatics)としてとらえることが出来るが、その一つに、談話構造を機能的側面からとらえたRhetorical Structure Theory (RST) (Mann & Thomson, 1986, 1987, 1988)がある。ここではRSTモデルに基づき、いわゆる「説得的談話」(persuasive discourse)に於けるテキスト構造についてその機能的特徴を考察する。特徴の一般化に当たっては、同じ「説得」機能を持つテキストでも、ジャンル間でどのような構造上の違いがあるのか、さらに異なる機能をもつジャンルと比較してどう違うのかを含めて検討する。

2. RSTモデル

RSTは1980年代後半 William Mann & Sandra Thompson によって提案され、多くの研究者により応用されてきたが、もともとはコンピューターのテキスト作成プログラム開発のために始められた理論である。この理論は、一つのパラグラフにとどまらず数ページにわたるものまでテキストの大きさに制約されることなく (insensitive) その構造を記述することが出来、その応用範囲も、法律、契約、詩等を除いては、広く政府文書、手紙、広告、旅行パンフレット、新聞記事等、全種の種類のテキスト分析に使えらると思われている(Mann and Thompson 1987:80)。RSTはこのような特徴を反映して、いままでに、従属節の研究(Matthiessen & Thompson, 1988, Stewart, 1987), 代名詞の用法(Fox, 1987), 言語間のレトリック対照研究(Cui, 1985), 外国語習得研究(Kumpf, 1986), ジャンル研究 (Noel, 1986, Abelen et.al., 1993; Hayashi, 1997, 1998)等様々な目的に使われて来た。

テキストは一貫性(coherence)を持って構成されているが、一貫性についての理論のなかで最も有力なものは、テキストの各部分がどのような関係で繋がっているかという観点からとらえようとするものである。RSTでは一般に「一貫性の関係」(coherence relation)と呼ばれるこのような関係をもとに談話構造を記述する。一貫性の関係はそれ自体さまざまな角度から論議されてきたが、RSTはこの関係をテキストの生成と解釈において働くメカニズムのモデルととらえる。つまり、相手に意図を伝えるにはどの命題をどのようにつなぐべきか、或いは、個々の命題はどのようにつなげば解釈が可能になるかを決定するに当たって働く認知メカニズムのモデルと考える。テキスト解釈は個々の命題が何らかの関係によりより大きなものへと統合されることにより生まれる表象生成であり、テキスト生成は談話のゴールやプランによって関連付けられた個々の命題の階層的結合であるとする。そうした認知的表象形成にかかわる関係が心理的現象としてどのようなものであり、その数はいくつであるかについては論議のあるところであるが、全ての言語にはそのような関係を表現する接続詞や副詞があり、いつもそうした言語手段が使われるとは限らないとしても、それが実際にテキスト生成や、テキスト解釈に大きく関与していることは否定できないと思われる (cf. Knott & Sanders, 1998)。このようにRSTは一貫性の関係を認知的にとらえ、それをコミュニケーションの効率性と関連づけて談話構造の記述に組み入れようとする。

3. 一貫性の関係

RSTでは命題間の関係を、それ自体を命題と命題を繋ぐメタ命題(meta-proposition)とみなし、これを「関係命題」("Relational Proposition") (Mann and Thompson, 1986)と呼ぶ。²¹ 例えば(1)の命題 a,b を連続して読んだ人は、その二つが言語的に何か意味をなすものであると考え、二つの命題間にある関係を求めようとすると考えられる。

²¹ RSTは、命題間にみられる一貫性の関係をもとに談話構造を記述するが、命題間にみられる一貫性の関係に関しては他にも多くの研究者により論じられてきた。Mann & Thompson (1986, 1987)が、RSTに影響を与えた主な概念としてあげているものの中には、Beekman and Callow (1974)の"Relation between Clauses", Longacre (1976)の"Combination of Clauses", Grime (1975)の"Rhetorical Predicate", Martin (1983)の"Conjunctive Relations", Van Dijk(1977)の"Relation between propositions" Hobbs (1978)の"Coherence Relation"がある。(話し言葉に於ける一貫性の関係については、Hobbs(1978), T.Hayashi & R. Hayashi (1995)を参照。

(1)

- a. I love to collect classic automobiles.
- b. My favorite car is my 1899 Duryea. (Mann and Thompson, 1986:57)

この推論プロセスは、心理学で言うクローージャ(Closure)に当たるもので、この例では読み手は、両者の間に内在する「bはaを詳しく述べる」というメタ命題を再構築することにより一貫性を見だし、テキスト全体の意味を把握することになる。つまり、読み手に求められていることは、ある目的達成のために「テキストが、書き手にとって何を果たしているか」("What the text is doing for the writer")

(Mann and Thompson, 1986:40)を見つけ出すことであり、それはテキストを書いた人のメタ命題を探し出すことであるとも言える。³²

このような関係命題は、言語的にはっきり示されることもある。例えば、(2)の二つの命題は「理由」で結ばれるが、それらは接続語(conjunctives)"because" やつながりを示す句 "The reason is" によって(3), (4)のようにその一貫性を明示的に示すことが出来る。

- (2) I'm not going to start learning Dutch. You can't teach an old dog new tricks.
- (3) I'm not going to start learning Dutch, because you can't teach an old dog new tricks.
- (4) I'm not going to start learning Dutch. The reason is you can't teach an old dog new tricks.

(Mann & Thompson, 1986:71)

多くの言語においてみられるこのような明示的手段の存在は関係命題が頻繁に成り立つことを裏付けるものである。しかし関係命題は明示的手段とは独立して伝えられる事が多いばかりでなく、明示的に示される必要もない。(Mann & Thompson, 1986:71) しかも関係命題と明示的手段の関係は厳密に一对一の関係ではなく多数対多数の関係である。例えば「原因」("Cause")の関係は"so", "therefore", "consequently", "thus", "as a result" 等、多くの接続詞により表現される一方、"but"という語は、「アンチテーゼ」("Antithesis")のほか「譲歩」("Concession")の関係にも使われる。³³ RST では明示的手段は命題解釈を制約するものに過ぎず、重要なのは関係そのものであるとする。

関係命題は、その内容によって「主題的關係」(subject-matter relations)と「表象的關係」(presentational relations)に分ける事が出来る(Mann and Thompson, 1988)。前者は、概念の明確化にかかわる関係を目指し詳述(Elaboration)、解決(Solutionhood)、対照(Contrast)等を含む。後者は欲求、信条、態度等の程度強化にかかわる関係を目指し、動機(Motivation)、背景(Background)、証拠(Evidence)等

³² このような関係命題は、会話の含蓄にもあてはまる。会話の含蓄が、異なる話者間の談話を扱うのに対して、関係命題は一人の話し手(書き手)の談話を扱うことが多いが、いずれもどのようにして意図が伝達解釈されるかを説明するものである。例えば、関連性理論(Sperber and Wilson, 1986/1995)では、推意(implicature)(会話の含蓄)は聞き手が、話し手の発話を推意的前提(implicated premise)(文脈的知識)にあてはめることにより推意的結論(implicated conclusion)(文脈効果)を導き出すと考える。[1]では、Bは

[1]

- A: I'm out of petrol.
- B: There is a garage round the corner.

A が、自動車整備所ではガソリンを給油してくれるという推意的前提によって、その角の自動車整備所に行けばガソリンを給油してくれるという推意的結論を導き出すことを期待して発話したとする。この関連性をRSTで説明すると、Bは発話はAの発話に対して「解決」という関係命題を与えることにより一貫性を保っていることになる。これは、[2]のように過去形のモノログで見ると、更に明確になる。

[2] I was out of petrol. There was a garage round the corner.

ここではガソリンが切れたという事実を伝えた後、自動車整備所が角にあったと承ることで自分はその自動車整備所で給油することで対処したと述べている。つまり後の命題は、ガソリンが切れたことについての「解決」の説明をしている。RSTは命題間の推意のメカニズムの説明には言及しないが命題が、どのような効果をもたらすことを意図して述べられたかを示す。

³³ Blakemore(1992)は、関連性理論の観点から、このような接続語は一貫性の関係を示唆する"procedual"なものであると述べている。

の関係を含む。前者は更に解決(Solutionhood)、目的(Purpose)、解釈(Interpretation)等の論理的なものとして詳述(Elaboration)、事情(Circumstance)、連続(Sequence)、対照(Contrast)等の説明的なものに分けることができる(Hayashi, 1997:110)。RSTで今まで使われてきた約30の一貫性の関係は表1の様に分類される。

表1一貫性の関係 (Hayashi, 1997より[Mann and Thompson, 1988に基づく])

主題的關係 (subject-matter relations)		表象的關係 (presentational relations)	
Elaboration	Summary	Motivation	(increase desire)
Circumstance	Sequence	Antithesis	(increase positive regard)
Solutionhood		Background	(increase ability)
Volitional cause	* Joint	Enablement	(increase belief)
Volitional result	* Sequence	Evidence	(increase acceptance)
Non-volitional cause	* Disjunction	Justify	(increase positive regard)
Non-volitional result		Concession	(increase positive regard)
Purpose	** Reason		
Condition			
Otherwise	*** Comparison		
Interpretation	*** Presentational sequence		
Evaluation	*** Disjunction		
Restatement	*** Means		
Contrast			

(イタリックで書かれた関係は元の表になかったもの。)

* 1988年の論文に出ている関係。

** 1986年の論文に出ている関係。

***1988年の論文に出ているが、定義が示されていない関係。

4. RST分析によるスキーマ(schema) 構造

殆どのテキストでより多くに見られるのは、中心的命題と付随的命題が組み合わさる場合である。これは、あるテキスト部分を書き手の主要なゴールを達成させるのに対して、その他は補助的なゴールを達成させる命題を含んでいる事が多いからである(Mann & Thompson, 1987:84)。RSTでは、前者を核(nucleus)と呼び、後者を衛星(satellite)と呼ぶ。²⁴ もう一つのタイプは同程度の重要性を持つ命題同志の組み合わせである。命題の果たす機能は、このどちらかによって大きく変わるが、RSTではそれぞれの関係について機能的観点から更に4つの側面(fields)から詳しく定義する。その内容は命題をとりまく制約(constraint)と効果(effect)に関するものであるが、特に効果は関係的命題の機能に直結する重要な要素である。表2に非対称的(asymmetrical) 関係の一例として「動機」を紹介する。

命題の機能を中心に定義された一貫性の関係は、スキーマ(schema)に組み込まれる。スキーマはテキスト構造のブロック的役割を果たし、テキストの部分、関係の種類、そして繋がり方を示し、図によって表わされる。非対称的命題の組み合わせでは中心になる部分が縦の線で示され、付随する部分と中心部は弧と矢印で繋がっている(図1参照)。²⁵ スキーマの名称は、同じ核に2種類以上の衛星が繋がる場合を除いては、関係命題のそれと同じである。²⁶

スキーマはテキスト内の隣接する部分の構造のみでなく、複数の部分、或いはそれらが組み合わさったテキスト全体の構造を表わす。多くの部分からなるテキストに於ては、全体の中で最も重要な情報

²⁴RSTは核、衛星の概念を、Grime (1975)の"hypotactic relation",やBeekkan & others (1981)の"head-support relation" から得ている。しかし、それらはいずれもこの関係を文法や意味の側面からとらえている点で、RSTと異なる。

²⁵ここで「部分」は通常、節や句に当たるが RSTではこれに相当する語として"part"の他"range", "region", "span"等の用語が使われる。

²⁶よくある例は、一つの核が詳述(Elaboration)、証拠(Evidence)、背景(Background)の関係で繋がっている場合である。その場合の呼び名は情報(Inform)とか論点(Issue)とか、研究者により様々である。

表2 機能的観点からみた一貫性の関係の定義 (Mann and Thompson, 1987に基づく)
「動機」(Motivation)

constraints on N: presents an action in which R is the actor(including accepting an offer),
unrealized with respect to the context of N

constraints on S: none

constraints on the N + S combination: comprehending S increases R's desire to perform action
presented in N

the effect: R's desire to perform action presented in N is increased

locus of the effect: N

(W, R, N, S は、それぞれ書き手[writer]、読み手[reader]、核[nucleus]、衛星[satellite]を指す。

を含む部分が、最も高いレベルのスキーマの核となりそれ以外の補助的情報を含む部分は衛星となる。それらは、更にその中でもより中心的な情報と補助的な情報(下位レベルの核、衛星)に分けられ、最後にそれぞれの部分が一つの命題しか含まない最小のスキーマになるまで分割される。談話構造をRST分析すると、殆どのテキストスキーマは階層的構造からなることが分かるが、それは書き手のテキスト生成の過程が、認知的行動一般に見られるゴールとプランのプロセスに準じているからだと考えることができる。

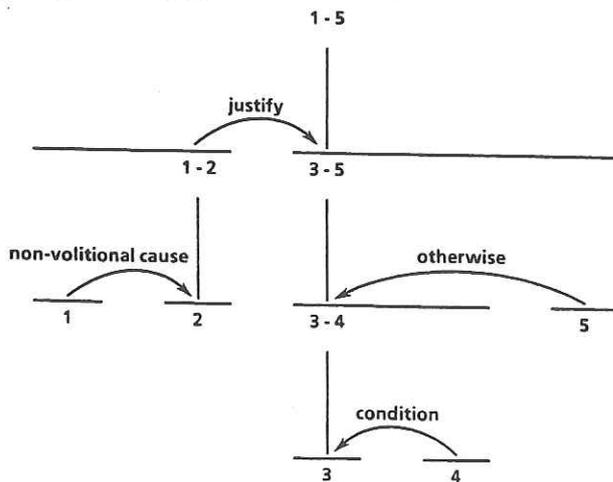
²⁷(5)のテキスト構造をスキーマを使って表わすと次のようになる。

(5)

1. It's a new brochure time,
2. And that means a chance for new project write-ups.
- 3a. Anyone
4. Desiring to update their entry in this brochure
- 3b. Should have their copy in by Dec. 1.
5. Otherwise the existing entry will be used. (Mann and Thompson, 198:67-68)

ここでは、今掲載されているものに変えて新しいプロジェクトをパンフレットに入れたい人は、原稿を12月1日迄に提出するよというのが書き手のメインメッセージである。全体のテキストはまず最上レベルで付随的な部分の1-2と中心的部分の3-5に大きく分け、これを正当化(Justify)スキーマで表わすことが出来る(図1参照)。1-2の衛星部分は、原稿提出を依頼するに当たって、今がその機会で

図1 (5)のRST分析(Mann and Thompson, 198:68)



あることを前置きで述べることで、3-5で述べる依頼行為の妥当性を読者に受け入れてもらいやすくしている。(3)の下位レベル構造を詳しく分析すると、正当化の目的で述べられた1-2の内容は、更に非意志的原因(Non-volitional cause)スキーマで表わすことが出来る。ここでは、核となる2で述べられた原稿提

²⁷ 会話のプランニングに於ける認知的メカニズム及其モデルについては、Hayashi, 1996,1999参照)

出の機会についての命題が核となるが、1の命題はそれがどのような状況でいわば必然的に生じたかについて、補足的に述べていることを表わしている。最上レベルスキーマの核は2段構成になっている。まず、他状況(Otherwise)スキーマ(3-5)では、原稿は12月1日迄に提出するというメッセージが、さもなければ今のものを使うことになるという情報によって補足されていることを表わしている。更に条件(Condition)スキーマでは、原稿提出のメッセージについては、それは新しいプロジェクトを載せる状況が生じた場合に依拠していることを補足的に述べていることを表わしている。テキスト全体を通して書き手が伝えたい最も重要な命題はここでは3に当たるが、RST分析では最上レベルスキーマの核部分を縦線が一番下まで辿れば分かる。尚、3が、3a, 3bと分けられているのは、RSTが扱う関係は文中の構成要素間、或いは文間ではなく命題間に生じる命題である事を示す一例である。

5. RST分析による談話構造の語用論

機能主義アプローチは言語形態は言語以外の社会的場面と深く結びついていると考える。ハリデイ(Halliday, 1977: 200-203)は場面を「記号的構造」("semiotic structure")と呼ぶ抽象的概念で表わし、それぞれを「フィールド」("field")-「行動」、 「テナー」 ("tenor")-「役割」、 「モード」 ("mode")-「機能」の三面から定義づける。モードにはテキストのレトリック機能としての説明(exposition)、教訓(didactics)、説得(persuasion)、記述(description)、説話(narration)等が含まれるが、それは命題間の接続関係と深くかかわりその接続関係の特徴はジャンルの指標となる。

"Thus the mode would determine the balance among the different types of cohesive resource, reference, ellipsis, conjunction, lexical cohesion; and within conjunction, the relative weight accorded to internal and external conjunctive relations and to various semantic alternatives within each. In this way the kind of conjunctive relations found in the text will be characteristic of the register (as defined on the dimension of "mode") to which the text belongs". (Halliday: 1980:7-8)

以下では、モードとしての「説得」機能に焦点を当て、RST分析によりそのレトリック構造の特徴を探る。特徴の一般化を模索するに当たっては、同じ「説得」機能を持ちながらジャンルの異なる2種類のテキスト「指令テキスト」("instructive text")、 「主張テキスト」 ("argumentative text")-及び情報提示を機能とする「説話テキスト」 ("narrative text")を分析する。²⁸

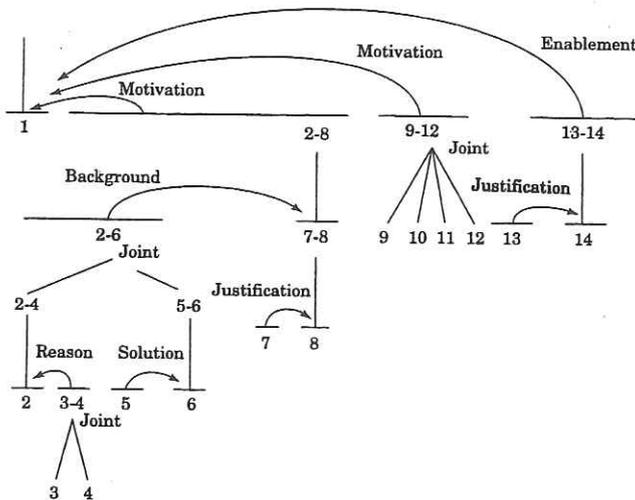
「指令テキスト」では、近い将来観察しうる行動を生み出すことが焦点になる(Werlich, 1983:20-21)。ここでは商業広告と寄付金要請の手紙を扱う。商業広告の目的は、消費者に商品やサービスを購買するよう要請することであるが、テキストの果たす重要な使命の一つは、その購買により消費者の必要性が満たされ、問題が解決することを「説得」することである[Vestergaard & Schroder, 1985:145]。そのRST構造の主な特徴は、先ず第一に多くのテキストが、その階層構造の上層部において「解決」(Solutionhood)、 「動機」 (Motivation)、 「可能」 (Enablement)、 「背景」 (Background)、 「正当化」 (Justification)のスキーマで構成されている事が多い(Hayashi, 1997)。これらは最初の「解決」を除いて、全て程度の強化にかかわる「表象的關係」である。次に、下位レベルでは逆に概念の明確化にかかわる「主題的關係」が構造の中心となる。そのような主題的スキーマは、まず表象的スキーマの支配下に置かれ、その下位に主題的スキーマを内包する形を取る。さらに、テキスト全体で最も中心となる部分(the most-nuclear unit)は、階層構造の上層部に置かれ、複数の衛星の共通核となる事が多い。(この点については、テキスト(6)、図6を参照)

- (6)
1. We would like to invite you to a free and fun lunch and our new Business Workshop.
 2. Never Before has the foundation of a business been as critical as it is today.
 3. Consumer trends and buying habits come and go with the wind;
 4. so do many businesses.
 5. How do some businesses continue to prosper no matter what the market climate?
 6. The answer... they are built on a foundation sturdy enough to weather the rough times and flexible enough to take advantage of opportunities.
 7. At Bartlett, Pringle & Wolf CAPs, we have learned a trick or two about helping new businesses build a foundation for success
 8. and we would like to share our expertise and experience with you.
 9. In our new Business Workshop we feed you lunch,

²⁸ ジャンルの分類はWerlich, (1983)による。

10. go over our New Business Start-up Kit,
11. and answer questions on those pesky issues like taxes and bookkeeping.
12. We also talk about fun stuff like business planning, sales, marketing and computers.
13. Seating is limited,
14. so call for your reservation today, 963-7811. (Hayashi, 1997:108.)

図6 (6)のRST分析(Hayashi, 1997)



商業広告でもいわゆるハードセルアプローチとソフトセルアプローチ(Soft-sell Approach)を取るものでは、その構造はやや異なる。談話構造に見られる表象的關係と主題的關係の分布の特徴は同じであるが、ソフトセルアプローチではハードセルアプローチと違いその最上部の核は、両側に衛星を持つことが多い。この構造はピンセット構造("tweezer's structure")と呼ばれるが、その機能的特徴は、主題を導入し、叙述し、そして最後に説得することである("leading up to the main point, stating it and then driving it home", Abelen et. al., 1993:336)。例えば、核の左側の導入では、情緒的情報と具体的メリットを「動機」や「解決」(Solution) 関係で結ぶことにより、主題で示した行動の欲求が起りやすくする場合が多い。(この点については、ハンドアウトのテキスト(7), 図7を参照)

次に寄付金要請の手紙の特徴に言及する。寄付金要請の手紙は一種のダイレクトメール広告と見做すことができるが、そこでの行動の焦点は寄付者が名誉ある目的や理念を「買う」ことを要請、「説得」することである。ここにおいても、上述した構造パターンが顕著にみられる。すなわち上層部においては「動機」、「正当化」、「証拠」等の表象的關係が多く使われ、下位レベルでは逆に主題的關係が中心となる。また、最も重要な命題が置かれる中心核も商業広告と同様最上レベル近くに占める事が多いが、これは商業広告テキストはその性格上、一般にマクロ構造が単純であることを示している。寄付金要請の手紙の特徴は、最上レベルで核が表象的關係ではさまれるピンセット構造("tweezer's structure")を取ることが多いことである(Mann et. al. 1992, Abelen et. al., 1993)。これは、興味、欲求の喚起及び程度強化が特に重要であることの反映と受け取れる。寄付金要請の手紙では最上レベルの主要核部の左右に「動機」衛星が占めることが多いが、これは寄付金要請では、商業広告と違い、寄付が利益をもたらすだけでなく、いかに有意義であるかを説得することが大事であるからである。もう一つの特徴は、ピンセット構造の左の衛星部分が、大部分を占めることが多く、主要核はテキスト全体の最後の方に置かれることである。この点も、先の商業広告で見た、ソフトセルアプローチの構造と似ている。(この点については、ハンドアウトのテキスト(8), (9); 図8, 9を参照)

次に、上で見た特徴を「主張テキスト」の談話構造と比較してみる。このジャンルのテキストに於ては、命題間の関係を述べるだけでなく、他のものとの比較において判断を下し提案をすることが焦点となる(Werlich, 1983:40)。「主張テキスト」は客観的見地から述べる「科学的主張」("scientific argument")、と主観的見地から述べる「コメント」("Comment")にわけられるが(Werlich, 1983:106)、ここでは後者について、新聞コラムを例にその特徴を見る。新聞コラムの焦点は自分の主張を読み手に訴えることであり、テキストの目的は広告と同様「説得」である。新聞コラムは比較的長いテキストからなるが、その談話構造のマクロ構成は殆どの場合その内容的手法に沿った幾つかの基本的部分に分けること

が出来る。たとえば新聞コラムよく使われる手法である「三段論法的主張」 ("syllogistic argument")では、命題は1)反論、2)論点、3)論拠、4)結論の順に述べられるが、テキスト全体のマクロ構造に関しては、1)は「アンチテーゼ」 ("antithesis"), 3)は「理由」、「背景」、「理由」、「正当化」4)は「まとめ」 ("Summary) の関係で結ばれることが多い(Hayashi, 1998)。階層構造としては、「まとめ」のマクロスキーマが最上レベルにあり、その下に「背景」、「正当化」、「理由」、「アンチテーゼ」などのマクロスキーマが来ると考えられる。つまりマクロ構造においては「まとめ」を除いては広告と同様、表象的スキーマが中心となる。しかも、マクロスキーマ内の構造を見ると、下位レベルほど主題的スキーマが多く使われる点も共通している。典型的な構成としては、中心的主張を含む最主要核部は、最下位レベルで「理由」スキーマの核となり、その上に「背景」や「正当化」スキーマが構成が続く事が多い。これは、中心的主張について徐々に個別的現象をより大局的、或いは一般的見地から述べることにより支持を得ようとする方略の現れである。また、夫々のマクロスキーマ内では、上述のような高から低レベルスキーマにかけて、表象的關係から表象的關係、表象的關係から主題的關係、主題的關係から主題的關係へと変わっていく方向性がある。(この点についてはハンドアウトのテキスト(10), 図10を参照)

最後にこれらを「説得」とは全く異なる機能を持つ「説話テキスト」 ("narrative text")の談話構造を比較してみる。このジャンルのテキストの焦点は、事実を時間の経過にしたがって提示することであるが、構造上は単なる行動の記録文("simple action-recording sentence")として表されることもある。(Werlich, 1983:39)。「説話テキスト」は、自分の経験談のように主観的観点から述べられた「ナレーティブ」 ("Narrative")と、ニュースのように客観的観点から述べられた「レポート」 ("Report")に分けることが出来る(Werlich, 1983:55-70)。後者の一種であるラジオニューステキストの目的は、事実の報告である。事実は音を通して聞き手の伝えられるが、テキストのスタイルは読まれるために書かれた書き言葉である。その基本的構成も書かれたテキスト同様、5W1Hの項目を含む概要からより少ない項目に関する詳細へと進むいわゆる逆ピラミッド型をとる。談話構造の特徴として先ずあげられるのは、いわゆるボディといわれる部分ではその最上レベルにおいて「背景」を除いては「詳細」、「結合」(「追加」ともいう)、「対照」、「連続」、「理由」、「結果」等殆どが主題的關係により構成されているという点である。Noel(1986)の研究では特に「詳細」と「背景」関係からなる「情報」スキーマ(註6参照)はその半分近くを占め、さらに「結合」スキーマを加えると8割以上であった。それは後に続く部分がニュース内容や状況を説明する為のものであることを考えると当然といえよう。また最上レベルの「情報」スキーマの衛星部分の多くは、それ以下のレベルでも「情報」スキーマから構成されることが多い。全体としても表象的關係からなるスキーマは極めて少ないが、これは、筆者が客観的観点からのべる「レポート」の特徴であろう。つぎに、最主要核部は最上レベルのスキーマの核となり、図の左端にくることが多いが、これは概要を含む句は通常始めの部分に置かれるためである。ラジオニュースでは、ボディの他にヘッドラインと(あまり頻繁ではないが)まとめを伴うことがあるが、その場合はいずれもそれらは最主要核に対して、最上レベルで最陳述(Restatement)の關係で結ばれる。(この点については、ハンドアウトのテキスト(11), 図11を参照)

4. 結論

ここでは、説得機能をもつテキストはどのような構造的特徴を持つかという問題をRSTを用いて調べたが、ここではその特徴をまとめ幾つかの点から一般化を試みる。先ず第一は、表3に示すように説得機能をもつあらゆるテキストは、共通の普遍的な内包的構造を持つという点である。すなわち、説得的談話テキストでは最高位レベルでは表象的關係スキーマが多く使われるが、1)それはさらに表象的關係スキーマを内包する、2)次にその内包された表象的關係スキーマは主題的關係スキーマを内包する、3)更にその内包された主題的關係スキーマは主題的關係からなるスキーマはさらに主題的關係スキーマを内包する。そしてこのような内包關係の流れはRST構造の高中低のレベルに対応して現れる。すなわち、表3 談話テキストの内包(embedding)構造

RST構造レベル	高	中	低
内包的構造	P → P	P → S	S → S

P:表象的關係スキーマ, S:主題的關係スキーマ

効果的な説得を実現するには、まず中心的主張についてその欲求、信条、態度等の程度を強化する命題を、次に程度を強化のために用いた命題概念そのものを明確化するための命題を、そして必要な場合は更に明確化に使った命題そのものを明確化する命題を連結すると言うパターンが内在する。第二点は、第一

点と関連するが、説得機能をもつテキストでは特に上層部においては表象的關係が多く使われることである。この点は、例えば事実の提示という全く異なる機能を持つ「説話テキスト」の談話構造と比較するとその特徴は最も明らかである。第三点は、同じ説得機能をもつテキストでもジャンル間で、或いはジャンル内でも、その特徴は一樣ではないということである。例えば、「指令テキスト」に於ては最主要核部 (the most nuclear unit) が、レトリック構造の上層部に来るのに対して「主張テキスト」では、最階位レベルに来ることが多い。またマクロ構造の点でも、後者は前者に比べ複雑で主要スキーマは表象的關係を中心とした階層的構成を成す。これは、テキストの論理性の程度と繋がる特徴である。同じジャンルのテキスト内での違いについては、例えば、「指令テキスト」である寄付金要請の手紙では、ピンセット構造の左の衛生部分が、テキスト構造の大部分を占めることが多いが、これは動機付けの必要性和強く結びついている。また商業広告の中でもソフトセルか、ハードセルかの違いによりRST構造は異なる。

最後に、ここではRSTを使って、書き手がどのようなレトリック手法を選びでゴールを達成するかを説得的談話を例に示したが、この点については今後更に多くのデータの分析と、詳細な検討により、意図とレトリック構造の機能的關係の一層深い理解を得る必要がある。

(この原稿は、「プラグマティックスの展開」[近刊, 勁草書房, 高原脩、林礼子と共著]の分担執筆部分の一部を加筆修正したものである。)

参考文献〔一部〕

- Abelen, E., G. Redeker, and S. Thompson, 1993. The rhetorical structure of US - American Dutch fund-raising letters. *Text* 13 (3):323-350.
- Beekman, J. and J. Callow, 1974. *Translating the word of God*. Grand Rapids, MI: Zondervan.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances*. Oxford: Blackwell.
- Cui, S., 1985. Comparing structures of essays in Chinese and English. Master's thesis, U.C.L.A.
- Fox, B., 1987. *Discourse structure and anaphora in written and conversational English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Halliday, M.A.K., 1977. Text as semantic choice in social contexts. In: T.A. van Dijk & J. Petofi, eds., *Grammars and descriptions*. Berlin: de Gruyter.
- Halliday, M.A.K., 1980. How is a text like a clause? Nobel Symposium on Text Processing, Stockholm.
- Hayashi, T., 1996. Politeness in conflict management: a conversational analysis of dispreferred message from a cognitive perspective. *Journal of Pragmatics* 25:227-255.
- Hayashi, T., 1997. A study of discourse structure in advertisements. *The Ryukoku Journal of Humanities and Sciences* 19(2).
- Hayashi, T., 1999. A metacognitive model of conversational planning. *Pragmatics and Cognition* 7(1).
- Hayashi, T and R. Hayashi, 1995. A cognitive study of English loanwords in Japanese discourse. *World Englishes* 14(1):55-66.
- Hobbs, J. R., 1979. Coherence and coreference. *Cognitive Science* 3:67-90.
- Knott, A and T. Sanders, 1998. The classification of coherence relations and their linguistic markers: An exploration of two languages. *Journal of Pragmatics* 30:135-176.
- Longacre, R. E., 1976. *An anatomy of speech notions*. Lisse: de Ridder.
- Matthiessen, C. and S. Thompson, 1987. The structure of discourse and "subordination". In: Haiman and Thompson, eds., *Clause combining in grammar and discourse*, Benjamins, Amsterdam. Also available as Technical Report ISI/RS-87-183.
- Mann, W. C. and S. Thompson, 1986. Relational propositions in discourse. *Discourse Processes* 9(1).
- Mann, W. C. and S. Thompson, 1987. *Rhetorical structure theory: a theory of text organization*. U of Southern California/Information Sciences Institute: Technical Report ISI/ RR-89 190.
- Mann, W. C. and S. Thompson, 1988. *Rhetorical structure theory: Toward a functional theory of text organization* *Text* 8 (3):243-281.
- Mann, W.C., C. Matthiessen and S. Thompson, 1992. *Rhetorical structure theory and text analysis*. In: W. Mann and S. Thompson, eds., *Discourse description: Diverse linguistic analyses of a fund-raising text*, 39-78, Amsterdam: John Benjamins Pub.
- Noel, D., 1986. Towards a functional characterization of the news of the BBC World News Service. *Antwerp Papers in Linguistics*, 49. Antwerp: U of Antwerp.
- Sperber, D. and D. Wilson, 1986/1995. *Relevance: Communication and cognition*. Cambridge: Harvard U.
- Werlich, E., 1983. *A text grammar of English*. Heiderbaer: Queller & Meyer.

命令文の語用論*

阿部桂子
松山東雲短期大学

1 はじめに

1.1 研究対象：

serious and literal utterances of the imperative

a) Order

Stop that dreadful noise, children, at once! (Hamblin)

b) Request

Pass the salt. (Clark)

c) Advice

PETER: *Excuse me, I want to get to the station.*

MARY: *Take a number 3 bus* (W&S)

d) Permission

Smoke if you wish. (Hamblin (1987))

e) Good wishes

Get well soon. (W&S)

f) Audienceless case

Please don't rain. (cf. W&S)

g) Predetermined case

Please be out. (W&S)

1.2 基本的立場：

命令文は共通の意味構造を持ち、聞き手はそれを文脈のなかで処理することにより、その発語内効力を同定する。

2 命令文の語用論スキーマ

2.1 先行研究

Wilson & Sperber(1988) Clark(1993) Blakemore (1992)

(i) Semantic Level

命令文の propositional attitudes

[A1] X regards Y as potential

[A2] X regards Y as desirable to Z

X=Speaker Y=Proposition

- “the relation between linguistic form and force (or, more generally, pragmatic interpretation) is mediated by a direct semantic link between linguistic form and representations of propositional attitude.”(W&S p.86)
- “imperative sentences are specialized for describing states of affairs in worlds regarded as both potential and desirable” (W&S p.85)
- “A potential world is a possible world which is compatible with everything that is known (by that individual) about the actual world.”
I want to have been born in France.(desirable and potential)
I wish I had been born in France.(desirable and possible) (Clark p.84)
- “The notion of a desirable world is unusual in that desirability is a matter of degree the speaker communicates that she believes that the state of affairs described is desirable enough for it to be relevant to say so(or desirable in such a way that it would be relevant to say so” (Clark p.83)

(ii) Pragmatic Level→indeterminacy を解決し force と結びつく

Category 1

Z=Speaker

order, request, , plea, audienceless cases, best wishes, predetermined examples...

Category 2

Z=Hearer

advice, permission, suggestion...

2.2 下位範疇の再考

2.2.1 Z について

Category 1 Category 2 に加えて次のような場合も考えられる。

- | | | |
|---|----------------|---|
| 3 | Speaker+Hearer | <i>Earn more money for our(= my and your) living.</i> |
| 4 | 3rd person | <i>Get a glass of water for Jane.</i> |
| 5 | Speaker/Hearer | <i>Save someamount of money for us./for you.</i> |
| | + 3rd person | |

2.2.2 Good wishes, Audienceless cases, Predetermined cases

“Good wishes fall into the same broad category as requests, but require two additional assumptions: first, the speaker manifestly believes that neither she nor her hearer is in a position to bring about the state of affairs described, and second, she manifestly regards this state of affairs as beneficial to the hearer. Audienceless and predetermine cases are also types of wish, though here the assumption is that the state of affairs described will be beneficial to the speaker, and there need be no hearer present at all” (W&S p. 86)

- ・ Good wishes は Category 3 に属する。
=Speaker&Hearer にとって desirable
- ・ Audienceless case, Predetermined case は Category 1 に属する

2.2.3 Permission

“ When Peter asks Mary if he can open the window, he represents a certain state of affairs as desirable from his point of view, but expresses doubts about its potentiality (given that Mary can refuse to let him open it). By saying “Oh, *open* it, then,” Mary incidentally concedes the desirability (to Peter) of this state of affairs, but more importantly, guarantees its potentiality, thus removing the only obstacle to Peter’s opening the window.” (W&S p.86)

2.3 発語内効力同定の語用論的要因

(a, b, ccf. W&S , Blakemore, Vanderveken)

- a) hearer’s potential for the realization of the proposition

- b) degree of desirability
- c) social and physical relations between speaker and hearer
- d) hearer's recognition of desirability

3 否定命令文

3.1 命令文における否定の作用域 (scope)

命題否定である。(cf ヴァンダーヴェーケン)

根拠

- 1) *I order you not to smoke* は *Don't smoke* の paraphrase となりうるが、
I don't order you to smoke はなりえない。
- 2) *Don't go. This is an order/ ?a prohibition.*
- 3) *Don't fear. = Have no fear.*

3.2 否定命令文の意味構造

[A1] X regards Y as potential

[A2'] X regards ~Y as desirable to Z

Don't lend him money.

Z=Speaker → order, request, plea...

Z=Hearer → suggestion, advice, warning...

3.3 Do(n't)の役割

1.a) **Catch a cold.*

b) *Don't catch a cold.*

2.a) **Be afraid.*

b) *Don't be afraid.*

3 a) **Know the answer*

b) **Don't know the answer*

4 a) **Like him.*

b) **Don't like him.*

(1. 影山---p. 88 3.4.---太田 p.650)

4 今後の課題

“imperative markers” ?

1. *Do come here.*
2. *Come here, please.*
3. *You come here.*
4. *Come here, will/won't you?*
5. *Somebody come here.*
6. *You will come here.*
7. *Don't you come here.*
8. *Never come here again.*

参考文献

- Austin, J.R. (1962) *How to Do Things with Words*. Cambridge University Press
- Blakemore, D. (1992) *Understanding Utterances*. Blackwell
- 武内・山崎訳 (1994) 『ひとは発話をどう理解するか』 ひつじ書房
- Bolinger, D.L. (1977) *Meaning and Form*, Longman,
- Carston, R. Uchida, S.(eds) (1998) *Relevance Theory: Applications and implications*. John Benjamins
- Clark, B. (1991) *Relevance Theory and the Semantics of Non-Declarative Sentences*.
UCL Ph.D.dissertation.
- Clark, B. (1993) “Relevance and ‘pseudo-imperatives’” *Linguistics and Philosophy* 16: 79-121
- Davies, E.E. (1986) *The English Imperative* Groom Helm Ltd
- Givón, T. (1978) “Negation in Language: Pragmatics, Function, Ontology” in P.Cole (ed.) *Syntax and Semantics Volume 9: Pragmatics*, Academic Press
- Hamblin, C.L. (1987) *Imperatives* Basil Blackwell
- Holdcroft (1978) *Words and Deeds* Clarendon Press
- 今井邦彦 (1995) 「関連性理論の中心概念」 『言語』 4月号 大修館書店
- Jordan, M.P. (1998) “The power of negation in English: Text, context and relevance” *Journal of Pragmatics* Vol 29, No.6
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』 くろしお出版
- 柏崎雅世 (1993) 『日本語における行為指示型表現の機能—「お~/~てください」「~てくれ」「~て」およびその疑問・否定疑問形について—』 くろしお出版
- 小泉保 (1990) 『言外の言語学』 三省堂書店
- Lyons, J. (1977) *Semantics, Volume 2* Cambridge.
- 西山祐司 (1992) 「発話解釈と認知：関連性理論について」 安西・石崎・大津・波多野・溝口編 『認知科学ハンドブック』 共立出版

- 太田朗 (1980) 『否定の意味』大修館
- Ramos, Francisco Y. (1998) "A decade of relevance theory" *Journal of Pragmatics* 30
- Schmerling, S. (1982) "How Imperatives are Special, and How They Aren't" In *CLS Papers from the Parasession on Nondeclaratives*. University of Chicago
- Searle, J. (1969) *Speech Acts*. Cambridge University Press
- Searle, J. (1979) *Expression and meaning*. Cambridge University Press
- Sperber, D. and Wilson (1986) *Relevance*. Blackwell
- 内田・中陸・宋・田中訳(1993)『関連性理論—伝達と認知—』 研究社
- Stockwell, R.P., Schaschter, P. and Partee, B.H. (1973) *The Major Syntactic Structures of English*, Holt, Rinehart and Winston
- ヴァンダーヴェーケン著 久保訳注 (1995) 『発話行為理論の原理』 松柏社
- ヴァンダーヴェーケン著 久保監訳 (1996) 『意味と発話行為』 ひつじ書房
- Wilson, D. and Sperber, D. (1988) *Mood and the analysis of non-declarative sentences*.
In J. Dancy, J. Moravczik and C. Taylor (eds.) *Human Agency: Language, Duty and Value*.
Stanford University Press
- Wilson, D. and Sperber, D. (1992), "On verbal irony" *Lingua* 87.1/2: 53-76.
- 山崎英一 (1994) 「命令文使用＝「命令」か：関連性理論による日本語分析例」
『未発』 ひつじ書房
- Zhang, Shi "Negation in imperatives and Interrogatives: Arguments Against inversion" *CLS* 27

*発表に際し、有益なコメントを寄せていただいたレフェリー、松山大学久保進教授を中心とする松山言語学研究会のメンバー、松山東雲女子大学田路敏彦助教授に心から感謝の意を表す。

終助詞と間投助詞のカテゴリー再編

半 藤 英 明

静岡英和女学院短期大学

1. はじめに

従来より指摘のあった終助詞と間投助詞の近似性の問題、および、それとは相対する差別化の問題は「助詞の編成」に関わる事項であり、放置の許されない問題である。これらの助詞をめぐる従来の研究では、それぞれのカテゴリーに所属する各助詞の個別的な検討はなされながらも、それらを総合的に扱ったものが少なかった。本発表では、終助詞と間投助詞のカテゴリーを大局的見地から見直し、再編すべきことを主張する。

2. 従来の終助詞と間投助詞の検討

山田孝雄(1936)は、終助詞は常に文句の終止にのみ用いられるのに対し、間投助詞は語勢を添え、もしくは感動を高めるために用いられるもので、その位置が他助詞と比べてやや自由なものである、とする。橋本進吉(1948)は、「文を終止する」助詞として終助詞、「文節の終に来る」助詞として間投助詞とする区別を示す。『日本文法大辞典』(山口明穂執筆)では、それまでの成果を総まとめ的に扱い、終助詞を「文の終わりにあって、文を完結させ、同時に感動・禁止・疑問・反語・願望・強意などの意味を表わす助詞」、間投助詞を「語調を整える、語勢を強める、感動を表わすなどのために文の間や文の終わりに、その使われる位置をかなり自由にかえて用いられる助詞」としている。

しかし、文中での助詞の出現位置の違いを手掛かりに、助詞の境界を設定することまではできない。一つの助詞が複数の出現位置を取ることは珍しいことではない。係助詞の「は」「も」「こそ」には、いずれも主語となる体言を承ける用法の他に「寒くはない」「泣きもする」「雨は降りこそすれ、雪は降らない」のように出現位置を述部に置くものが存在するし、副助詞の場合でも「彼だけ来た」「彼が来ただけだ」、「桜は春だけに咲く」「桜は春にだけ咲く」のような移動が許される。出現位置の違いを問題視するならば、これらは全て細分類されなくてはならない。

助詞の出現位置とは、その助詞の保持する機能によってもたらされる必然である。梅原恭則(1989)からも同様の主旨が読み取れる(325頁)。即ち、終助詞が文末に位置するのは、そのことが終助詞の条件になるというのではなく、結果としてそこに位置することになるということである。つまり、終助詞と間

投助詞とを分かつカテゴリーを設定するには、出現位置以外の明確な差異が認められなければならない。

前掲の諸説に見える「文の終止に与るか否か」という問題についても検討する。終助詞「芝生に入るな」「金が欲しいか」を例に取れば、これらの文に於ける「な」「か」はそれぞれ、芝生に入ることを「禁止」し、金が欲しいかどうかを「問う」ものである。このとき「な」「か」のない「芝生に入る」「金が欲しい」でも文が終止し得ることから考えて、これらの語の目的は、文の情報に禁止・疑問の意味を添加することであり、文を終止させることではない。「な」「か」は結果として文を終止させる役割をも担うものとなっていると考えるべきである。梅原恭則（1989）には「（終助詞について）文末に位置して、既に構成された叙述内容に意味を付け加え、一定の表現を構成する働きを持っている。しかし、それは、文を終止させる機能とは直結しない。終助詞がなくても文は切れうるのであり、終助詞の後に別の終助詞や間投助詞が付けうることから見て、終助詞があっても文が終わらないこともあるわけである」（324頁）とある。

但し「な」「か」の存在が文の最終的な成立に関わっているということはある。これらがなければ文の種類は変質するのであり、それは「な」「か」に一定の文（ここでは、それぞれ禁止の文・疑問文）を成立させる最終決定権があるということである。終助詞「な」「か」は文を終止させるのではなく、文の成立に関与するものである。

一方、間投助詞には「話し手から聞き手への表現の持ちかけ」という性質があるが、「明日ね、学校でね、…」のような文中の場合でも、「頑張ってね」のように文末の場合でも、文の成立そのものに関わることはない。どちらの「ね」も省略が可能であり、それによって文の種類や表現内容上の必要情報が変わることもない。間投助詞は文の叙述内容の外にあり、構文を成立させる決定権はないということである。

上記のような理解では、従来の終助詞というカテゴリーに問題が出る。例えば、橋本進吉（1948）の指摘にある「知らないや」「きつと来るよ」等は間投助詞の役割に同様と見ることができる。このように従来の終助詞のカテゴリーには働きの異質なものが同居している場合がある。此島正年（1966）に「終助詞は係助詞に比して文末に位置するという形式上の特色があるので、その把握は比較的容易であるが、それでも問題になるのは、間投助詞が文末に用いられるばあいとの差別で、ここにも、両者の間にかっきりと一線を引くことのできない、分類というものの限界が見られる」（376～377頁）の指摘があるが、終助詞内に見える非整然たる状態を解消するためにも、終助詞と間投助詞の構成要素を見直し、再編する必要がある。

3. 終助詞と間投助詞の区別の基準

終助詞と間投助詞の近似性・共通性に関する指摘は、橋本進吉(1948)、時枝誠記(1950)のように、かなり早い時期から存在する。近年でも、概論的なもので「終助詞と似た機能をもつものに間投助詞がある」「終助詞と間投助詞とは、意味の類似したものが多く、紛れやすい」(ともに『日本文法大辞典』)や、小倉肇(1985)の「終助詞と間投助詞とは、現れる環境や表わす意味の点から見ると、それほど大きな相違はない」(225頁)の指摘がある。これらからすれば、両助詞のカテゴリーが並立する状況は再考されてよい。

この点に於いて進歩的なものに、益岡隆志・田窪行則(1989)があり、ここでは終助詞と間投助詞とを終助詞に一本化し、間投助詞の「文中の切れ目に挿入して、聞き手の注意をうながす役目」を終助詞の「間投用法」と位置付ける(48頁)。一つの見識であるが、終助詞と間投助詞を従来の定義のままで単純に統括することはできず、これらを助詞として一本化するためには、それぞれの助詞を同一カテゴリーで捉えるべき基準が求められる。表現性、構文との関わり等、どのレベルでこれらを一本化するかという問題は慎重に検討されなくてはならない。

このような現状を踏まえ、本発表では梅原恭則(1989)に着目する。梅原は終助詞を文表現の成立との関わり方によって二大別する。一つは「文表現の種類を決定する」もので、「そちらは雪はどうですか。(質問)」「ああ、いい音楽だったなあ。(詠嘆)」「遠い所だから、お前は来るな。(禁止)」等を例に挙げ、これらの「か」「なあ」「な」によって「その文がどのような表現になるかが決められている」とする。即ち、この種の表現は文の成立に関与するものであり、それによって文意の総体として必要不可欠な情報が添加されるものである。他方は「表現内容を聞き手に持ちかける」ものとし、「雨が降ってきたぞ。(肯定判断表現の持ちかけ)」「そんな馬鹿なことするなよ。(禁止表現の持ちかけ)」「私、恋愛結婚したいわ。(希望表現の持ちかけ)」等の「ぞ」「よ」「わ」が「文表現を成立させるのではなく、既に成立した表現に付いて、それを聞き手に持ちかけて、それに注意を向けさせたり、念を押ししたり、同調を求めたりする表現に変えるのである。その点で、この種の助詞は、文表現の種類を決定する助詞とは別の次元にある、むしろ次項(略)で述べる間投助詞に類する働きを持つ助詞だと考えられる」とする(322~323頁)。この種の表現は文の成立に関与せず、文意の総体に必要不可欠な情報を加えるものでもない。

この論述の問題点としては、「文表現の種類を決定する」ものとして「表現内容を聞き手に持ちかける」ものとは区別して扱われる「そちらは雪はどうですか」「遠い所だから、お前は来るな」の「か」「な」が、聞き手に対して

「雪の具合を尋ねる」「来ないように命ずる」という持ち掛けをしたものと判断することも可能であることや、この「文表現の種類を決定する」の分類概念が終助詞の構文上の働きに不統一をもたらすことなどが指摘できる（例えば「そちらは雪はどうですか」の場合は、疑問詞があるために「か」の省略が可能となるが、この「か」が文の種類を決定し、文を成立させると言う得るか）。更に、禁止の「な」は、その存在によって禁止の文を成立させる要素となるが、詠嘆の「ああ、いい音楽だったなあ」の文では「ああ、いい音楽だった」という既成の表現に詠嘆の心情を添えたものと考えられ、「なあ」は文の成立に不可欠なものではなく、また文意の総体に必要不可欠な情報でもないことになる。概して、詠嘆は疑問や禁止のように、文の成立に不可欠な要素ではなく、既成の表現内容に言語主体の心情を添える形で表出される性質を持つ。しかし、疑問や禁止は、それぞれの文を形成する前提として文の総体にあらかじめ関与せざるを得ない性質のものである。このように「文表現の種類を決定する」という分類では、同一助詞として同列に扱えない文例が同居することになる。

これらの問題点を解決するために、ひとまず終助詞全般に「表現内容を聞き手に持ちかける」働きを認め、その下位分類として、梅原の「文表現の種類を決定する」を修正する形で、その存在が意味的・構文的に「文成立の必要条件となる」「ならない」の二項を設ける分類形態を取る。前掲の用例では「遠い所だから、お前は来るな」は文成立の必要条件となるもの、「そちらは雪はどうですか」「ああ、いい音楽だったなあ」は文成立の必要条件とならないものに分類される。以上、本発表のこれまでの主張となる要点をここで概括する。

イ、助詞の出現位置は、助詞の境界を左右するものでない。

ロ、間投助詞は、文の成立そのものに関わることはない。

ハ、間投助詞の働きは「表現内容を聞き手に持ちかける」ものである。

ニ、終助詞全般に「表現内容を聞き手に持ちかける」働きを認めた上で、その存在が意味的・構文的に「文成立の必要条件となるもの」「ならないもの」の下位分類を設定する。

この時点でイ～ニを総合して考えると、新たに終助詞と間投助詞とを広く覆う働きとして「表現内容を聞き手に持ちかける」働きを認め、その上で終助詞を意味的・構文的に「文成立の必要条件となるもの」、間投助詞を「文成立の必要条件とならないもの」として区別することが可能になる。この考え方によれば、従来の終助詞の一部は間投助詞に再編成されることになるが、そのことで前述した終助詞内の非整然たる状態は解消する。

4. 実例の確認

前節の二重傍線の観点から実例を眺めると、従来のように分類に迷う個別的

な語の識別がスムーズに適う。

4. 1. 終助詞の例〔前述した「か」（疑問）・「な」（禁止）以外のもの〕

- 1 男女交際の機会に恵まれためぐまれた男たちは、めぐまれない男たちより面喰いの度合いが弱いだらうか。ルックスのよりごのみを、ほんとうにしなくなっていくだらうか。かならずしも、そうではあるまい。
(井上章一『美人論』)
- 2 「そうすると、ツレは和鷹さんがお務めになりますの？」
(内田康夫『天河伝説殺人事件・上』)
- 3 「ほんとかしら。しんじられない」 (佐々木マキ『ぶたのたね』)
- 4 「じゃ、すこしかまってゆこうかしら」 (中里恒子『時雨の記』)

上の「か」「の」「かしら」は聞き手に向けられたものであり、「表現内容を聞き手に持ちかける」働きが認められる。この働きは、森野崇(1992)の「具体的な聞き手の存在をその使用の前提とし、その聞き手に向かってはたらしきかけていこうとする性質」(13頁)にほぼ同義と考えられ、従って指摘のように、この種の用例は会話文に集中する(例文1も会話相当文である)。しかも、これらは意味的・構文的に文成立の必要条件となる。このように、終助詞は反語や不審・迷いの感情等も含めた広い意味での疑問や禁止の働きをする語が主となる。

4. 2. 間投助詞の例

- 5 「もういいの。私は忘れたわ」 (宮本輝『朝の飲び』)
- 6 「もっとも本人はフランス人の意識だけね。」
(森瑤子『招かれなかった女たち』)
- 7 「だれの目にも、やくざだよ。服装も言葉もくずれていた」
(森村誠一『悪夢の設計者』)
- 8 「大丈夫ですよ、まかせてくださいな」 (『同』)
- 9 「そうだ、写真と言え、披露宴の写真ができあがっているぞ」 (『同』)
- 10 「そうかなあ。それにしてもよく似ている人がいるもんだねえ」
(森村誠一『殺人の債権』)
- 11 「あの、もしかすると、この公園でお芝居がはじまるのですか？」
「もちろんですとも」貴婦人アリスは答えた。
(柳瀬尚紀『翻訳は実践である』)
- 12 「そりゃ加藤さんの子供はおまえと違ってかわいいさ」 (『同』)
- 13 この「大吉」野郎は、俺たちの期待してた大吉とは似ても似つかないぜ。
(『同』)

上の「の」「わ」「ね」「よ」「な」「ぞ」「ねえ」「とも」「さ」「ぜ」は、いずれも聞き手に向けられたものであり、終助詞とも共通する「表現内容を聞き手に持ちかける」働きを持つ。しかし、これらは既成の表現に一定の意味を添えるだけのもので、文の総体を左右するような意味的重要性はない。これ

らがなくとも、表現内容上の必要情報は満たされている。構文上、必要不可欠ということもないため、文の成立に与かっているとも言えない。このことが、これらの語の省略を可能とする。「文成立の必要条件とならないもの」である以上、省略が適うのは当然である。このようなものを間投助詞と考える。

尚、間投助詞の使用については、持ちかける心情的内容が極端に変化しない範囲内で、複数の言い換えが可能となる。例えば、例文5「もういいの」は「もういいわ」でも文意を損なうことがなく、その場合は「聞き手に持ちかける」心情のニュアンスが少々変化したということである。このように間投助詞の使用には言語主体による表現選択の幅が許されている。これは、間投助詞が固定的な表現形式に拘束されない心情表出の語として「表現内容を聞き手に持ちかける」働きしかせず、文の成立に関与しないことに起因するものである。

5. 間投助詞は助詞であるべきか

既述のごとく、終助詞と間投助詞とを分かつ基準〔その存在が意味的・構文的に「文成立の必要条件となる」「ならない」という観点〕は、助詞の編成を考える上で極めて重要な事項である。「助詞」とされるものは通常、いずれも文中で「文成立の必要条件となる」ことが基本にある。しかるに、間投助詞だけが文成立の必要条件とならないとの規定は、間投助詞の品詞そのものをめぐる問題に言及しなければならないということであり、結局のところ、助詞の定義にも検討が必要となる。助詞の定義が文法学説により異なり、統一的なものを与えるのが困難であることは吉田金彦（1984）に詳しくあるので、ここでは常識的な助詞の解説として複雑多岐に涉らないものを幾つか掲げ、比較する。

a 山口明穂（1971）

…品詞の一つ。常に他の語のあとにつけて使われることばのうち、活用のないもの。（明治書院『日本文法大辞典』抄）

b 青木伶子（1980）

…品詞の一つ。辞のうちで活用のないもの。それ自身具象的な意味を持たず、上接語句に構文上の資格を与え、或いは文法的意味を添える。（東京堂出版『国語学大辞典』抄）

c 桑山俊彦（1981）

…助詞は、付属語（単独では文節にならない語）の一種で、活用がなく、常に他の語の下について具体的な意味を表す。職能としては、他の語について、その語と他の語との関係を示したり、その語に一定の意味を添えたりするものである。（有精堂『日本文法事典』）

d 梅林博人（1997）

…品詞の一つ。文節・文の成分の構成要素で、事柄的概念を持たず、文法的機能のみを有する辞のうち、活用しないもの。体言や他の助詞、用言、助動詞などに付いて、文法機能や一定の意義を与えるは

たらきをする。

(朝倉書店「日本語学キーワード事典」)

これらの解説から共通項として取り出せる助詞の顕著な特性とは次のようなものである。

- ①活用がない。
- ②それ自身に具体的な概念がない。
- ③上接語句と共に、言語上の関係構成をする働きがある。
- ④上接語句に一定の意味を添える。

①②は所謂「辞」たる助詞の原則的性質、③④は助詞の持つ機能上のバリエーションである。換言すれば、助詞には①②と、③か④かのいずれかが求められる。

例文5～13に示した「の」「わ」「ね」「よ」「な」「ぞ」「ねえ」「とも」「さ」「ぜ」の場合、①②が認められることは明白だが、③は認められない。意味的・構文的に文成立の必要条件とならないものに、言語上の関係構成の働きが存在する筈はないからである。

尚、確認しておく、④の働きをするものは、意味的には勿論、構文的にも文成立の必要条件となる。副助詞の「男だけがいる」という表現では、「だけ」は文意に限定の意味を添える形で参加しており、文の総体に必要な要素である。「男だけがいる」と「男がいる」とでは伝達情報が異なることから、「だけ」が意味的に文の成立に不可欠であることがわかる。「男だけがいる」から「だけ」を除いた「男がいる」が文として成立することから、この「だけ」が文の成立に関与していないかのように一見されるが、この「だけ」は「男がいる」という表現の成立に関わるものではなく、もとより「男だけがいる」という文の成立に関わるものである。「男に限定される存在がある」という表現内容を副助詞で構成するとき「だけ」は基本的に不可欠な要素である。このような立場に於いて副助詞は④を満たす。先述した終助詞も同じ立場にあり、従って、これも当然④を満たすと考える。

ところが、例文5～13の間投助詞が既成の表現に一定の意味を添えるものであり、意味的・構文的に文の成立に不可欠なものではないとする以上、④は満たさない。

例文5～13の間投助詞に③④のどちらも認めないことは、これらが助詞の機能上のバリエーションを持たないということであり、「辞」たる存在ではあっても、助詞としての適格性は欠くことを許すものである。塚原鉄雄(1979)に「助詞の構文的機能には、統括機能・接合機能・終結機能の三種がある」(34頁)とあるが、③④をこの三種の機能に置換したとしても同じことが言え、文成立の必要条件とならない例文5～13の語に統括機能や、一定の文構成に関わる接合(接続)機能を認めることはできず、また、これらに終結機

能がないことは既述の論点にある通りである。助詞に三種の機能のいずれかの存在が必要であるならば、いずれもが不在となる例文5～13の語を助詞とする必然性はなくなる。

そこで本発表では、間投助詞を助詞の編成から外し、現時点では、これを心情表出の表現形式の一種として感動詞に近い働きを持つものと捉え、何らかの心情を表明する語という意味から、仮に「表情詞」と名付ける。

6. まとめ

「表現内容を聞き手に持ちかける」働きを共通の性質として、従来の終助詞と間投助詞のカテゴリーを再編すると、終助詞はその存在が意味的・構文的に「文成立の必要条件となるもの」、間投助詞は「文成立の必要条件とならないもの」とする観点からの区別が可能となる。その上で、文成立の必要条件とならないという間投助詞の性質を助詞の範疇から外すという見地から、このようなものを仮に「表情詞」として助詞以外の辞に位置付けることを提案する。つまり「表情詞」とは、既成の文・文節に下接して「表現内容を聞き手に持ちかける」という形で何らかの心情を表明する「辞」ということになる。

引用および参考文献

- 梅原恭則 (1989) 『講座日本語と日本語教育4』「助詞の構文的機能」(明治書院)
- 小倉 肇 (1985) 『研究資料日本文法7』「5 終助詞・間投助詞」(明治書院)
- 片桐恭弘 (1995) 「終助詞による対話調整」(『言語』第24巻第11号)
- 小池清治 (1994) 『基礎古典文法』(朝倉書店)
- 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究 助詞史素描』(桜楓社)
- 鈴木英夫 (1988) 「終助詞についての構文論的研究一問いかけと省略を中心にして一」(『国語と国文学』第65巻第3号)
- 益岡隆志・田窪行則 (1989) 『基礎日本語文法』(くろしお出版)
- 塚原鉄雄 (1979) 『古典を読むための文法早わかり辞典』「文法事項」(『国文学』第24巻第12号)
- 中野伸彦 (1995) 「終助詞『さ』『な』の働きについて」(『築島裕博士古希記念国語学論集』汲古書院)
- 橋本進吉 (1948) 『国語法研究』(岩波書店)
- (1969) 『助詞・助動詞の研究』(岩波書店)
- 藤原与一 (1990) 『文末詞の言語学』(三弥井書店)
- 森重 敏 (1977) 『日本文法通論』(風間書房)
- 森野 崇 (1992) 「平安時代における終助詞『ぞ』の機能」(『国語学』第168集)
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』(宝文館)
- 吉田金彦 (1984) 『研究資料日本文法5』「1. 助辞とは何か」(明治書院)

人称直示の語用論的対照分析

—— 中国語の視点から

氏名 余 維

所属 関西外国語大学短期大学部

0. 直示 (Deixis)

語用論研究の意義、

言語学としての三つの標識：

- 1、1977、語用論雑誌 (*Journal of Pragmatics*) の創刊
- 2、1983、最初の語用論テキスト (*S. C. Levinson: Pragmatics*) の出版
- 3、1986、国際語用論学会 (IprA) の設立

語用論研究と直示

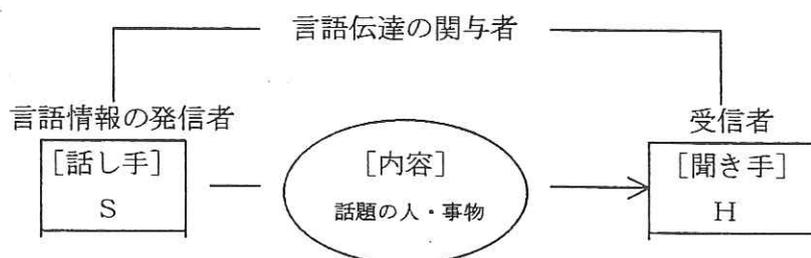
直示 (Deixis) は、語用論研究の分析部門の一つで、言語伝達が行われる状況の中での話し手の知覚に係る言語表現を扱う部門である。

レビンソン (S.C. Levinson, 1983) によれば、直示体系は人称、空間、時間、談話、社会直示などによって組み立てることができる。

本発表は、言語教育の立場から、主として、中国語を中心に、人称直示の体系、単数・複数の中日英における人称直示の類型タイプ、その語用論的差異特徴と機能を対照分析したものである。よって、場面と表現における中国語教育の方法を、語用論の視点から探ってみたい。

1. 人称の直示体系

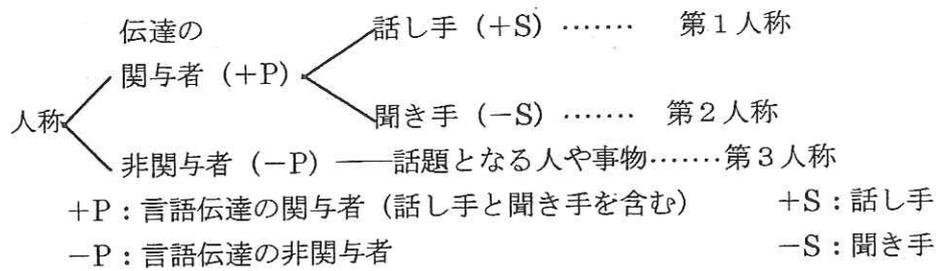
言語の伝達の三分法：話し手、聞き手、内容という3つの要素から成り立つ。



言語の伝達の三分法は、そのまま人称直示系に投影している。もちろん話し手が第1人称、聞き手が第2人称、発話の中で指示される人物・事物は第3人称の直示詞により表わされている。

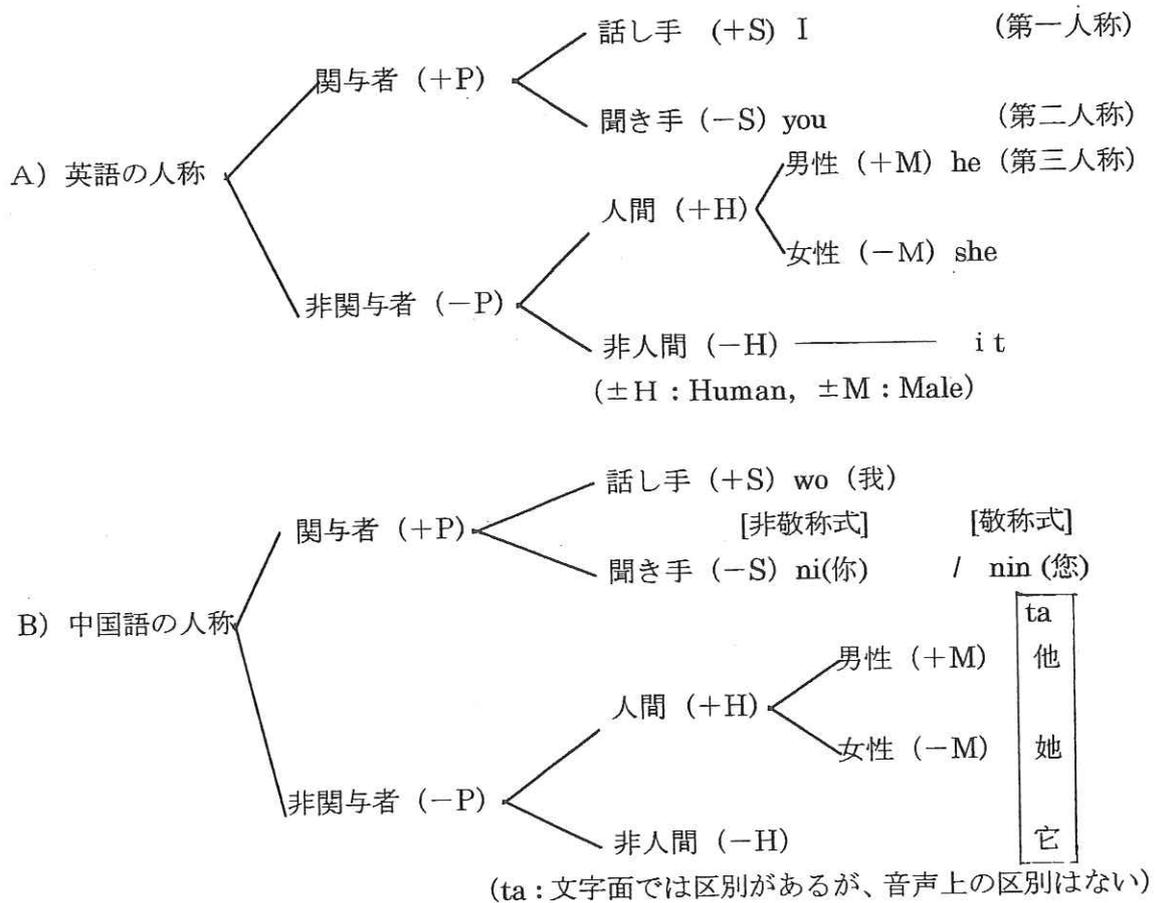
第1人称の「わたし」と第2人称の「あなた」は、現在の言語伝達の関与者 (participants) である。それ以外のものは、非関与者であり、つまり第3人称に相当する。

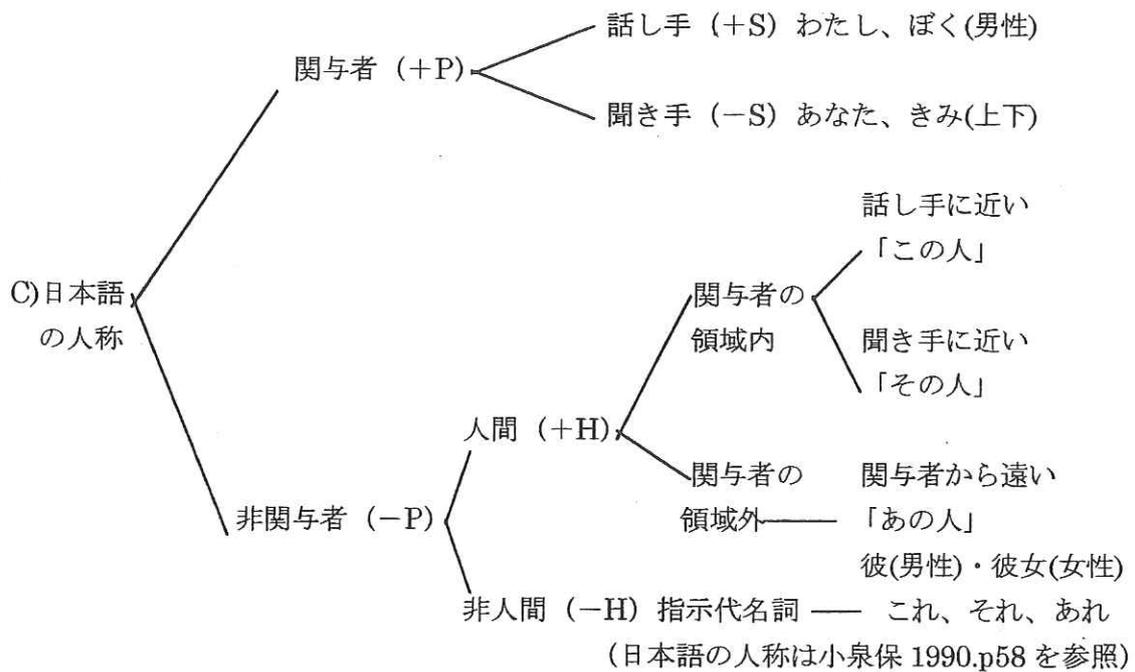
従って、人称の直示体系は次の通りである。



2. 人称直示体系の単数類型

言語によって、人称直示のタイプも様々である。異なる言語間の直示の差異特徴を明確にすることは、言語の類型的な研究と対照語用論研究の出発点でもある。筆者は、英、中、日における人称の直示体系の単数類型を次のようにまとめてみた。

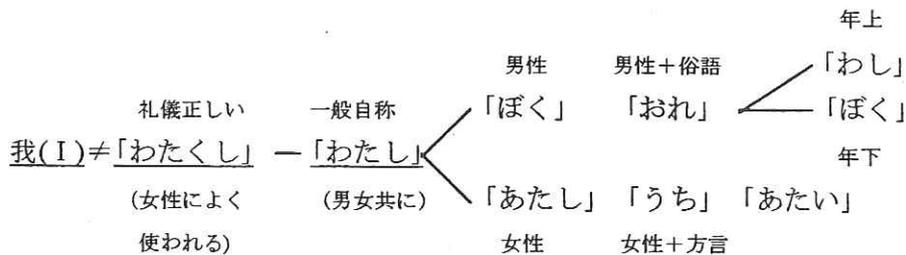




3. 人称直示体系の単数類型の差異特徴とその語用的機能

(1) 第1人称 (自称)

中国語の“我”と英語の (I) は基本的に同じで、話し手が自分のことを指し示す時は、普通、いかなる状況においても“我”(I)と自称をすることができる。しかしながら、日本語の場合、そうはいかない。発話の場面に応じて様々な「わたし」が存在しており、しかもそれぞれ異なる語用的含意をもつ。



(2) 第2人称 (対称)

中国語、英語の第2人称の“你”(You)は日本語のそれとは必ずしも対応していない。日本語の第2人称には、尊敬を表わす「おたく」のほか、よく使うものは「あなた」、「きみ」、「おまえ」があり、そして男性がけんかなど特殊な場面に「きさま」、「てめえ」を使う。

たとえよく使う「あなた」、「きみ」、「おまえ」であっても、家庭と社会の場面によっては、使い方も様々である。例えば家庭においては、妻が夫に対して「あなた」と呼ぶが、夫が妻に対して「きみ」と「おまえ」と呼ぶ。

そして中国語、英語の第2人称は〔指示型〕のみに対して、日本語においては、〔指示型〕

ある。この用法は英語にはない。日本語と中国語のこの用法にはまたかなり微妙な違いがある。以下のその意味分析によってその差異を見出せる。

日本語の〔彼/彼女〕が特定指示の意味分析

彼 [+代名詞] [+人間] [+男性] [+成人] [+恋愛] [-結婚] : 恋人、ボーイフレンド

彼女 [+代名詞] [+人間] [-男性] [+成人] [+恋愛] [-結婚] : 恋人、ガールフレンド

「君は彼/彼女がいるの？」(新旧情報の両方とも使える)

? “你有他/她(=男/女朋友, 情人, 対象)吗?” (旧情報のみ)

*Do you have he/she?

中国語のこの用法は今のところはまだ少なく、たとえ使ったとしても、既知情報や女性が男性を指す場合に限る。結婚しているかしていないかに関わらないので、夫を指すこともできる。

他 [+代名詞] [+人間] [+男性] [+成人] [+恋愛] [±結婚] : ボーイフレンド、結婚相手、夫

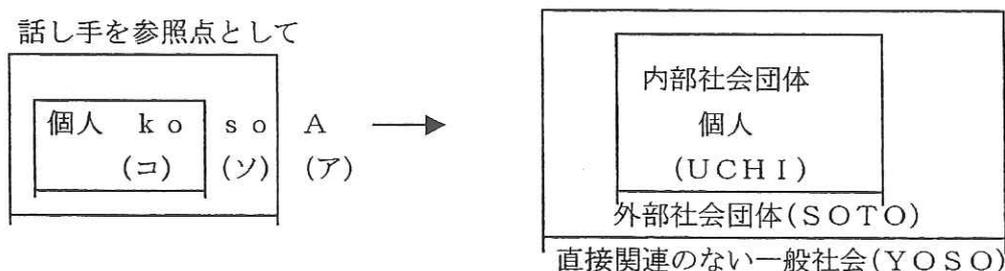
中国語では既知の情報のもとでは、指示代名詞“那位”を使って指すこともでき、発話の場面によってそれぞれ異なる語用論的含意を生み出す。例えば：

“你的那位最近怎么样?”

あなたのあの方 (=ボーイフレンド、結婚相手、夫) は最近いかがですか。

日本語の第3人称の最大の特徴は、発話が一旦場面に入ると、「彼・彼女」はあることはあるが、指示代名詞の形式を使うことが多いことである。つまり「空間指示+名詞形」(この+人)などの形式である。注意すべきことは、中国語、英語と比べて、日本語のその差異特徴は、指示の形式が話し手、聞き手の空間領域の距離を参照点によって定められるということである。

日本語にはすべての指示代名詞に、「コ、ソ、ア」の3つの体系があり、これはおそらく日本人の「ウチ、ソト、ヨソ」という三重意識構造と、世界観の認識と関連しているかと思われる。



4. 人称直示体系の複数類型の差異特徴とその語用論的機能

(1) 英、中、日の人称複数直示の類型

人称直示体系の複数類型においては、英語と中国語は基本的には同一類型に属しているが、第3人称複数形では、中国語は視覚上による語用的違いがある。第3人称の複数類型上、英語と中国語の3人称は共に人称指示詞型であり、日本語の第3人称は厳密には人称指示詞型ではなく、場面に入ると、多くの場合は(空間指示+名詞複数形)の形をとる。

は非常に通俗的な口語においては、時には単数を作ることも可能で、話す相手を包括せず、ただ単数の“let me”に相当する場合もある。

Let's give you a hand. (= Let me give you a hand.)

英語と中国語を対照して、1人称の複数形のタイプをまとめて見ると、次のようになる。

1人称：I + III (exclusive) [排除型] → let us (让我们)

I + II (inclusive) [包括型] → let us / let's (让咱们)

例外：let's (让我)

c) 日本語類型

第1人称：(排除型) → 私たち/手前ども

(包括型) → 私たち

第2人称：(排除型) → あなた達

(包括型) → あなた達

第3人称：(話し手の領域空間内排除型) → この人/方たち

(聞き手の領域空間内排除型) → その人/方たち

(話し手、聞き手の領域空間外排除型) → あの人 /方たち = 彼ら

4) 中国語における人称代名詞の複数形の語用論的機能

・第1人称複数形が第1人称単数形の機能を表す

(語用含意)

(語用機能)

我们/咱们(=我)

謙虚さを表し、

話し手に有利

(1) 本文只叙述一个概略，关于这个问题的详情，我们(=我)准备另文介绍。

この文章はただ概略だけ述べるが、この問題の詳細については、私たち (=わたし) 別の文章で紹介するつもりです。

(2) 咱们(=我)对此是外行，还得向你请教。

私たち (=わたし) はこのことについて素人だから、教えてもらわなくてはならない。

・第1人称複数形が第2人称単数形の機能を表す

我们/咱们(=你)

親しみを表し、

聞き手に有利

(3) 你要记住，我们(=你)是学生，我们的主要任务是学习。

しっかり覚えておきなさい。私たち (=君) は学生です。私たちにとって大切な事は勉強することです。

(4) 好孩子，咱们(=你)别哭，妈妈说话就回来。

いい子だから (私たち=君) 泣かないで。お母さんはすぐに戻ってくるよ。

・第1人称複数形が第2人称複数形の機能を表す

我们/咱们(=你们)

親しみを表し、

聞き手に有利

(5) 同志，咱们(=你们)这有中华牌香烟买吗？

すいません、(私たち=あなたたちの) ところでは中華マークの煙草が買えますか？

・第2人称複数形が第2人称単数形の機能を表す

私は本当に「あなた」に約束するのか？ —潜在的人称構造に基づく「約束」行為の認知的分析—

岡本 雅史 (e-mail: i.ll.b.okamoto@nifty.ne.jp)
京都大学大学院 人間・環境学研究科

1 はじめに

日常で私達はよく約束する場面に出くわす。「もう二度と遅刻しないと約束します」や「明日は必ずゼミに出席します」など、さまざまな約束を行う発話が知られている。普通こうした発話は「彼は明日はゼミに出席すると約束した」などの発話とは異なり、発話された時点で「約束」という行為を遂行する特殊な発話であるとされている。もちろん発話=行為であるからには、約束するのは話し手でありその約束相手は（明示されていないとしても）当然聞き手であると考えられよう。しかし「約束」する<私>と約束すると「言う」<私>は同じく私>であろうか。同様に「約束」される<あなた>とそれを「聞く」<あなた>も同じくあなた>なのであろうか。

本発表では、これまでその出自から言語哲学的な色彩を強く帯びていた発話行為の問題を、認知的な発話理解プロセスの観点から見直してみたいと考えている。従来の語用論研究においては発話行為論の議論で提出された枠組みに則った問題意識を共有し、いかに語法研究に役立てていくかという方向で議論が進められていく傾向があったが、発話理解という観点を設定することによってこれまで問題とされていたことのうちそれほど重要でないものが存在すること、そしてほとんど問題とされてこなかったことのうちに今後の認知的な言語研究に示唆を与えるものが存在することを明示的な「約束」の発話行為を分析することによって多少なりとも述べていきたいと考える。その際、従来ほとんど否定的な引用しかされてこなかったロスの遂行分析の着想と、オースティンと並んで発話行為論の祖であるバンヴェニストのオースティン批判と人称に関する議論を再検討し、筆者が提案する発話場面で生起する「潜在的人称構造」という概念の有効性を主張したい。

2 「約束」の理解と「約束」の成立は異なる

2.1 明示的遂行文と原初的遂行文

オースティンが発話行為という概念を創出した時点から現在まで問題となってきたことの一つに、発話内行為を遂行する発話には二種類の言語形式が存在することをどう捉えるべきかということがある。彼の用語を用いれば、遂行動詞を言語形式で明示化した「明示的遂行文(explicit performative)」と、明示化しない「原初的遂行文(primary performative)」の二種類である。

例えば、「約束」の発話内行為を遂行する発話には次のような二つの言語形式が存在する。

- (1) I promise that I will not smoke here.
- (2) I will not smoke here.

オースティン自身はこの点に関して、明示的遂行文は原初的な遂行文から遅れて発達したものと見なしている。たとえば(2)の発話は(1)の発話に先行しており、社会形態や社会的手続きの高度化と発展の結果、発言の力の明確化が強く要求されたために明示的遂行文が出現することになったと考えている。つまり、(2)の発話では話し手が「約束」という行為を遂行しその結果において責任を負う義務が曖昧になる可能性が(1)の発話を行った時に比べて相対的に低いことは明らかであり、その結果(1)のように「約束」という行為を言語化する必要性が生じたという説明になる。(Austin 1962)

この点に関しては全く異論はないが、語用論者が言うように、言語形式の上で異なるこの二つの種類の発話を同一の発話内効力を持ち、(2)が(1)にいつでも代置可能であるがゆえに本質的には意味上の違いがないとするのはいささか乱暴な議論であるように思われる。また、発話理解の観点から見ても、原初的遂行文と

明示的遂行文が単純に同じメカニズムで「約束」という行為として解釈者によって同定されるとは考えにくい。例えば、トーマスは次のような例を用いて原初的遂行文と明示的遂行文の違いを説明している。

- (3) I assure you, I did send in the application on time.
- (4) I did send in the application on time.
- (5) I swear I love you.
- (6) I love you.

(Thomas 1995: 48)

彼女によれば、(3)は(4)よりも強く主張している感じを受け、(5)は愛されている側が愛している側の愛情に多少とも疑いを持っているような状況、ないしは誰かを安心させようとする試みでなされる発話のように思われる。つまり、明示的遂行文を発話することは多くの状況において、力関係の不均衡や話し手側の特定の権利を含意することをトーマスは指摘している。しかしながら、彼女の指摘は純粹に記述的なものであり、両者の違いがどうして生じるのかの説明にはなっていない。

2.2 「約束」の成立条件

このような原初的遂行文と明示的遂行文の違いはさておき、たとえば「約束」という発話行為が成立するための条件は何であるかと最初に考えたのは無論サールである。彼は「約束」が成立する条件として以下の9つの条件を挙げている。(Searle 1969)

- (7) a) 正常入出力条件が成立している
- b) S (話し手) はTという発言において、命題pを表現している
- c) pと表現することによって、SはS自身についての将来の行為Aを述定している
(bと併せて：命題内容条件)
- d) H (聞き手) は、SがAをしないよりはする方を好むであろう。また、SはHがSがAをしないよりはする方を好むと思っている
- e) 事態の通常の推移において、SがAをするということは、SにとってもHにとっても自明のことではない (dと併せて：事前条件)
- f) SはAを行うことを意図している (誠実性条件)
- g) SはTという発言によって自分がAを行う義務を負うことになるということを意図している (本質条件)
- h) SはTという発言によってSがAを行う義務を負うことになるという認知(K)をHの中に生じさせることを意図(i-1)し、またi-1の認知によってKを生じさせることを意図し、さらにi-1の認知がTの意味をHが知っていることによってなされるように意図している。
- i) SおよびHによって使用されている方言の意味論的規則はTが正しくかつ誠実に発せられるとき、かつその時に限って条件a)~h)が成立するという規則である

彼によれば、さらにこれらの条件から4つの規制的規則と1つの構成的規則が抽出され、約束に存在する発語内効力の使用を支配するとされる。また、上記の条件のうち、a) h) i)は発話行為全体に関わるものであるから、「約束」を成立させる条件は残りの6つの条件であるとしている。

これらの諸条件をひとつひとつ吟味していくことは本稿の主旨ではないが、次の点は指摘しておきたい。サールがこのような成立条件を設定した背景には、当然のことながら行為に先立って行為の成立する条件が存在するという信念がある。これはオースティンが発話行為の適切性条件を指摘して以来、あまねく語用論研究者によって受け継がれている前提でもある。しかしながら、現実の発話理解のプロセスにおいて、ある発話が「約束」であると解釈されるためにはサールの言うような条件がそれぞれ前もって成立する必要はない。実際のところ、聞き手がこれらの条件をひとつひとつ勘案することによってある発話を「約束」と同定することなどありそうにない。むしろ、逆に当該発話が「約束」ではないと聞き手に感じられる時に聞き手がその理由を求める先を抽象化したのが先の成立条件であると見た方が直観に合う。例えば次のよう

な発話は実際には「約束」という発語内行為を遂行している例ではないが、現実には約束が行われる実態をよく表わしている。

(8) I promised her my eternal love, and I actually thought that for a couple of hours.

[Dangerous Liaisons (1988)]

(8)の話し手は「約束」を行わなかったのだろうか。それとも約束はしたけれども守らなかったのだろうか。しばしば発話行為の議論で問題となるのはこのように「一体どの時点で行為は遂行されたと見なし得るのか」ということである。この問題に適切な解答を与えることは容易ではない。もちろん次のように答える者もいるであろう。「発語内行為はその定義上、発話と同時に達成される行為であり、言い換えれば発話くすなわち>行為なのである。発話くによって>なされる事後的な行為は発語媒介行為として別のカテゴリーに属するのだ。ゆえに条件さえ適切に整っていれば発語内行為は発話の時点で達成される」と。しかしながらこれは一種の循環論法であり、また発話行為と行為一般を混同している。なぜならば、発話の時点で「約束」と見なされることと実際に「約束」が成立することとは同義ではないからである。たとえば、次のような例ではBはAの発話を「約束」としては不十分なものと考えている可能性がある。

- (9) A: 明日は必ず迎えに行くって約束するよ。
B: じゃあ、指切りげんまんね。
(と言って二人は指切りげんまんをする)

この時、Aはサールのいう成立条件の全てを満たしているが、聞き手Bにとっては指きりげんまんをすることで初めてAは「約束」行為を遂行することになると考えている。この場合、BにとってAの発話は「約束」の発話と言うよりは「約束の表明」であると考えた方が合理的である（この点は後の議論にとって大きな意味を持つことになる）。

ともあれここでは、発語内行為の成立条件を措定することは無意味ではないにしろ、言語を媒介とする行為としての特徴をかえって見失う危険性があることを指摘しておくにとどめて、今度は明示的遂行文の特徴について考察してみよう。

2.3 「約束」を遂行する明示的遂行文の特徴

さて現実の発話で「約束」を明示的に表示する発話は例えば英語では以下のようなものがある。

- (10) I promise you that before you die I will kiss you. [Little Women (1994)]
(11) Miss Truvy, I promise that my personal tragedy will not interfere with my ability to do good hair. [Steel Magnolias (1989)]
(12) Nick, I promise never to call you a bull in a china shop again. [The Big Valley (1965)]
(13) I promise, I'll come back for you. I promise, I'll never leave you. [The English Patient (1996)]

これらを形式化すると次のようなものになるであろう。

- (14) a. I promise (you) that p
b. I promise (you) to p p : 命題内容

その他、サールの命題内容条件を考慮するならば、 p は話し手自身の将来の行為を示さねばならないので、 p における主語は話し手で動詞は未来形である必要があると書き加えるべきかも知れない。しかしながら、(11)の例では命題内容の主語は一人称主語を取っておらず、また次のような例では命題内容は過去の事実である。

山梨はこの例を「誓い(swearing)」でありサールの成立条件を満たす標準的な無条件の約束(categorical promise)とは異なる例として挙げている。確かに、命題内容が未来形の動詞を取ることはおそらく認めてもよさそうである。

それでは、これらの文が発話された時これが「約束」であると考えられる根拠は一体何であろうか。サールであれば(命題内容条件は別にすれば)(7)のd-h)の成立条件に見られるように信念と意図という非言語的な側面にその大半の根拠を置くであろう。しかしながら、これが行為一般とは異なりあくまで発話として聞き手に提出される限りは、言語的な側面にその根拠を見出すべきであると筆者は考える。なぜならば、先に述べたようにある発話を「約束」と見なすことと「約束」行為が成立したかどうかは区別する必要があるからである。そして、発話理解において必要なのは客観的な行為の成立などではなく、聞き手ないしは解釈者が当該発話をなぜ「約束」と見なしたかの方である。従来の発話行為論で重視されてきたのが「約束」の<遂行>ないしは<成立>であったのとは対照的に、この側面を「約束」の<理解>と仮に呼ぶことにすれば、「約束」の理解と「約束」の成立は異なるということが言えよう。

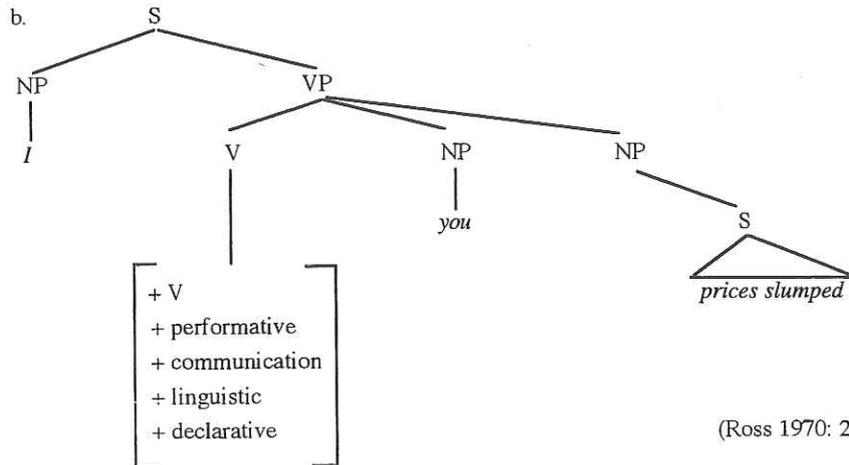
3 発話は必ず「発話」される

3.1 ロスの遂行仮説

オースティンの発話行為論は語用論という新しい学問の礎となったが、生成文法派の側からもいくつかの統語的な問題を解決する可能性が発話行為論に含まれているという主張がかつてなされたことがあった。その代表的な例がロスの主張する遂行分析である(Ross 1970)。

彼は、オースティンの原初的の遂行文と明示的の遂行文が言語形式の差はあれ、発語内の力が共通するならば同一の遂行性を持つという主張を踏まえ、全ての文が次のような深層構造を持つことを主張した。例えば(16)のaはbのように深層構造を表記できる。すなわち、あらゆる文はその最上位の節として(1)一人称単数の主語(2)二人称の間接目的語You(3)現在時制の言語伝達(+linguistic, +communication, +declarative)の遂行動詞を取ることを主張したのである。そしてこの主張の根拠は例えば(17)(18)のような前方照応の例を用いて説明された。(17)の例は発話の基底に一人称単数の主語があることを示しており、(18)の例では基底に現在時制の言語伝達(+linguistic, +communication, +declarative)の遂行動詞が存在することを示しているとされる。

(16) a. Prices slumped.



(Ross 1970: 224 (一部改))

(17) a. Linguists like myself were never satisfied with the promising framework.

b. * Linguists like himself were never satisfied with the promising framework.

(18) a. Ann can swim; but if you don't believe me, just watch her.

b. * Ann can swim; but if you don't believe them, just watch her.

3.2 遂行仮説の欠陥と修正案

この遂行仮説に対する反論は様々なところで論じられておりここでは繰り返さないが、発話理解の観点から筆者が考える遂行仮説の欠陥は大きく見て三つある。

一つは、これが発話行為論を統語論および真理条件意味論に還元しようという試みであるという点である。たとえば、レヴィンソン(Levinson 1983)が指摘するように、意味論的問題としては、遂行節とその補文が同じ真理値を持っているとは言えないこと、そして統語的には発語内効力を統語構造に反映させることに限界があることは明らかである。しかしながら、この後見るように、発話理解という観点から再検討するならば依然として有効な点がある。

二つめは、今述べたことと関係するが、基底の最上位の節の中で取る動詞が、すなわち遂行される発語内効力であるとした点である。つまり、複数の遂行動詞が選択的に(16b)のVの位置を占め得るとロスは考えているようなのだが、それは統語論的な要請であって現実の発話理解の観点からは容認されない。なぜならば、発話理解の観点から考えれば、どんな発話においても何らかの話し手が何らかの聞き手に「発話している」ことだけが唯一、それ以外の行為の同定とは異なり、いついかなる場合も無条件に行為として認められるからである。例えば次のような会話を考えてみればなぜそれが問題になるのか容易にわかるであろう。

- (19) (BがAの噂話をしていたら、そこにAがやってきて)
A: 俺についてなんて話してたんだ。
B: いやいや、僕は君がおっちょこちよいだなんて一言も言わなかったよ。
A: 言ってるじゃないか!

この例の場合、Bの発話において話し手Bは、「Aのことをおっちょこちよいだと言わなかった」Bと「『Aのことをおっちょこちよいだと言わなかった』と言っている」Bに分裂している。Aが怒っているのは、後者のBの行為、つまり先に述べた最上位の行為としての「発話している」という行為に対してである。つまり、ここでは当のBの発話内容が真実であろうとなかろうと、Aの怒りにはある意味無関係であり、<いま><ここで>「おっちょこちよい」と言われていることだけが関係しているのである。従っていわゆるメタ行為として「発話する」ことを認める必要性は明らかである。

そして最後に、基底の最上位の節の中で取る主語と間接目的語のIとYouを現実の話し手と聞き手と同一視し、下位の節に含まれるIやYouと単純に同一指示を与えるものと仮定した点が問題である。なぜならば、先の(19)の例の場合、二重の行為のそれぞれに結びついた動作主であるBを設定しなければAの反応が説明できない。

以上の問題点を踏まえた上で遂行仮説を評価するとすれば、遂行仮説の最初の着想である「いかなる発話もある話し手によってある聞き手に向けられた発話である」という現実の発話状況に潜在的に存在する一つの認知空間を設定したことこそが重要である。言い換えれば、次のような構造を全ての発話について認めるべきであると筆者は考える。(橋元も同様の図式を提案しているが、筆者とは展開が異なる。詳しくは橋元(1995)を参照せよ。)

- (20) I—TELL—YOU—[(utterance)]

ただし、この大文字のI、YOUは現実の話し手および聞き手と完全に同一のものでなく、あくまで「語る」という行為を示すTELLに結び付けられた一回限りの<話者相><聴者相>とでも言うべきものとする。

4 明示的な「約束」は遂行される以前に「約束」である

4.1 バンヴェニストの人称論

バンヴェニストは早くから<人称>という問題について、その連続関係から<人称>を定義して「私」と「あなた」と「彼」という実際の存在と関係付けることを批判していた。彼はアラビアの文法家が用いる定義から出発して、一人称を「語る者」、二人称は「語りかけられる者」であるのに対し、三人称は「(その

場に) いない者」という本質的な性質を持っていることを主張する。そして、まさに<語り>の場面からのみ規定されるものとして人称をとらえ、発話する『私』という一人称とその『私』が話しかける『あなた』という二人称とがその<語り>の行為の場面での都度生起する<一回性>を持ったものであることを示唆した。さらに『いま』『ここ』もその<語り>の場面でのみ本質的に見いだされるものであると考えたのであった。(Benveniste 1971)

このような彼の考え方の背後には、言葉のもつ自己参照性、つまり各々の話し手が自らを<語る主体>として設定し、自分の発話の中で『私』として自らを指し示すことによるのみ言葉が可能になるという信念がある。そのため必然的に、オースティンが最終的に放棄した事実確認的発話と行為遂行的発話の区別を重視することとなる。従って、彼は例えば次のような原初的遂行文と明示的遂行文を同一視するオースティンの立場を批判する。

- (21) a. Come here!
 b. I order you to come here. (Benveniste 1971: 237)

すなわち、彼にとってある一つの発話が遂行的であるのは「現在一人称の動詞を含む決まり文句(formula)を我(ego)が発話するという事実によってそれが遂行された行為を名指す(denominate)」(Benveniste 1971: 237)からであり、(21)bは通常の命令文である(21)aとは同じ結果を引き起こすとしても異なったものなのである。

私見によればこうしたバンヴェニストの考え方は、発話の遂行する行為の成立の可否を問題にしてきた結果、言語の問題を行為の問題にすりかえてきたこれまでの発話行為論の立場に対し、言語を使用することによる<外在的行為遂行>と言語それ自体の内部で行為が遂行される<内在的行為遂行>の区別を問題にするきわめて言語的な立場であると思われる。これは一見、従来言われてきた発語内行為と発語媒介行為の区別に対応するように思われるが、実は根本的なところで大きく異なっている。彼の考えを敷衍するならば言語形式における区別が重要なのであり、どのような行為として聞き手に理解されるのかという発話理解の立場から見て、つまり行為の<成立>とは必ずしも行為の<理解>とは同一のものではないという立場からすれば非常に重要な示唆であるように思われる。

4.2 潜在的人称構造

それでは、これまでの知見を踏まえた上で筆者が提案する潜在的人称構造を定式化すれば次のようになる。

- (22) I — TELL — YOU — [U_i(S₁, V₁, O₁...)]
 | | | |
 <+1st> <+present, +verbal> <+2nd> <+3rd, -present, -verbal>

ここでは、<語り>の場のみが潜在的な人称構造を規定すると考え、あらゆる発話が<語る「私」>としての一人称I、<語りかけられる「あなた」>としての二人称YOU、そして本質的な現在性と言語性を持つ<語る>行為TELLを潜在的に持っているとして仮定する。そして、語られる対象である現実の発話はこの<語り>の場の外にあるが故に、潜在的に三人称でありかつ非現在性かつ非言語性を持つとする。また、認知的な構造としてあらゆる発話がこのような構造を持つとすれば、聞き手は必要に応じていつでもその発話を現在行われている言語的な行為としての「語り」として対象化することができる。

では、明示的な遂行文をこのモデルでとらえるとすればどのようなようになるであろうか。先に挙げた(1)の発話を例にとると次のように分析される。

- (23) a. I promise that I will not smoke here.
 b. I — TELL — YOU — [I promise [that I will not smoke here]]
 | | | |
 <+1st, +present, +verbal> <+1st, +present, +verbal>
 ≈

つまり、主節の主語および動詞が潜在的には三人称で非現在で非言語的であるはずのものが、実際の発話の中で表層的な言語形式として一人称主語・現在時制を取り、かつ意味論的に言語性を持つ動詞であった場合、解釈者はその発話を、発話事態を構成する潜在的な行為である「語り」の代わりに言語形式で表わされた明示的な行為を錯視により同定してしまうのである。なぜならば、ある発話が行為であるためには発話の時点と行為の時点が一致していること、発話者が行為者と一致していること、そしてその行為が言語を仲介することによって成立していることが必要であるが、言語形式としてそのような要件を満たしている時に限り、解釈者はその発話に明示的に表わされた行為の名を付与してしまうのである。言い換えれば、その行為の名において当該発話を<理解>するのである。もちろん必要に応じてその発話に「語り」つまり「言う」という基底的な行為の名を与えることが可能であることは言うまでもない。

このようなモデルで分析することの利点は、まず、行為の<成立>とは別に行為の<理解>を説明できることが挙げられる。つまり表層的な言語形式によって解釈者がその発話を理解し、次の段階としてその行為が成立しているか否かを評価するという二段階のステップを考察する基礎となり得る。

次の利点として、表層の言語形式として上に挙げた三つの条件のうちのどれが成立しなかったかによって、遂行発話にならなかった場合や別の行為になる場合などを分類しうる可能性が期待できる。ここではそれらを詳しく述べる余裕がないが、例えば主節の動詞が過去形であった場合や、言語的でない動詞（例：run）であった場合、そして一人称主語でなかった場合に明示されている動詞が表わす行為としては理解されず、別の行為であったりする理由の説明に貢献するであろう。また、逆に(11)の例や次の(24)のような例のように、主節ないしは補文の主語が一人称ではないにもかかわらず行為の理解が達成される例を、潜在的な一人称との意味論的包含関係によって説明することが可能であると思われる。

(24) 我が社はこの製品の品質を保証いたします。

そして、このような明示的の遂行文を解釈者が理解するのはまさに言語的なく内在的行為<遂行>の一部としてであることを、このモデルでは示している。つまり、明示的に「私」が「約束する」ことが言語形式に反映されている限り、約束行為が成立する前に解釈者にとってそれは「約束」である。その行為が成立するか否か、そして別の行為が遂行されるか否かは発話理解のプロセスにおいてはその次の段階の問題である。

5 私に本当に「あなた」に約束しているのか？

5.1 意味の次元と行為の次元

さて、これまで述べてきた中で筆者が最も強調したい点は、発話行為は「行為」であると同時に「言語」であるということである。従って行為論的な視点からのみ考えている限りは、発話行為が他の行為一般とはどのような差異があるのかは説明できない。行為一般の成立条件は発話行為の場合転倒される。つまり、ある発話の解釈者にある発話行為がいかんして成立したかを問うことは、それをある「行為」として理解した上でのレトロスペクティブなプロセスに他ならない。また、発話が言語である限りは、それによって伝えられる意味内容とその言語を使用しているという行為の両者ともが、常に潜在的に解釈者の反応を引き起こす要因になり得る。（例えば、(19)の例はその典型である。）

つまり、発話行為の特質を一言で言うならば、必ず「意味」の次元と「行為」の次元の二つの次元が発話によって開かれることである。そして意味が前景化し行為が背景化することも、またその逆もあり得る。解釈者はその「意味」に対して反応することも「行為」に対して反応することもできるのだ。オースティンが発話行為という概念を着想した時、その根底にあったのはこの発話の重層性であったと思われる。そうでなければ、最終的に事実確認的発話と行為遂行的発話の区別を放棄しはしなかったであろう。奇妙なことに、バンヴェニストによるその放棄の批判もやはり、同じこの発話の重層性にその根拠があると考えられる。両者の違いは、オースティンは発話が本質的に持つ「語る」という行為を「陳述する」というカテゴリーで他の発話内行為と同じ平面に置いたのに対し、バンヴェニストはこの「語る」行為を他の発話内行為の基底にある特権的な行為と見た点にあるのだ。筆者の提案する潜在的人称構造はさらに、「意味」の次元から「行為」の次元へと言語形式を媒介して変換されるものとして発話内行為を描こうとする試みなのである。

5.2 第三者による「約束」の理解

最後に、最初の疑問の答を考えてみたい。「約束」する<私>と約束すると「語る」<私>はそれぞれ異なる行為に結び付けられた異なる相の一人称である。しかし、潜在的な遂行節との言語形式の類似性が「意味」の次元から「行為」の次元へと橋渡しすることによって、「語る」ことがすなわち「約束する」ことになり、その結果一人の<私>へと収斂して見えることとなる。不誠実な約束を遂行することができることや、(9)のBがAの発話だけでは信用しないのも、もともとの一人称の分裂に由来している。

そして、「約束」される<あなた>とそれを「聞く」<あなた>が同一の相の二人称であるとしたら、約束される相手である聞き手のみがその発話を「約束」であると同定できることになり、傍観者的にその発話を耳にした者はそれを「約束」とは同定できないことになってしまう。もちろん実際はそんなことはなく、他人に向けられた「約束」の発話であっても「約束」として<理解>できるのである。ただし、その発話が成立しているかどうかはその解釈者にはわからないのだが。

(これまで、「聞き手」という言葉よりも、第三者をも包含する「解釈者」という用語を用いてきたのは無論この区別を行うためである。)

6 おわりに

筆者は別の場所で、発話理解には必ずしも話し手の伝えようとした「意味」を復元することは必要ではなく、その発話によって生じる状況を構成する<行為者><行為対象><行為>のいずれかを聞き手がカテゴリー化することによって達成されることを述べた(岡本 1998)。本発表の目的は、そのうちの<行為>のカテゴリー化のメカニズムを明らかにすることであった。いわば、発話理解システムの一つの下位システムとして発話行為の同定プロセスを位置付け、「約束」という行為の分析を基に考察しようという目論見であったのである。しかしながら、本研究はまだその端緒についたばかりであり、不完全な点や手付かずの部分(特に、原初的遂行文の理解)を挙げればきりが無い。しかしながら、最終的に発話理解という複雑な現象を説明するための一つの方向性を示していると些かなりとも感じていただければ幸いである。

◇参考文献

- Austin, J.L. 1962. *How to Do Things with Words*. Oxford: Oxford University Press. (坂本百大(訳)『言語と行為』, 大修館書店, 1978)
- Benveniste, E. 1971(1966). *Problems in General Linguistics*. Florida: University of Miami Press. (河村正夫・木下光一・高塚洋太郎・花輪光・矢島猷三(訳)『一般言語学の諸問題』, みすず書房, 1983)
- 橋元良明 1989. 『背理のコミュニケーション』 勁草書房.
- 橋元良明 1995. 『言語行為の構造』, 『他者・関係・コミュニケーション』(岩波講座 現代社会学3), 岩波書店, 103-120.
- Jacobs, R.A. and P.S. Rosenbaum (eds.) 1970. *Readings in English Transformational Grammar*. Waltham, Mass.: Ginn & Co.
- Leech, G.N. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman Group Ltd. (池上嘉彦・河上誓作(訳)『語用論』, 紀伊国屋書店, 1987)
- Levinson, S.C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press. (安井稔・奥田夏子(訳)『英語語用論』, 研究社出版, 1990)
- 岡本雅史 1998. 『コンテキスト変換としての発話理解』, 社会言語科学会 第2回研究大会 予稿集
- Recanati, F. 1987.(1981) *Meaning and Force: The Pragmatics of Performative Utterances*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ross, J.R. 1970. "On Declarative Sentences". in Jacobs and Rosenbaum (eds.), 222-72.
- Thomas, J. 1995. *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*. London: Longman Group Ltd.
- 土屋俊 1986. 『心の科学は可能か』 東京大学出版会.
- 山梨正明 1986. 『発話行為』 大修館書店.

日本語における間接的要請文の生成と理解に関わる語用論的方略の習得について

森 貞
(福井工業高等専門学校)

1. はじめに

部屋の窓が閉まっている状況で、話し相手(聴者)に窓を開けさせる目的で、「ここは暑いね。」と発言する場合がある。この場合、「ここは暑いね。」という発話文は、《窓を開けて下さい》を真意(要請)の発話内行為とする間接的要請文と見做される。この種の間接的要請文の生成及び解釈のメカニズムに関しては、Gordon & Lakoff(1975)、Searle(1975)、Leech(1983)、Levinson(1983)、Sperber & Wilson(1986)、小泉(1990)等多くの言語(哲)学者達によって議論されており、その多くが複雑な推論モデルに基づくものである。

しかしながら、この種の間接的要請文は、発表者の調査によれば、3歳前後から、その使用が認められる(A=男児:2歳11ヵ月、B=女児:4歳3ヵ月)。

(1) A:「ラーメン、あつい」

B: (食器棚から皿を取り出し、その皿をAに手渡ししながら)

・「はい、おさら」

A:「ありがとう」

この会話で、Aの最初の発言が《(その皿に取り分けることによってラーメンを冷ます為の)お皿を取って》を真意とするものであることは、Bによる当該行為の実行(これはBがAの発言の真意を的確に把握していることの証左である)に対するAの感謝の言葉から理解できる。では、A、Bは、どのようにして、このような語用論的方略を習得するに到ったのであろうか。この場合、この時期の幼児の精神的発達段階を考慮すると、複雑な推論が関与しているとは考えにくい。

そこで、本稿では、2人の日本人幼児〔ノリエ(以後Nと表記):女児、タケシ(以後Tと表記):男児〕(及び彼らを取り巻く複数の大人)による言語活動の観察記録を分析することによって、日本語における間接的要請文の生成と理解に関わる語用論的方略がどのような形で習得されるようになるかを探ることとする。

本稿の構成は以下の通りである。2節では、間接的要請文の生成と理解に関わる語用論的方略の習得に重要な役割を果たすと思われる条件文の習得過程について、赤塚(1998)の提案を観察記録によって追認する形で論じる。3節では、観察記録を基に、語用論的方略の習得に関わる認知的基盤(Base)を提案し、間接的要請文がその認知的基盤のPROFILE表現であることを明らかにする。4節では、3節での議論を踏まえて、間接的要請文の生成と理解に関わる語用論的方略の習得過程について論じる。5節は以上のまとめである。

2. 日本人幼児の条件文習得過程

2.1 D条件文とDesirabilityの原理(赤塚(1998))

赤塚(1998)は、実証的研究を通して、日韓幼児の条件文習得過程を次のようにまとめている。

…日韓幼児の条件文習得過程をふりかえってみよう。最初に立てた仮説のように、まずD条件文(話し手が相手の行動を規制する目的で使用する条件文のこと。DはDeontic Modality[拘束義務のモダリティ]を指す。D条件文の基本構造は以下の形で記述され

る: *If you do it, it's GOOD/BAD.*) が習得され、D条件文を土台にして、普通条件文が習得されることがわかった。D条件文は、禁止、許可、命令、指示、教えなどの発話行為を通して、毎日くりかえし幼児が大人から受けるインプットである上に、背後にあるのが幼児にもわかりやすいDesirabilityの原理 (a. *DESIRABLE-LEADS-TO-DESIRABLE* b. *UNDESIRABLE-LEADS-TO-UNDESIRABLE*)であるから、日韓の2歳児たちが自然に使うようになるのは当然であろう。幼児の養育にとって必須の発話行為がD条件文を使って行われるおかげで、日韓の幼児は、英語圏の幼児などよりずっと早くから、普通条件文を分析し習得する機会に恵まれている。D条件文から普通条件文への移行にもDesirabilityの原理が働いているのであるから、日韓幼児の早期条件文習得という現象はまさにDesirabilityの仮説 (自然言語の条件文の前件と後件の間には「前件が実現すれば、後件が実現する」という相互依存関係(contingency/dependency relationship)が存在する。条件文を使っているいろいろな発話行為を遂行することができるのは、この相互依存関係のおかげで話し手(言語主体)の意図と心的態度がDesirabilityの原理となつて働くからであるとする仮説)とDesirabilityの原理のダイナミックな経験的裏付けであると言えよう。(pp.88-89) [斜体部分は同文献の他の箇所を引用する形で筆者が書き加えた用語解説である。太字も筆者による。]

この(条件文習得過程にかかわる)主張が妥当なものであることは、以下に示す観察記録により明らかにされるが、ここで特に注目したい点は、D条件文(そしてそれに続く普通条件文)の習得(生成と理解)がDesirabilityの原理を橋渡しとして間接的発話行為という語用論的方略の習得に連動している点である。

2.2 D条件文の習得に関わる観察記録

2.2.1 大人によるD条件文使用の実態

まず、2人の幼児(N、T)を取り巻く大人によるD条件文の使用の実態を示す。

(2) ① [N(2歳4ヵ月)が台所で母親の手伝いをしている時の録音記録(録音:10分)]

- ・「ダメ、手つっこんでそんなことしたら。」【母親→N(以下も同じ)】
- ・「アカンて、そんなことしたら。」
- ・「そんなことしたらダメ。」
- ・「お料理するのにそんなことしたらダメなの。」
- ・「椅子持ってこなくていい、ここにあるから。」
- ・「こっちにおいとけばいい。」
- ・「ダメよ、そんなことしたら。」
- ・「ダメよ、入れたら。」
- ・「ダメ、そんなことしたら。」
- ・「のんちゃん、お前掛けそのまましてたらダメよ、、、置いときなさい。」

わずか10分間に、母親はこれだけのD条件文を使用して、Nの行動を規制しようとしている。そして、Nはそれぞれの発言を受けて言及された自分の行動を止めていることから、Nは母親のD条件文使用の真意(禁止)の発話行為を理解しているといえることができる。

(3) ② [T(2歳6ヵ月)がテープレコーダーに興味を示し、それをおもちゃにしようとしている時の録音記録(録音:5分)]

- ・「お話ししないとダメだよ。」【父親→T】

このテープレコーダーはしゃべると動く(録音が始まる)機能であったので、無言のままでは作動しないことから、父親がTに(3)の発言をしたのであるが、この発言の直後、Tはテープレコーダーに向かって桃太郎の話(出だしの部分)をしゃべり始めた。

- (4) ③ [N (4歳3ヵ月)、T (2歳10ヵ月) が母親の実家で夕食を食べている時の録音記録(識別:20分)]
- ・「ねりねりダメだよ。」【父親→T】
 - ・「ペンしたらアカンよ。」【父親→T】
 - ・「そんなとこ置いとくとアカンよ。」【父親→N】
 - ・「そんなことしたらアカン。」【祖母→T】
 - ・「走るとダメよ。」【父親→T】
 - ・「中入っていくとダメよ。」【母親→T】
 - ・「ご飯食べなアカン。」【祖父→T】
 - ・「眠たかったら寝てイイよ。」【父親→T】
- (5) ④ [N (4歳4ヵ月)、T (2歳11ヵ月) が母親の実家に行って遊んでいる時の録音記録(識別:10分)]
- ・「運ぶのはアカンわ、運ぶのはダメ。」【母親→T】
 - ・「飴ちゃん後で食べればイイじゃん。」【母親→T】
 - ・「あんまり長いことしたらアカンよ。」【父親→N、T】
 - ・「たけしくん、飛んじゃダメよ。」【父親→T】
 - ・「こっちしてみないとアカンて、こうやってみたらダメだって。」【母親→T】
 - ・「たけしくん、炬燵の上乗ったらダメ。」【母親→T】
 - ・「あんまりするとアカンよ。」【母親→T】
 - ・「なんでも取っちゃダメ。」【母親→T】
 - ・「あんまりギョッとしたらダメよ。」【母親→T】
 - ・「コップに入れて飲まなアカンね。」【父親→N、T】
 - ・「たけしくん、お片付けしてからせなアカンね。」【母親→T】
 - ・「ちゃんと座ってないとこの前みたいにかやるとアカンぞ。」【父親→T】
- (6) ⑤ [N (4歳5ヵ月)、T (3歳0ヵ月) が寝る支度をしている時の録音記録(識別:10分)]
- ・「歯あ、磨かなアカンよ。」【母親→N、T】
 - ・「パンツも替えなアカンし。」【母親→T】

(2)－(6)の実例を見ても分かるように、大人は日常的にD条件文を使用して幼児の行動を規制(制御)していることが分かる。

2.2.2 幼児によるD条件文使用の実態

ここでは、二人の幼児(T、N)が実際に発話したD条件文を列挙する。

(7) Nによる発話の実例

- ・「ここ、ふかなアカンよ。」(2歳4ヵ月)
- ・「しお、こしょう、ふらないとダメなんだよ。」(2歳4ヵ月)
- ・「ぜんぶたべたらダメだよ。」(4歳3ヵ月)

(8) Tによる発話の実例

- ・「ダメよ、さわっちゃダメよ。」(2歳4ヵ月)
- ・「このみかんたべてイイよ。」(2歳6ヵ月)
- ・「はいっちゃダメ。」(2歳10ヵ月)
- ・「まだたべちゃダメだよ。」(2歳11ヵ月)
- ・「そこにいてイイよ。」(2歳11ヵ月)

(7)(8)から、N、Tは遅くとも2歳4ヵ月までにはD条件文を習得していると言える。

2.3 普通条件文の習得に関わる観察記録

2.3.1 大人による普通条件文使用の実態

大人が幼児に対して使用した普通条件文を以下に示す（丸で囲まれた数字は2.2.1における場面を表す）。

- (9) ・「アカンよ、それ焦がしたら、ご飯食べられなくなるよ。」【①母親→N】
・「あんまりギュッとすると手切れるでね、そっと洗って。」（同上）
・「これ、お話すると回るんだよ。」【②父親→T】
・「しゃべると回るよ。」（同上）
・「お歌歌うと回るよ。」（同上）
・「なぶると壊れて聴けなくなっちゃうよ。」（同上）
・「端っこ歩くと転けてバーンとなるよ。」【④父親→N、T】
・「そこ降りると車に乗れないよ。」【④父親→T】
・「たくさん入ると濡れるんだって。」（同上）
・「これ（靴下）履かないと、（靴）履けないんだよ。」（同上）
・「ベタベタになったらどこも行けないよ。」（同上）
・「そんないっぱいするとわからんよ。」【⑤母親→N】
・「柿食べるとお腹痛くなるよ。」【⑤母親→T】
・「のんちゃん、危ないよ。そんな毛布の上に乗っちゃうとスッと滑ってくよ。」
【⑤母親→N】

大人は上記の普通条件文を使用して、幼児の行動を規制しようとするのであるが、何故、これらの普通条件文に、〈禁止〉〈要請〉等の発話行為の効果が生じるのかについては、3節で論じることとする。

2.3.2 幼児による普通条件文使用の実態

N、Tが使用した普通条件文の実例を以下に示す。

(10) Nによる発話の実例

- ・「いつまでハッピーバースデーしてると、ぎょうぎわるいよ。やめなさい。やめなさいよ。ダメだったらダメ。」（2歳2ヵ月）
- ・「ひっぱらないで。ひっぱるともっといやだな。」（3歳4ヵ月）
- ・「せんべいわらなければおいしいけど。」（4歳4ヵ月）
- ・「うしろギュってひっぱると、まえいくんだよ。」（4歳4ヵ月）
- ・「ぎんなんってさわるとかゆいけど、たべるとおいしいんだよ。」（4歳4ヵ月）
- ・「このアルバムみたら、きっとびっくりするかもしれない。」（4歳4ヵ月）
- ・「もっとおくのほう、たべるとでてくるんだよ。」（4歳4ヵ月）

(11) Tによる発話の実例

- ・「んじゃ、こんなことしちゃおう。」（2歳10ヵ月）
- ・「ここおすとひらくんだよ。」（2歳11ヵ月）

(10)(11)に示した普通条件文のほとんどが、聞き手に対する行為指示を真意としたものであることは注目し得る。この事実は、D条件文の習得を経て（あるいは同時に）、普通条件文が習得されている可能性を示唆するものである。

2.4 2節のまとめ

観察記録の分析から、幼児（N、T）はD条件文、さらには行為指示を真意とする普通条件文（赤塚(1998)はこの種の普通条件文を「予測条件文」と命名している）の日常的なインプットを通して、D条件文及び予測条件文の早期習得を行っていることが明らかにな

った。この分析結果は赤塚(1998)の主張を支持するものである。

3. 間接的要請文の生成及び理解に関わる認知的基盤

録音記録を分析してみると、大人が幼児の行動を規制するのに、D条件文（「～したらダメ」「～して（も）イイよ」）を次のような形で使用する例が見られる。

- (12)・「よそ見してるとこぼすからよそ見しながら食べたらアカンよ。」【③母親→N】
・「飲んでもおしっこさえ出なければ飲んでイいわ。」【③大祖母→T】
・「走ると転げるから走ったらダメだよ。」【④父親→T】

上記の実例の文構造は以下のように図示される。

(13)

[[P]→[Q]] → [D条件文]

(注) →=理由/条件/譲歩 →=理由

そして、Desirabilityの原理から、Qの内容とD条件文形態には次のような関係が構築される。

- (14) a. Q[DESIRABLE] : 「P'して（も）イイ」
b. Q[UNDESIRABLE] : 「P'したらダメ」

(注) P' = P と認識的に同義である内容

そこで、(13)の文構造（以後PQD構造と呼ぶ）及び(14)の対応関係を念頭に置いた上で、(9)の実例（2.3.2を参照のこと）を眺めてみると、これらの実例は、PQD構造における[[P]→[Q]]の箇所を取り出したものであることが分かる。つまり、(9)の実例はPQD構造をBASEとしたPROFILE表現であり、それゆえに、〈禁止〉〈要請〉等の発話行為の効果が生じるのである。

次に、《[Q]→D条件文》の箇所がPROFILEされている実例を列举する。

- (15)・「ここべちゃべちゃだから（入ったら）ダメ。」【④父親→T】
・「あんまり布団の上バタバタしたらダメよ。ねんねちゃん寝てるんだから。」【④母親→N、T】
・「ダメ、せっかく片付けたんだから、出したらダメ。」【④母親→T】
・「上ギュッとしたらアカン、頭軟らかいからギュッとしたらダメ。」（同上）
・「もう（したら）アカンよ、布団が痛むから。」（同上）
・「あぶないって、もうあぶないことしたらアカンって。」【⑤母親→T】

以下に示す実例は、間接的要請文（これらの文を聞いて、幼児は行動を中止している）であるが、これは、《[Q]》の箇所がPROFILEされたものであると考えることができる。

(16)（さらに牛乳を飲もうとするNに向って）

- ・「おなか痛くなる、下痢するよ。」【①母親→N】

↑

[牛乳を飲むと] お腹が痛くなったり、下痢したりするから [牛乳飲んだらダメ]

(17)（赤ちゃんを見にいこうとするN、Tに向って）

- ・「ゆりなちゃん寝てるよ。」【③母親→N、T】

↑

[見に行って騒ぐと] 寝ているゆりなちゃんが起きるから [見に行ったらダメ]

(18) (椅子の背もたれの上に腰掛けようとしているTに向って)

- ・「後ろ、かやるよ。」【③母親→T】

↑

[背もたれに腰掛けると] 後ろにひっくりかえるから [腰掛けたらダメ]

(19) (消したばかりのストーブに触ろうとしているTに向って)

- ・「たけしくん、火傷するよ、それまだ熱いから。」【⑤母親→T】

↑

[触ると] 火傷するから [触ったらダメ]

以上の考察から、間接的要請文は、PQD構造を認知的基盤(BASE)として[Q]のみが顕在化したPROFILE表現であると結論付けられる。したがって、幼児が(16)－(19)の文を聞いて行動を中止したのは、(16)－(19)をPQD構造をBASEとしたPROFILE表現として認識したからであると考えることができる。

4. 間接的要請文の習得過程

前節までの考察を踏まえて、(1)の会話が成立する要件について考えてみよう。まず、幼児A(=T)には、次のような認識(この認識の形成には、過去の経験的知識[皿に取り分けることによってラーメンを冷ますことができる]が深く関与している)が存在していると考えられる。

(20) [[皿を持ってこない]→[ラーメンが熱い(まま)]] → [皿を持ってこないとダメ]
(≒皿を持ってきて)

Tは、この認識を背景として、皿を持ってきてもらう目的で、[Q]（「ラーメンあつい」）を言語化し、それを聴取した幼児B(=N)は、過去の経験的知識(例えば、ラーメンが熱くて食べられなかった時に、皿に取り分けて冷ましてもらうことがあったり、「ラーメンが熱いからお皿ちょうだい」という発言を言った/聞いたことがある)の『呼び起こし』から、(20)の認識にアクセスし、その結果、皿をTに渡したと考えられる。

したがって、(1)の会話の成立要件は次のとおりである。

(21) PROFILE化に関わる能力:

経験的知識の『呼び起こし』による、

- ・PROFILE表現を生成する能力
- ・当該表現([Q])がPROFILE表現であることを理解する能力

(1)以外の幼児(N、T)の間接的要請文使用の実例を挙げる。

(22) Nによる発話

- ・(積み木の上に積み木を重ねようとしているTに向って)

「もう、おちるでしょ。」(3歳5ヵ月)

↑

[重ねると] おちるから [重ねるとダメ]

- ・(お菓子に似ているタブレットの菓を食べようとしているTに向って)

「あっ、それ、おくすりよ。」(3歳6ヵ月)

↑

[食べると] 体が変になるくすりだから [食べたらダメ]

- ・(菓子箱からお菓子を持っていこうとする祖母達に向って)

「おばあちゃんたちのあっちにあるからね。」(4歳4ヵ月)

↑

[持っていかななくても] あっちにお菓子があるから [持っていかななくてイイ]

- 荒木一雄・安井 稔(編)(1992), 『現代英文法辞典』三省堂.
- 池田進一(1991), 「間接的発話行為」『教育心理学研究』Vol. 39, No. 2, pp. 228-238.
- 池田進一(1994), 「間接的要求における理解と記憶」『教育心理学研究』Vol. 42, No. 4, pp. 471-480.
- 石川有紀子・無藤 隆(1990), 「要求表現の文脈依存性——その規定因としての役割関係——」『教育心理学研究』Vol. 38, No. 1, pp. 9-16.
- 太田 朗(1980), 『否定の意味』大修館書店.
- 河上誓作(1984), 「文の意味に関する基礎的研究」『大阪大学文学部紀要』第24巻.
- 河上誓作(編著)(1996), 『認知言語学の基礎』研究社.
- 小泉 保(1990), 『言外の言語学—日本語語用論』三省堂.
- 土屋 俊(1980), 「言語行為論の展開」『言語』Vol. 9, No. 12.
- 仲真紀子・無藤 隆・藤谷玲子(1982), 「間接的要求の理解に関わる要因」『教育心理学研究』Vol. 30, No. 3, pp. 175-184.
- 仲真紀子・無藤 隆(1983), 「間接的要求の理解における文脈の効果」『教育心理学研究』Vol. 31, No. 3, pp. 10-17.
- 西山佑司(1983), 「発話行為」『意味論』(英語学体系5) pp. 627-690. 大修館書店.
- 益岡隆志(編)(1993), 『日本語の条件表現』くろしお出版.
- 毛利可信(1980), 『英語の語用論』大修館書店.
- 森 貞(1989a), 「間接的発話行為理論再考(I)—擬似間接的発話行為理論の提出」『福井工業高等専門学校研究紀要 人文・社会科学』第23号, pp. 1-16.
- 森 貞(1989b), 「間接的発話行為理論再考(II)—純粹間接的発話行為の場合」『福井工業高等専門学校研究紀要 人文・社会科学』第23号, pp. 17-26.
- 安井 稔(1978), 『言外の意味』研究社.
- 山梨正明(1986), 『発話行為』(新英文法選書第12巻) 大修館書店.

〈英文〉

- Ackerman, B.P. (1978), "Children's Understanding of Speech Acts in Unconventional Directive Frames," *Child Development*, pp. 311-318.
- Blakemore, D. (1992), *Understanding Utterances: an Introduction to Pragmatics*. Oxford: Basil Blackwell.
- Gordon, D. and G. Lakoff(1975), "Conversational Postulates," In P. Cole and J.L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. New York: Academic Press, pp. 83-106.
- Green, G.M. (1989), *Pragmatics and Natural Language Understanding*. Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum.
- Leech, G.N. (1983), *Principles of Pragmatics*. London: Longman.
- Levinson, S.C. (1983), *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ramge, H. (1977), "Language Acquisition as the Acquisition of Speech Act Competence," *Journal of Pragmatics* 1. pp. 155-164.
- Searle, J.R. (1975), "Indirect Speech Acts," In P. Cole and J.L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*. New York: Academic Press, pp. 59-82.
- Sperber, D. and D. Wilson(1986), *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Basil Blackwell.
- Thomas, J.A. (1995), *Meaning in Interaction: an Introduction to Pragmatics*. London: Longman.

An analysis of dialogical connectives in Dynamic Pragmatics

久保 進 (松山大学)

1. はじめに

2. 先行研究 (文法化を視野に入れていない分析)

2.1 Maynard's 'convergence'

A. [X. だって Y]構造、 B. Convergence:

- (1) A₁: 少し休暇をとろうかな。 [X]
B₁: だって ずっととってないんでしょ?
A₂: うん
B₂: それならとったら。 (Maynard, 1993:105)

2.2. 蓮沼の '折衷型'

A. [O but P because Q]構造、 B. 「だって」の4つの語法タイプ、

- (2) 向田₁: 人工衛星が飛びはじめたときに、やっぱりあの理屈がどうしてもわからないんですよ。 [O]
吉行₁: だって、ラジオわかる。
向田₂: 全然わかりません、私.....。
吉行₂: ラジオのわからない人に人工衛星は無理ですよ。 [Q]
(蓮沼(1995: 276)よりの引用)
- (2') 向田₁: 人工衛星が飛びはじめたときに、やっぱりあの理屈がどうしてもわからないんですよ。 [O]
吉行₁: [分からないなんてわざわざ言う必要はない]* [P]
だって、ラジオわかる。 {*蓮沼(1995)の論旨に従い、追加。}
向田₂: 全然わかりません、私.....。
吉行₂: ラジオのわからない人に人工衛星は無理ですよ。 [Q]

2.3. 沖の '省略'

A. [O. P だって Q]構造、 B. '省略'、

- (3) 新婦: もおっ! いいかげんにしてよ!
一曲決めるのに何時間かかるの?!
新郎: だって、僕たちの大事な披露宴だよ。 (星里, 1994)
- (3') 新婦: もおっ! いいかげんにしてよ!
一曲決めるのに何時間かかるの?!
新郎: 時間のことはきにするなよ。 だって、僕たちの大事な披露宴だよ。
(星里, 1994; 下線部は久保による)

3. 「だって」の機能的意味

3.1. 対話配列における互換性

- (4) A₁: 少し休暇をとろうかな。 [X]
B₁: だって/ でも ずっととってないんでしょ?
A₂: うん
B₂: それならとったら。 (Maynard, 1993:105; 下線部は久保による)
- (5) 向田₁: 人工衛星が飛びはじめたときに、やっぱりあの理屈がどうしても

わからないんですよ。 [O]

吉行₁: だって/でも、ラジオわかる。

向田₂: 全然わかりません、私……。

吉行₂: ラジオのわからない人に人工衛星は無理ですよ。 [Q]

(蓮沼(1995: 276); 下線部は久保による)

(6) 新婦: もおっ! いいかげんにしてよ!

一曲決めるのに何時間かかるの?!

新郎: だって/でも、僕たちの大事な披露宴だよ。

(星里, 1994; 下線部は久保による)

3.2. 異なった配列

(7) [「だって」は「激励」の行為指示の発語内効力を持つ命令文の発話によって先行される]

A₁: 少し休暇をとろうかな。

B₁: とりなさいよ! だって ずっととってないんでしょ?

A₂: うん。

B₂: それならとったら。(Maynard, 1993:105; 下線部は久保による)

*(7') [「でも」は「激励」の行為指示の発語内効力を持つ命令文の発話によって先行されない]

A₁: 少し休暇をとろうかな。

B₁: とりなさいよ! でも ずっととってないんでしょ?

A₂: うん。

B₂: それならとったら。(Maynard, 1993:105; 下線部は久保による)

(8) [「だって」は「思いと止ませ(discouragement)」の行為指示の発語内効力を持つ命令文の発話によって先行される]

A₁: 少し休暇をとろうかな。

B₁: よしなさいよ! だって ずっととってないんでしょ?

A₂: うん。

B₂: それならよしたら。(Maynard, 1993:105; 下線部は久保による)

*(8') [「でも」は「思いとどませ」の行為指示の発語内効力を持つ命令文の発話によって先行されない]

A₁: 少し休暇をとろうかな。

B₁: よしなさいよ! でも ずっととってないんでしょ?

A₂: うん。

B₂: それならよしたら。(Maynard, 1993:105; 下線部は久保による)

(9) [「だって」は「非関与(non-commitment)」の行為指示の発語内効力を持つ命令文の発話によって先行される]

A₁: 少し休暇をとろうかな。

B₁: すきにしたら! だって あなた自身のことでしょ?

*(9') [「でも」は「非関与」の行為指示の発語内効力を持つ命令文の発話によって先行されない]

A₁: 少し休暇をとろうかな。

B₁: すきにしたら! でも あなた自身のことでしょ?

3.3 '代用(a substitute)'としての「だって」

- A. 問い、
B. 假定、
C. 比較:

(10) [先行する発話が言葉で表現されている場合、「だって」は「反対」の読みを持たない]

H: どうだった。

O: ああ……一笑にふされたよ。

H₂: 私は信じるわよ。だってトモちゃん、確かに見たって言ったもん。

O₂: ありがとう…… (岡崎, 1994)

(10') [先行する発話が言葉で表現されていない場合、まさにその事実によって (*ipso fact*) 「だって」は「反対」の読みを持つようになる]

H₁: どうだった。

O₁: ああ……一笑にふされたよ。

H₂: だってトモちゃん、確かに見たって言ったもん。

O₂: ありがとう……

D. [「反対」の読みの発生条件のさらなる相対的特定化:]

(11) [「だって」が発話の先頭に現れる場合、「反対」の読みが生じやすい]

A: 試験に受かった?

B: だって、勉強してないもん。

(11') [「だって」が発話の先頭に現れない場合、「反対」の読みが生じにくい]

A: 試験に受かった?

B: 勉強してないもん。

E. 結論、

F. 假定

4. 動的語用論における「だって」の分析 (cf. Kubo(1999))

A. 動的語用論の立場: (1)言語の歴史的变化(文法化)を中心にすえた語用論。cf. Hopper and Traugotte(1993)、(2)人間の対話を認知的かつ社会的相互行為のプロセスとして捉える。cf. Kamp and Reyle(1993)、Vanderveken (1994)、Geis(1995)、(3)対話の意味理解には、意味解釈(真理と成功と充足の意味論)のみならず思考(意味内容)の理解とそれに対応する意味表示(対話表示)も必要。その場合、発話行為と対話のタイプは再帰的に(recursively)定義される。cf. Kamp and Reyle(1993)、Vanderveken (1994)、Kubo(1999)

B. 假定

C. 対話表示の一般形式: $F_{\square}^A(F_{\square}^B(P))$

cf. 発話行為理論におけるの発語内行為の一般形式: $F(P)$

D. 3つでしかも3つに限られた場合:

[文法化: 命題内の構成要素(ケース1)から、独立した単位への過程にある(ケース2)、そして独立した単位へ(ケース3)]

ケース1. [「だって」に先行する発話が言葉で表現される場合]

(12) a.(=10)

b. (i) $f_1^B(P) = [私は信じるわよ]$

(ii) $f_2^B(Q = \sim P) = [私は信じるわよ。友ちゃん確かに見たって言ってたもん]$

c. [ああ……一笑にふされたよ] \rightarrow [誰も信じてくれない]

d. $\neg \exists x[\text{信じる}(x, \text{自分の言ったこと})]$.

e. 信じる(私, あなたの言ったこと) $= \exists x[\text{信じる}(x, \text{あなたの言ったこと})]$.

(13) 対話表示: $f_1^B((f_{\text{assert}}^A(P)) \wedge f_2^B(Q = \sim P))$

$f_1^B =$ 「反対(objection)」の言明の発語内効力

$f_2^B =$ 「補足説明 (supplementary explanation)」の言明の発語内効力

$P =$ [誰も信じてくれない]、 $Q =$ [友ちゃんが確かに見たって言っていた]

(14) (i) 「反対」の言明の発語内効力

a. 発語内目的: 言明の発語内目的、

b. 特別な達成の様式: (1)対話の参加者は互いに親しい人間関係にある、(2)話し手は相手の命題を論破しようという発語媒介的意図を持つ、

c. 予備条件: 話し手は相手の信念が誤りであることを前提としている、

d. 命題内容条件: 相手の発話の命題内容が自分の信念と相容れない、

e. 誠実条件: 話し手は非常に誠実であるので、この発話を支援しようと後続の発話を続けて遂行する、

f. 強さの度合い: 強い強さの度合いを持つ。

(ii) 「補足説明」の言明の発語内効力

a. 発語内目的: 言明の発語内目的、

b. 達成の様式: 連続する発話の関係=後者が前者の理由付けとなる。

c. 予備条件: 話し手は自分の発言内容が真であることを前提とする、

d. 命題内容条件: 先行する発話の命題を支援し相互に無矛盾でなければならない。

e. 誠実条件: 話し手は相手を説得しようとする意図があるくらい誠実である。

f. 強さの度合い: 単なる説明よりも強い。

ケース2: [「だって」に先行する発話が削除されている場合]

(15) 対話表示: $f_1^B(\phi) \wedge f_2^B(Q)$

$f_1^B =$ 「反対」の言明の発語内効力、 $f_2^B =$ 「補足説明」の言明の発語内効力

$P =$ [空]; 黙示的 $P =$ [Aが休暇をとろうかななんて躊躇するのがおかしい]

$Q =$ [Aがずっと休暇をとってない]

(16) (i) 「反対」の言明の発語内効力

a. 発語内目的: 言明の発語内目的、

b. 特別な達成の様式: (1)=(14)(i)(b,(1)), (2)=(14)(i)(b,(2))、(3)言葉で表現しないことによって、「反対」気持ちを表現し、「だって」に「反対」の発語内効力を引き継がせようと試みている。

c. 予備条件=(14)(i)(c)、

d. 命題内容条件=(14)(i)(d)、

e. 誠実条件=(14)(i)(e)、

f. 強さの度合い=(14)(i)(f)、

(ii) 「補足説明」の言明の発語内効力

a. 発語内目的=(14)(ii)(a)、

b. 達成の様式：先行の発語内効力を支援するという狙いの特別な達成の様式を持つ、

c. 予備条件=(14)(ii)(c)、

d. 命題内容条件=(14)(ii)(d)、

E. 誠実条件=(14)(ii)(e)、

f. 強さの度合い=(14)(ii)(f)、

ケース3: [「だって」に先行する発話も後続の発話もない場合]

(17) Manager: "Deliver this, please!"

OL: "B-But!" (えーっ!)

Manager: "No buts." (えーっじゃない!) (えーっ=でも*)

OL: "W-Well!" (だってェ!)

Manager: "No wells!" (だってェじゃない!)

OL: "A-All rights!" (Akizuki, R, 1990:85,太字は久保による.)

(18) 真空命題の削除 (Reduction of a vacuou proposition)

$$f_1^B(\phi) \wedge f_2^B(\phi) \Rightarrow [f_1^B \wedge f_2^B](\phi)$$

(19) 対話表示: $[f_1^B \wedge f_2^B](\phi)$

$[f_1^B \wedge f_2^B]$ = 「抗議」の感情表現の発語内効力

$P = []$; 黙示的 $P = [困る; \dots]$

$Q = []$; 黙示的 $Q = [花粉症である; \dots]$

(20) $F_1 \wedge F_2$: 「抗議」の感情表現の発語内効力

a. 発語内目的=(14)(ii)(a)、

b. 達成の様式：(1)親しさの条件：社会的な立場に関わらず、対話参与者は親しい人間関係にある（公的な場でも私的な言葉遣いが許される）、(2)話し手は言葉による発話を控え、「だって」に「反対」の発語内効力を引き継がせることにより「抗議」気持ちを表現している。

c. 予備条件：話し手は相手が自分の甘えを受け入れてくれると信じているという特別な呼び条件を持つ、

d. 命題内容条件：()

e. 誠実条件=(14)(ii)(e)、

f. 強さの度合い：非常に強い。

E. 結論

5. 苛立ちの「だから」の分析

ケース2の例: [「だから」に先行する発話が削除されている場合]

(21) 敬一郎：ニューヨーク行きが本決まりになった。そのことで一度話したいんだ。[打診の発語内効力]

涼子：私、ニューヨークへは行きませんし、それにもうあなたの妻でもございませぬ。[拒否の発語内効力]

敬一郎：だから、その事を含めて、一度じっくり会って……もしもし……聞いているのか？

(例のみ蓮沼(1992)より；[]内は久保の解釈。)

(22) [文法化：命題内の構成要素から、独立した単位へ]

a. 一度じっくり会って話したいから待ってくれないか。[MからN]

b. 待ってくれないか、一度じっくり会って話したいから。[文末辞化]

c. (削除) 一度じっくり会って話したいから(お願いだ)。[感情移入型]

d. だから(一度(じっくり(会って(話したいんだよ)))。)

[後続節の削除プロセス]

[後続節の削除プロセス]

e. だから～[感嘆詞]

(23) (22a)の対話表示: $f_1^B(f_{\text{assert}}^J(\neg M)) \wedge f_2^B(M=N)$

f_1^B = 「思いとどませ」の行為指示発語内効力。 $f_{\text{reject}}^J(M) = f_{\text{assert}}^J(\neg M)$

f_2^B = 「補足説明」の言明の発語内効力

M = 「敬一郎と淳子が一度会って話しをする」、

N = 「淳子が拒否をしない」

(24) (21) = (22d)の対話表示: $f_1^B(\phi) \wedge f_2^B(M)$

f_3^B = 「思いと止ませ」の行為指示の発語内効力～「苛立ち(irritation)」の感情表現の発語内効力、

f_2^B = 「補足説明」の言明の発語内効力

N = [空]; 黙示的 N = 「淳子が待つ」、 M = 「敬一郎と淳子が一度会って話しをする」

(25) (22e)の対話表示: $[f_3^B \wedge f_2^B](\phi)$

$[f_3^B \wedge f_2^B]$ = 「強い苛立ち」の感情表現の発語内効力

(26)

(i) (21) 「思いとどませ」の行為指示の発語内効力

a. 発語内目的: 行為指示の発語内目的、

b. 特別な達成の様式: (1) = (14)(i)(b),(1), (2)相手のこれから先の行動を差し控えさせようという発語媒介的意図を持つ、(3)言葉で表現しないことによって、相手が取ろうとする行動にたいする「反対」気持ちを表現し、「だから」に「反対」の発語内効力を引き継がせようと試みている。

c. 予備条件 = (14)(i)(c)、 d. 命題内容条件 = 相手のこれから先の行動とは相容れない内容である、 e. 誠実条件 = (14)(i)(e)、 f. 強さの度合い = (14)(i)(f)

(ii) 「補足説明」の言明の発語内効力 (=16(ii)).

(27) 新婦: もおっ! いいかげんにしてよ! 一曲決めるのに何時間かかるの?!

新郎: だって、僕たちの大事な披露宴だよ

新婦: 仕事に戻らないと休憩終わっちゃう!

新郎: まだ花束贈呈とか決めなきゃいけない曲がたくさんあるのに。

新婦: **だから** 時間が…あー、もう、主任にイヤミ言われちゃう。

(星里, 1994)

(28) [文法化: 命題内の構成要素から、独立した単位へ]

a. もう時間がない**だから**いいかげんにしてよ。[A[言明]だからB[非難]]

b. いいかげんにしてよ、もう時間がない**だから**。[文末辞化]

c. (削除) もう時間がない**だから**。[感情移入型]

d. **だから** (もう時間が (ない**んだ**って (言ってるでしょう)))。[後続節の削除プロセス]

e. **だから**～[感嘆詞]

(29) 対話表示: $f_3^B(\phi) \wedge f_2^B(M)$

f_3^B = 「苛立ち(irritation)」の感情表現の発語内効力、

N =[空]; 黙示的 N =[新婦がいい加減にする]、 M =[新婦は新郎につき合う時間がない]

(30) (28e)の対話表示: $[f_3^B \wedge f_2^B](\phi)$

$[f_3^B \wedge f_2^B]$ = 「強い苛立ち」の感情表現の発語内効力

(31) (i) (21)「苛立ち」の感情表現の発語内効力

a. 発語内目的: 行為指示の発語内目的、

b. 特別な達成の様式: (1)=(14)(i)(b),(1)), (2)相手のこれから先の行動を差し差し止めようという発語媒介的意図を持つ、(3)言葉で表現しないことによって、相手が取ろうとする行動にたいする「反対」気持ちを表現し、「だから」に「非難」の発語内効力を引き継がせようと試みている。

c. 予備条件=(14)(i)(c)、 d. 命題内容条件=相手のこれから先の行動とは相容れない内容である、 e. 誠実条件=(14)(i)(e)、 f. 強さの度合い=(14)(i)(f)
(ii)「補足説明」の言明の発語内効力(=16(ii))。

6. 「だって」と「だから」の識別

(1) (i) 「だって」は透明な対話接続詞: $f_1^B((f_{\text{assert}}^A(P)) \wedge f_{\text{assert}}^A) = \phi$

(ii) 「だから」は不透明な対話接続詞: $f_1^B((f_{\text{assert}}^A(P)) \wedge f_{\text{assert}}^A) \neq \phi$

(2) 「補足説明」の命題の限定含意の方向:

(i) 「だって」: $Q = \neg P$ (ii) 「だから」: $M = N$

7. 結語と今後の展望

参考文献

- Carston, R. (1993) 'Conjunction, explanation and relevance', in *Lingua* 90, 27-49.
- Evans, D. A. (1982) *Situations and Speech Acts: Toward a Formal Semantics of Discourse*, Ph. D. dissertation, Stanford University.
- Ford, C. E. and Mori, J. (1994) Causal markers in Japanese and English conversations: a cross-linguistic study of interactional grammar, *Pragmatics* 4-1, 31-61.
- Franken, N (1998) *The Status of the Principle of Relevance in Relevance Theory*, a talk at the 6th IPrA Conference, Reims, France.
- Geis, Michael (1995) *Speech Acts and Conversational Interaction*, Cambridge.
- 蓮沼昭子(1991)「対話における『だから』の機能」、『獨協大学外国語学部紀要』、第4号, 137-153.
- 蓮沼昭子(1995)「談話接続語『だって』について」、『獨協大学外国語学部紀要』、第5号, 265-281.
- Hopper, P.J. and E.C. Traugotte (1993) *Grammaticalization*, Cambridge.
- Ivasko, L and Eniko N. T. (1998) *Types and Reasons of Communicative Failures: A Relevance Theoretical Approach*, a talk at the 6th IPrA Conference, Reims, France.
- Kamp, H. and U. Reyle (1993) *From Discourse to Logic: Introduction to Modeltheoretic Semantics of Natural Language, Formal Logic and Discourse Representation Theory*, Dordrecht: the Netherlands.
- Kubo, Susumu (1999) On an Illocutionary Connective *datte*, in K. Turner (ed.) *The Semantics/ Pragmatics Interface from Different Points of View*, CRiSPI vol.1, Elsevier Science.

- Maynard, S.K. (1993) *Discourse Modality--Subjectivity, emotion and voice in the Japanese language*, John Benjamins.
- 沖裕子(1996) 「対話型接続詞における省略の機構と逆接」、『論集 言葉と教育』, 97-111.和泉書院。
- Searle, John (1969) *Speech Acts: an essay in the Philosophy of Language*, Cambridge.
- Searle, John (1979) *Expression and Meaning*, Cambridge University Press.
- Searle, J., F. Kiefer and M. Bierwisch (eds.) (1980) *Speech Act Theory and Pragmatics*, D.Reidel.
- Searle, J. and Vanderveken, D. (1985) *Foundations of Illocutionary Logic*, Cambridge University Press.
- Takahara, P.O. (1998) *Pragmatic Functions of Discourse Markers in English and Japanese*, Plenary Talk at the 6th IPrA Conference, Reims, France.
- Takeuchi, Michiko (1998) Conceptual and Procedural Encoding: Cause-consequence Particles in Japanese, in Rouchota, V and A. H. Jucker (eds.) *Current Issues in Relevance Theory*, John Benjamins.
- Vanderveken, Daniel (1990) *Meaning and Speech Acts*, vols. 1, Cambridge University Press.(『意味と発話行為』、久保進 監訳、西山文夫、渡辺扶美枝、渡辺良彦 訳、ひつじ書房、1997年)
- Vanderveken, Daniel (1994) *Principles of Speech Act Theory*, Univ. of Quebec at Montreal. (『発話行為の原理』、久保進 訳、松柏社、1995年)
- Vlemings, J (1998) *Donc, Donc Deduction?*, a talk at the 6th IPrA Conference, Reims, France.

引用作品一覧

- 秋月りす 『OL進化論』,1990.(Akizuki, Risu, *The OL Comes of Age* (translated by Y. Tamaki; annotated by J.Yoshida), Kodansha/Kodansha International,1994)
- 岡崎二郎 『アフター0』、小学館、1990.
- 星里もちる 『結婚しようよ』、小学館、1994.

Appendix: 発話行為の再帰的定義:

1. $f_X^A(X)$ は話し手Aによる発話行為である。その場合、 f_X^A は命題あるいは話者の異同を問わず別の発話行為Xを項として取る発語内効力である。
 2. $f_X^A(\neg X)$ も発話行為であり、 $f_X^A(X)$ の命題否定(*propositional negation*)の発話行為である。
 3. $\neg f_X^A(X)$ も発話行為であり、 $f_X^A(X)$ の発語内否定(*illocutionary negation*)の発話行為である。
 4. $f_X^A(P)$ と $f_Y^A(Q)$ が同じ話し手Aによる別個の発話行為であるならば、 $f_X^A(P) \wedge f_Y^A(Q)$ 、 $f_X^A(P) \vee f_Y^A(Q)$ 、 $f_X^A(P) \Rightarrow f_Y^A(Q)$ 、 $f_X^A(P) = f_Y^A(Q)$ もまた発話行為である。
 5. これ以外は発話行為ではない。
- ただし、命題と発語内効力の再帰的定義はVanderveken(1990)に従う。

(連絡先: e-mail: kubo@cc.matsuyama-u.ac.jp
FAX: 089-977-5270)

川柳の語用論

小泉 保

関西外国語大学

1. 連句の成立

日本固有の韻文学の根底は和歌である。和歌は形式的に上の句（5・7・5）と下の句（7・7）に分けられるが、この上の句（長句）と下の句（短句）を別な人物が詠み合わせることにより、連歌形式が成立した。

連歌は、少数の詠者が長句と短句を交互に詠みつづけて 100 韻、50 韻もしくは歌仙（36 句）を連鎖状に形成したものである。

連歌は南北朝時代に隆盛を見せたが、江戸期に入ると歌仙式がよろこばれ、中期以降「俳諧」と称して庶民文学の地位を確保するに至った。俳聖芭蕉はこの俳諧の達人であった。今日言う「連句」とは「俳諧」のことを指し、正しくは「俳諧之連歌」という。俳諧とは滑稽を意味するため、「俳諧之連歌」とはすなわち滑稽を主意として詠まれる連歌ということになる。

俳諧と連歌との差は「俳言」（和歌、連歌に用いない漢語や俗語）の有無にあると言われている。連歌を含めて日本の古典の伝統をそのまま受けつぎ、ただ、その表現に漢語や俗語を取り入れて、連歌の面倒な方式をやや緩めたのが、貞門の俳諧である。貞門俳諧の祖は松永貞徳であるが、次に「貞徳翁十三回忌追善俳諧」（1665）100 韻における最初の 3 句のみ取り出しておこう。

野は雪にかかるれどかれぬ紫苑哉（蟬吟）

〈かる＝枯れる、紫苑＝師恩〉

鷹の餌ごひと音をばなき跡（季吟）

〈なき＝鳴き＝無き〉

飼狗のごとく手馴し年を経て（正好）

〈雪→鷹、鷹→狗という連想「物付」（ものづけ）が働いている〉

このように、俳諧は、連歌の余興として行なわれる、笑いを求める言葉遊びであった。芭蕉は歌仙をとり入れ、貞門・談林俳諧のような 1 つの付けでなく、匂い、響き、移り、あるいは面影の要素を入れて付ける余情付けを以て、俳諧を真面目な芸術へと導いて行った。

ここに芭蕉俳諧の最高峰と見なされている『炭俵集』（1694）の中から「むめがかの巻」を例示しておこう。

（発句） むめがゝにのっと日の出る山路かな（芭蕉）

（脇句） 処々に雉の啼きたつ（野坡）「前句」

（第三） 家普請を春のてすきにとり付て（野坡）「付句」

(第四) 上のたよりにあがる米の値

(芭蕉)

この内、「発句」が独立して現代で言う「俳句」となり、「第三」が遊離して「川柳」になったと考えられる。というのは、川柳は「前句」と「付句」という関係から発生したものである。連句でいえば、脇句が前句で第三が付句に相当する。

芭蕉も前句付けをしきりに稽古したと言われている。

いのち嬉しき撰集のさた	(去来)	「前句」	(7・7)
さまざまに品かはりたる恋をして	(凡兆)	「付句」	(5・7・5)
浮世の果は皆小町なり	(芭蕉)		『猿蓑』

2. 川柳の発生

このように、前句付けが単独文芸として発展していく過程で、前句と付句の対比関係に変化が生じ、初代柄井川柳を経て、特異な単句形式が生み出されるようになった。かくて前句が単純化し、抽象化、観念化されるようになった。

切りたくもあり、切りたくもなし (前句)

(川柳 1) 泥棒をとらへて見れば我子也 (付句) 『新撰犬筑波集』

やがて、「前句」と提示して「付句」を懸賞募集するよになった。

江戸の俳諧師は前句付興行を「万句寄」と称し、その入選句をまとめて発表した。これは元禄の末頃から急速に流行するようになった。応募者は自分の作品に入花料(投句料)をそえて近くの「取次」とどけると、これらを集めて、点者が選定し、「勝句」を決定した上で、これを刷り物にして披露した。勝句の中でも優秀なものには賞品が与えられた。

さて、前句付点者の中でもっとも人気があったのが柄井川柳(1718~90)である。宝暦12年(1762)には、彼の寄句は1万を突破している。彼は「1句にて句意のわかり易き」独立性の強い付句だけを集めて前句を省いてしまった。つまり、「題にもたれし句作りは、さらりと柳に流せしより」付句が独立して「川柳」と呼ばれるようになったのである。

かくて、川柳が存命中に勝句をつづった『誹風柳多留』は初篇(明和2年、1765)から、『柳多留』23篇(寛政元年、1789)にまで及んでいる。川柳の死後も引きつがれ『誹風柳多留』167篇(天保9年、1838)をもって終わっている。天保12年は水野忠邦による天保の改革が軌道にのった時期であることを考えあわせる必要がある。

これらの選句形式は、高番、中番、末番の3部に分けられ、それぞれの番の勝句に順位をつけたものである。これら3つの番の区別は、句の内容が雅か俗かという点によるもので、末番がもっとも卑俗でセクシュアルなものであった。とくに、末番の勝句は『誹風末摘花』と題して初篇(1776)から4篇(1801)まで刊行されてきた。

3. 連句の認知論的分析

「発句」を「俳句」と言い換えたのは正岡子規であるが、彼の主張する写生派的態度は外界を知覚的に描写することで、ここに俳句および連句を認知の方式で分析する可能性がでてくると思われる。

例えば、発句を認知論の立場から分析すれば、まず「前景」と「背景」に区分することができる。前景は知覚の焦点となるある出来事もしくはある状態である。背景はこれを取り巻く環境を意味する。前景を []、背景を () でくくりにしよう。

(発句) (([日がのっと出た] 梅の香に) 山路で)

脇句は発句を背景とし、さらに脇句内に前景と背景の別をもっている。

(脇句) (([雉が啼き立つ] 処々に) 発句)

第三にも脇句と同じような分析が当てはまる。

(第三) (([家普請にとり付いた] 春の手すきに) 脇句)

こうした連句の意味分析をラネカーの認知方式によって公式化することもできるが、これについては別の機会に発表したいと考えている。

4. ジョークの語用論的分析

私はすでに『ジョークとレトリックの語用論』(1997)で、ジョークの「落ち」について語用論的分析を試みてきた。ジョークは人を笑わせるために意図的に落ちの仕組み構えているが、川柳の方にも読者を苦笑へと誘いこむ要因が含まれているようである。すなわち、ジョークが明示的は笑いを求めているのに対し、川柳は潜在的は笑いをねらっていると言えよう。従って、ジョークにも川柳にも共通した笑いの構図が隠されているのではないかと思う。そこで、ジョークの落ちについて要点だけ説明しておこう。

(ジョーク 1) 「睡眠薬」

医者が夫人を呼んで「ご主人は絶対安静が必要です。ここに睡眠薬があります。」と言った。

夫人が「いつ主人に飲ませたらいいのでしょうか。」と尋ねると、医者は「ご主人ではなく、あなたが飲むのです。」(ラスキン 例 24 ii)

ジョークの落ちとは同じ条件において正常な上位項から異常な下位項へと急に移行させることである。

「条件」	/ (妻) 病気の夫に飲ませる	(正常) 「上位項」
睡眠薬		↓
	\ (医者) 口うるさい妻に飲ませる	(異常) 「下位項」

睡眠薬は病人に飲ませるものだという一般常識になっている予想を裏切って、付き添いの妻に飲ませるという異常な医者の要求に人々は笑うのである。

さて、こうしたジョークの「落ち」の構造を、どのように川柳の方へ適用することができるだろうか。

5. 川柳の語用論的分析

「正常」から「異常」へというジョークの落ちに対して、川柳では「異常」の方だけが提示されるのである。ただし、異常と言っても、人間の弱点や平凡な現実がテーマとされている。要するに、「ホンネ」と「タテマエ」という対立からすれば、川柳は常にホンネを付句の下位項として表現したものである。そして、ホンネの裏にタテマエの前句すなわち上位項がひそんでいると考えることができる。ここに、表現されホンネの下位項から、これと対立するタテマエの上位項が推意されるとき、川柳から笑いが誘い込まれると思う。理想と現実の落差に人々は納得してうなづくのである。

まず、川柳の前句の効用から考察することにしよう。次は『柳多留』6篇から選んだ句である。

首尾の能いこと 首尾の能いこと (前句)

(川柳 2) あねさんと言いやと芸者子を育て (付句)

「人前では、私のことをおっかさんと呼んではいけないよ。姉さんと呼ぶんだよ。」と幼子に芸者がいい聞かせている。ここに落ちの構図を持ちこめば、次のように分析されるであろう。

「条件」 / (家中) 自分のことをおっかさんと呼ぶ
子育て

\ (人の前) 自分のことをあねさんと呼ぶ

自分を若く見せ、親子の関係を他人に悟らせまいとする芸者の職業上の知恵はまことに「首尾の能いこと」で、いまでもどこかで秘かに行なわれているようである。この川柳では、前句がうまく働いている。

次は『誹風柳多留』初篇から取った有名な例である。

はなれ社すれ はなれ社すれ な (前句)

(川柳 3) 子が出来て川の字形りに寝る夫婦 (付句)

付句は平凡ではおえましい夫婦生活を描いているが、前句を通して次のような前提や推意を引き出すことができるのではないかと思われる

/ (前提) 子が出来る前は二人で寝ていた (上位項)

寝るときの

↑

スタイル \ (現実) 子が出来た後は三人で寝る (下位項)

↓

(推意) 夫婦は別々に寝ることになる

「はなれ社すれ」という前句があると、前提や推意を把握するのが容易になる。

次は前句はないがよく知られている川柳である。

(川柳 4) 泣き泣きもよい方をとるかたみわけ 『誹風柳多留』17篇

この句の対立内容は以下のようなだろう。本来親の葬儀の後であるから、金銭問題は慎むべきであるが、現実にはタテマエよりもホンネが優先する。

/ 無欲（正常、非金銭的）＜タテマエの上位項＞
 形見分け ↑
 \ 強欲（異常、金銭的）＜ホンネの下位項＞

このように、川柳はホンネの下位項を長句形式で表現しているが、タテマエの上位項を推意するとき、その面白みが明確になる。

次の川柳は一種の語呂合わせで、ジョークと同じ枠組みでとらえることができる。

（川柳 5） 裸でと言はれて娘はをかしがり

「裸で」というのは嫁入り支度なしにという内意であるが、仲人が「先方では裸でもいいから来てもらいたそうで」と婿側の意向を伝えるのを聞いて、娘は裸体を連想してくすくす笑いだす情景を述べている。

/（仲人）嫁入り支度なしで（裏の意味）

「裸で」

\（娘）裸体で（表の意味）

では、ここで『誹風末摘花』4篇から一句を選んで分析しておこう。

（川柳 6） とっさんは留守かか様がきなさいと

これは子供の使いによる口上で、江戸時代の不倫関係を題材にしているが、社会の裏面をのぞくことができる。ここでもホンネとタネマエがはっきり対立している。

/（世間の倫理）他の男を呼び入れてはならない（タテマエ）

亭主の留守

\（女房の意向）浮気の相手呼び入れたい（ホンネ）

ここで最近の川柳を二三扱ってみよう。

（川柳 7） ピカソとも思うわが子のクレヨン画

/（周囲の人）訳の分からない絵（正常、タテマエ）

わが子のクレヨン画

\（親）ピカソのような絵と思う（異常、ホンネ）

↓

親の欲目

この句には親馬鹿の様子がよく出ている。

（川柳 8） なお変になっててくる美容院

/（理想的意向）きれいになるはず（タテマエ）

美容院

\（現実的結果）行く前よりも変な姿になっている（ホンネ）

↓

髪型や化粧が似合っていない

最下位の項は下位項から推意で引き出された理由を示している。

これで川柳の本質が解明されたわけではない。こうした分析を通して川柳の諧謔性が明確になってくると思う。俳句は俳諧からタテマエの道を開拓して純文学へと志向してきたが、川柳はホンネを告白することによって、俳諧の特質であった滑稽の精神をいまなお保持し、大衆の共感を呼んでいる。

また、川柳には時代を敏感に反映しているものが多い。最後にひとつだけ例示しておこう。

(川柳 9) 賞味期限きれた女房と生きてます

この句には理想と現実との食違いがよく出ている。

/	内にあって楽しい夫婦生活を送りたい	(理想)
		↓
女房の賞味期限	\	が切れて味気ない生活をがまんしている
		(現実)
		↓

夫婦も互いに年をとってしまった

ここでは「賞味期限」という最近流行の用語がうまく使用されている。こうした特性から、川柳により時代思考の変遷を追うこともできるし、「川の字形りに寝る夫婦」のように不易の平凡性を賞味することもできる。

以上紹介した川柳の語用論的分析方法はひとつの試みに過ぎない。別な角度からの接近ももちろん可能である。だが、語用論によって、文学的鑑賞や文学批評に客観的手順を示唆することができればと願っている。

参考文献

- | | | | |
|-----------------|--------|--|-------|
| 尾藤三柳 | (1989) | 『川柳入門—歴史と鑑賞』 | 雄山閣出版 |
| 東 明雄 | (1978) | 『連句入門』 | 中央公論社 |
| 小泉 保 | (1990) | 『言外の言語学 日本語語用論』 | 三省堂 |
| ” | (1997) | 『ジョークとレトリックの語用論』 | 大修館書店 |
| Levinson, S. C. | (1983) | Pragmatics. Cambridge, Cambridge University Press. | |
| 岡田 甫 | (1967) | 『川柳未摘花詳釈 全』 | 有光堂書房 |
| Raskin, V | (1985) | Semantic mechanism of humor. Dordrecht, D. Reidel | |
| 下川 弘 | (1994) | 『江戸古川柳の世界』 | 講談社 |
| 山沢英雄 | (1995) | 『俳風柳多留 (1, 2, 3)』 | 岩波書店 |



趣 意 書

言語記号は音声表現と意味内容が恣意的に結合したものであるという F. D. ソシュールの規定から現代言語学がスタートしました。したがって、音声部門から出発し意味部門に帰着するのが言語研究の常道と見なされるようになりました。20 世紀前半に始まった音声極における探究は構造言語学により音韻理論として結実しましたが、意味極への考察は等閑視されました。しかし、20 世紀も後半に入ると生成文法に触発されて意味面における開拓が活発となり、意味の成分分析という形で進展し、やがて生成意味論や概念意味論などの手により文の意味構造の解明がはかどってきました。

発話の意味は、その発話の場面を考慮に入れない限り、解釈不可能となるケースが数多くあります。いや、発話をその状況において意味分析してこそ「生きたことば」の実相を明らかにすることができるのです。

すでに、J. L. オースティンや J. R. サールなどの主張する発話行為を通して「ことばの力」が認識され、H. P. グライスの指摘により含意の威力、すなわち「言外の意味」が注目されるようになりました。ここに、「語用論」は言語学の一部門として、S. C. レビンソンなどにより体系化が推し進められました。さらに、語用論の分析手法を用いて皮肉や比喩を含む文学の分野への追究も可能となり、談話分析や会話分析によりそれらのルールを探り出す作業も着実にこなされています。

広い視野に立てば、語用論の研究は意味論、統語論、社会言語学、心理言語学、認知言語学それに日本語を始めとするさまざまな語学教育などの活動が交差する領域を占め、21 世紀へ向けての展望は洋々たるものがあります。

とくに、1993 年には第 4 回国際語用論会議が神戸で盛大に開催され、語用論に対する認識と理解が深まり、語用論研究はますます盛んになってきています。そこで、語用論を中心テーマとする発表と研究の場を作らなければならないと考えます。すなわち、日本における語用論の研究を組織化して、研究者相互の修練と若い研究者の育成を目指し、研究発表と機関誌を通して学理の充実と拡大、および国外研究団体との交流を促進するため「日本語用論学会」の設立を呼びかける次第であります。この趣旨をご理解の上、ご参加下さるようお願いいたします。

1998年10月

設立発起人

林 宅男	林 礼子	東森 勲	井出 祥子
飯田 仁	今井 邦彦	井上 逸兵衛	笥 壽雄
神尾 昭雄	河上 誓作	金水 敏	児玉 徳美
小泉 保	小西 友七	久保 進	国広 哲弥
中村 芳久	中右 実	成田 義光	西光 義弘
西山 佑司	大沼 雅彦	坂原 茂	澤田 治美
柴谷 方良	杉本 孝司	山頭 良子	高原 脩
高司 正夫	土屋 俊	内田 聖二	上田 功
山梨 正明	矢野 安剛	安井 稔	余 維

(A B C 順)

日本語用論学会規約

第1章 総則

第1条 本会は「日本語用論学会」(The Pragmatics Society of Japan)と称する。

第2条 本会は語用論ならびに関連分野の研究に寄与することを目的とする。

第3条 本会は次の事業を行う。

1. 大会その他の研究集会の開催
2. 機関誌の発行
3. その他必要な事業

第4条 本会は諸事業を推進するため運営委員会および事務局を置く。

第5条 運営委員会の承認を経て、支部を各地区に置くことができる。

第2章 会員

第6条 本会の会員は通常会員の1種類とする。

第7条 通常会員は、本会の趣旨に賛同し所定の手続きを経て本会に登録された個人および団体とする。

第8条 会員は諸種の会合および事業の通知を受け、事業に参加することができる。また、所定の手続きを経て、研究集会で研究発表し、機関誌に投稿することができる。

第3章 役員

第9条 本会に次の役員を置く。

会長	1名
事務局長	1名
運営委員	若干名
会計監査委員	1名

また、顧問を置くことがある。

第10条 会長および事務局長は、運営委員の推薦によるものとする。

第11条 運営委員は会員より選出するものとする。任期は2年とし、再選を妨げない。

第12条 運営委員は会長、事務局長を加えて運営委員会を構成する。その任務・権限等は次の通りとする。

1. 研究集会にかかわる事項の決定
2. 予算および収支決算の承認
3. 機関誌の編集・発行にかかわる事項の決定
4. 会計、庶務、渉外の事務
5. その他運営委員が必要と認めたもの。

第13条 本会の規約の変更は、運営委員会の発議により、会員総会で承認を得る。

第14条 会計監査委員は会員の中から選出する。任期は2年とし、1期に限る。

第4章 会議

第15条 定例会員総会は、年に1回会長がこれを招集する。また、必要な場合、臨時会員総会を招集することができる。

第16条 定例運営委員会は、必要に応じて、年に1回以上招集される。

第5章 会計

第17条 本会の運営経費は会費、寄付金等を以てこれに当てる。

第18条 運営委員会は、予算案および収支決算書を作成する。予算案および収支決算書は会計監査委員の監査を経て、会員総会で承認を得る。

第19条 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

第6章 事務局

第20条 事務局を事務局長もしくは運営委員の所属する大学に置く。

第21条 事務局は会費の徴収、会場の手配、会員に対しての連絡などをとり行う。

『語用論研究』投稿規定

1. 投稿は会員に限るものとする。
2. 投稿論文は未発表の論文であること。
3. 使用言語は原則として日本語または英語とする。
4. 投稿締め切りは8月末日、採否決定を10月末日、刊行を12月とする。
5. 枚数・書式など
 - a. 原稿枚数：A4横書き15枚以内（参考文献を含む）。
 - b. 書式：余白は上・下30mm、左・右25mmとする。32行×38文字を標準とし、できるだけ標準に合わせる。
 - c. 原稿の1ページ目はタイトルのあと1行アケで氏名、そのあと2行アケで本文を続ける。
 - d. 例文の前後は1行アケル。
 - e. 各節の前は1行アケル。
 - f. 原稿はそのまま写真印刷するので、鮮明に仕上がるよう文字の大きさ、濃さに注意する。ページ番号は裏面に鉛筆で記す。
6. 注は参考文献の前にまとめて付ける。
7. 参考文献の書式は以下の例にならうこと。

Austin, J. L. 1962. *How to Do Things with Words*. London: Oxford University Press.

Grice, H. P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Hopper, P. J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givón ed. *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.

小泉 保. 1990. 『言外の言語学——日本語語用論——』東京:三省堂。

野崎昭弘. 1995. 「言葉と言葉の間」『月刊言語』(2月号) 62-69. 東京:大修館書店。
8. 提出部数：原稿は4部提出する。なお、1部は鮮明なものとする。
9. 氏名（ふりがな）、住所、所属、職名、連絡先電話番号、Fax番号、e-mailアドレスを別紙に記入する。
10. 送付先：〒617-0827 長岡京市竹の台E1-102 児玉徳美（「投稿論文在中」と朱書のこと）

日本語用論学会第1回(1998年度)大会
PROGRAM & ABSTRACTS

1998年12月5日発行

編集発行 日本語用論学会

代表者 小泉保

発行者 日本語用論学会

〒573-1001

大阪府枚方市北片鉾町16-1

関西外国語大学外国語学部 澤田治美 研究室内

Tel:0720-56-1721 Fax: 0720-55-5552

印刷:(株)河北印刷
